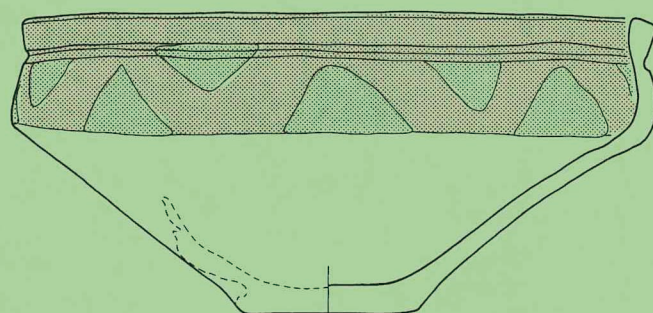


高崎市文化財調査報告書第177集

高崎情報団地Ⅱ遺跡

第1分冊

《縄文時代編》



2 0 0 2

高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書第177集

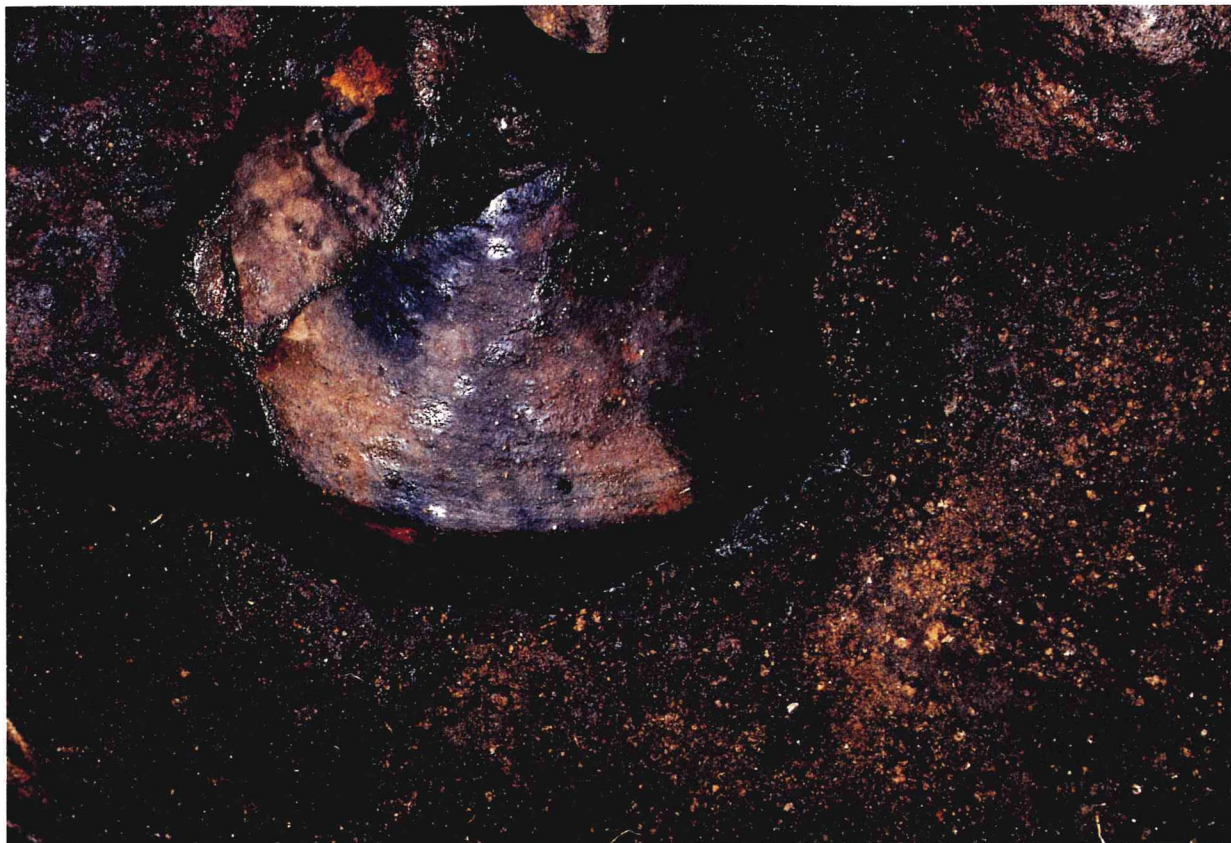
高崎情報団地Ⅱ遺跡

第 1 分冊

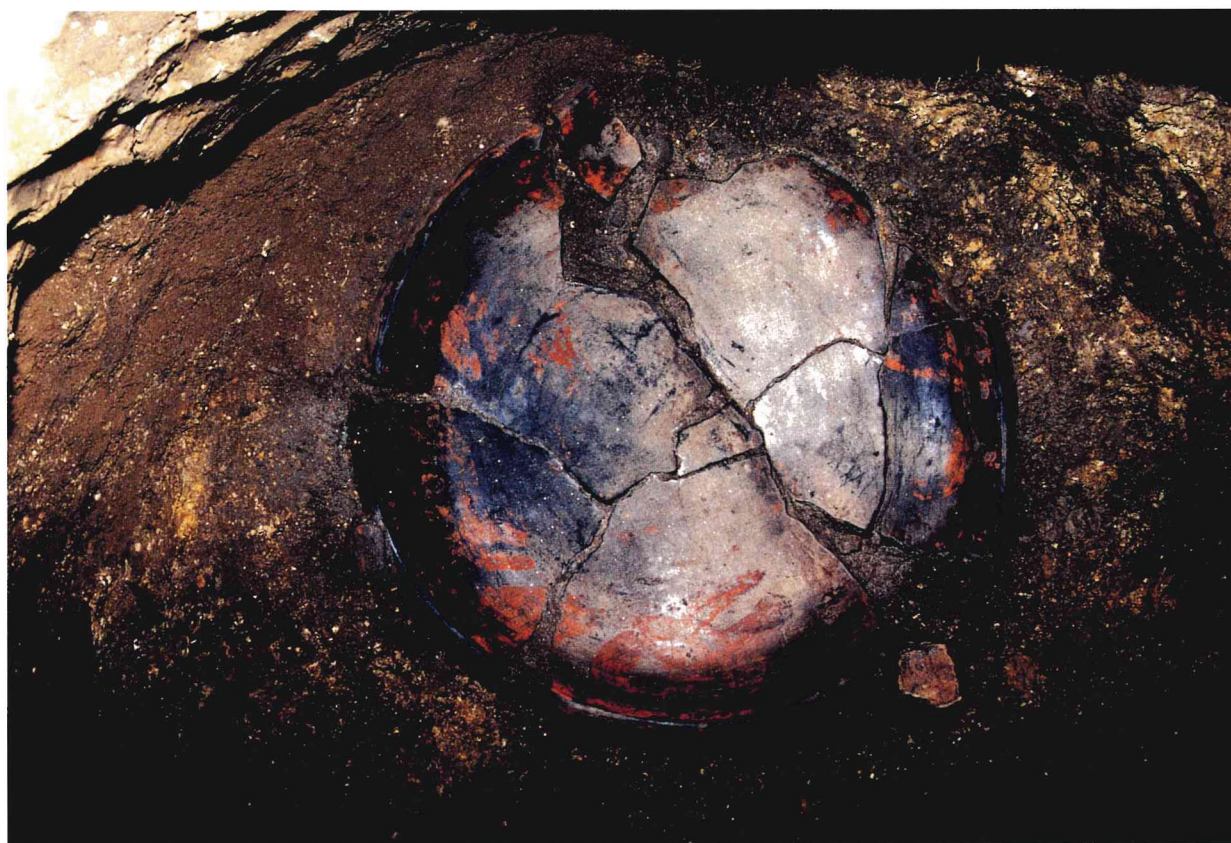
《縄文時代編》

2 0 0 2

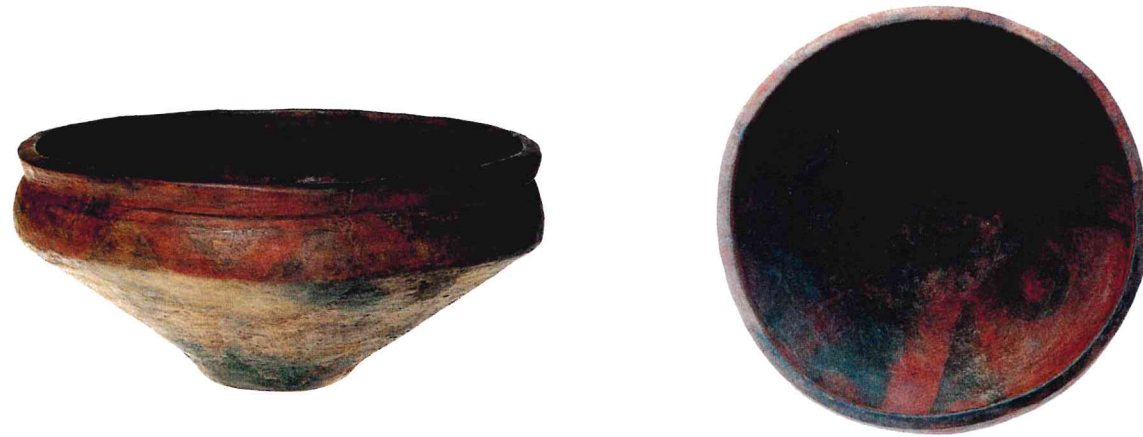
高崎市教育委員会



3区154号土坑（SK154） 彩色土器出土状況



3区187号土坑（SK187） 彩色土器出土状況



3区154号土坑（SK154）出土彩色土器



3区187号土坑（SK187）出土彩色土器



2区縄文遺構外出土ヒスイ製大珠

序

高崎市は、地理的に日本の中心となる群馬県の中央やや西よりに位置します。上毛三山とよばれる赤城山・榛名山・妙義山、また浅間山などの名峰を遠くに望み、眼下には烏川・碓氷川・井野川、また利根川などが清々と流れる豊かな自然は、私たちの誇りとするものです。

この豊かな自然の中、私どもの郷土高崎は、古来より交通の要衝として発展してまいりました。市内各所の遺跡からは、古代の官道である東山道の跡が発見されており、江戸時代の中仙道や日光例幣使街道など、数多の交通路が高崎で収束しているかのごとき歴史がございます。

現代でも、鉄道では上越・北陸新幹線の分岐点であり、両毛線や上越線・信越線の起点になっております。また道路では、関越自動車道と北関東自動車道の分岐点、また各国道の起点となっております。

こうした交通の要衝であり、かつ地震などの自然災害が少ないという立地条件の中で、高崎市中大類町の井野川のほとり、高崎インターチェンジ近くに、あらたな情報拠点として期待される高崎情報団地の造成工事が、群馬県企業局によって計画されたわけであります。そして今回、その第二期工事分において埋蔵文化財が破壊される範囲について、記録保存のために発掘調査した結果を、高崎情報団地Ⅱ遺跡として報告することになった次第です。本書は、その第一分冊として、縄文時代中期集落についての基礎資料を、皆様に提供することを目的としています。

高崎市教育委員会では、高崎情報団地造成の方針が決定して以来、群馬県企業局をはじめとする関係各部局と調整の上、平成九年度に調査に着手し、おおよそ二年半をかけて発掘調査をおこない、その後二年半をかけて整理作業を終了させました。この間、膨大な遺構・遺物を記録しつつも、小中学生の職場体験学習や見学・実習などを積極的に受け入れ、高崎の次代を担う子供たちに、郷土史に直に触れる機会をたびたび設けることができましたことを、うれしく思います。

最後になりますが、足かけ五年間にわたり、ご指導ご協力を惜しまれなかった関係各位に心より感謝申し上げます。縄文時代編の序といたします。

平成14年3月

高崎市教育委員会
教育長 砂田 威夫

例言

1. 本書は、高崎情報団地造成の二期工事に伴い、高崎市教育委員会が群馬県企業局から委託を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査報告書の一部であり、縄文時代遺構・遺物についての資料集である。縄文時代遺構・遺物の写真と、自然科学分析の結果および縄文土器観察表については、本書巻末に添付のCD-ROM中に掲載した。
2. 遺跡は、すでに高崎市遺跡調査会で発掘調査を実施し、調査報告書が刊行されている高崎情報団地遺跡（長井ほか1997）の東に隣接するため、高崎情報団地Ⅱ遺跡と命名した。遺跡所在地は、群馬県高崎市中大類町2～327番地であり旧字名は御所ノ宮・寺ノ浦・北ノ西・上川原。調査面積は合計のべ41,577.1m²であった。
3. 調査経過および担当者は以下の通りである。

平成9年度	事務局	：野尻弘・神戸聖語・村井田雅明・倉澤かおる
	調査担当	：鷲谷亨信・角田真也
平成10年度	事務局	：野尻弘・神戸聖語・倉澤かおる
	調査担当	：関口修・村井田雅明・小林直人
平成11年度	事務局	：野尻弘・神戸聖語・倉澤かおる・斉藤寛方
	調査担当	：角田真也・小林直人・成田健太郎（臨時職員）
平成12年度	事務局	：野尻弘・神戸聖語・倉澤かおる・斉藤寛方
	整理担当	：関口修・小林直人
平成13年度	事務局	：野尻弘・結城千尋・斉藤寛方・片平映里
	整理担当	：関口修・角田真也
4. 本書の編集・執筆は、高崎市教育委員会教育部文化財保護課学芸員角田真也がおこなった。
5. 本書は基礎資料をできる限り図化し、提供するにするという編集方針をとっているが、整理期間と紙面の都合により、土層堆積状況図（セクション図）は省略せざるをえなかった。
6. 本書では、原則として各遺構出土資料のうち、土器は小破片を除き、器形のわかる破片を取り上げた。彩色土器については、全ての破片を取り上げた。石器については定型的な石器全てを取り上げたが、2区遺構出土の石器については実測作業が完結しなかったため、一部の資料については代わりに写真を掲載した。
7. 遺構番号は調査時のままで採用している。当初、遺構番号は通し番号をつけていたが、12区～19区は、区ごとに遺構番号をつけているためご注意いただきたい。
8. 遺物番号は、報告書作成時に任意につけたものである。
9. 本報告の整理期間は平成13年6月～平成14年3月まで、作業時間は8:30～15:00であった。作成に従事した作業員は、浅野芳子・影山秀子・丸橋恵子・塚本福代・湯浅ます枝である。平成14年1月に浅野・湯浅が抜け、井上ゆかり・小林みさ子・田村初江・中村キヌエ・松本伸子が加わった。2月には写真整理のため、小池亨・中村貢が加わった。
10. 角田の指導の下、石器の実測は丸橋・浅野、土器の実測・採拓は影山・湯浅・塚本が主におこなった。また、遺構写真の整理は小池亨、遺物写真の整理は中村貢が主におこなった。
11. 本書に掲載した遺物は、高崎市上滝町の文化財収蔵庫に保管してある。最終的な収納は、報告書の頁ごとにおこなっている。問い合わせ先は、高崎市教育委員会文化財保護課（直通：027-321-1292）である。
12. 本書編集に当たり、以下の方々にご指導・ご協力いただいた。記して感謝したい（敬称略；50音順）。
飯島静男・井上慎也・鹿沼栄輔・神戸聖語・菊池実・久保誠二・熊沢孝之・小宮俊久・鷲谷亨信・島田志野・早田勉・大工原豊・時枝務・長井正欣・永嶋正春・長谷川福次・福田貫之・松島榮治・松村和男・村井田雅明・山口逸弘・若狭徹。
13. 出土資料についての専門的な分析は、以下の組織および個人に依頼しておこなった。

出土骨片の脂肪酸分析	……………	(株)パリノ・サーヴェイ、坂井良輔氏
------------	-------	--------------------

出土骨片の同定	……………	(株)パリノ・サーヴェイ、金子浩昌氏
火山灰、樹種同定、リン・カルシウム分析、放射性炭素年代測定等	……………	(株)古環境研究所
遺跡の基盤層について	……………	早田勉氏
石器石材鑑定	……………	飯島静男氏
彩色土器保存処理と復元	……………	(有)武蔵野文化財修復研究所・石原道知氏
彩色土器顔料鑑定	……………	小泉好延氏（石原道知氏仲介による）

凡例

1. 本書中の区設定図、遺構配置図、遺構図中の方位は、国土座標第Ⅸ系に基づく。
2. 本書中の遺構番号には、以下の記号を略称として用いた。

竪穴住居跡・住居跡	……………	SI
土坑・墓墳・集石遺構・埋甕	……………	SK
3. 本書では、土墳（墓墳）と貯蔵穴を特に区別せず、一括して土坑と呼んだ。
4. 本書中で触れる火山噴出物については、以下の略称を用いた。

浅間A軽石（天明3年：1783年噴火）	……………	As-A
浅間B軽石（天仁元年：1108年噴火）	……………	As-B
浅間C軽石（3世紀後半噴火）	……………	As-C
浅間D軽石（約4,500年前噴火）	……………	As-D
浅間総社軽石（約11,000年前噴火）	……………	As-Sj
5. 本書中の遺構実測図はSIを1/80、SKを1/40として図示した。
原則として、平板測量でおこなった1/40の原図を元にしており、集石土坑や埋甕、3区の土坑については、遣り方測量でおこなった1/10の原図を元にしてている。
6. 遺構図は原則として、その遺構の使用中の様子を想定し、それを完掘状況として掲載しており、堀方については報告していない。また、遺構を構成する前提となる遺物（集石遺構や配石炉の配石・埋甕の土器など）については、遺構図に反映させたが、遺構を構成する前提とはならない遺物については遺構図に入れていない。
7. 石器実測図および土器実測図は大きさによって1/2と1/4の縮尺を使い分け、図版中に明示した。詳細は以下の通りである。

1/2掲載の石器	：石鏃・石匙・石錐・石槍・打製石斧・磨製石斧・棒状礫
1/4掲載の石器	：磨石・凹石・石棒・石皿・多孔石
1/2掲載の土器	：破片
1/4掲載の土器	：完形土器・復元実測した土器・特に大形の破片
8. 本書中に写真で掲載した2区の石器については、次のような縮尺で掲載した。

約1/1掲載	：石鏃・石錐・スクレイパー・磨製石斧
約1/2掲載	：打製石斧・磨石・凹石
約1/4掲載	：石皿・多孔石
9. 彩色土器破片の表面の実測は、裏面を下にして、平らに置いた状態でおこなった。裏面はそれを180度展開したものである。彩色モチーフのわかるものについては、実線で彩色部分を囲んだが、彩色が剥げかかってモチーフがわからないものについては、着色のみで表現した。
10. 組織名について、以下の略称を用いた箇所がある。
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団→群馬埋文、高崎市遺跡調査会→調査会、高崎市教育委員会→高教委

目次

口絵・序・例言・凡例・目次	
第Ⅰ章 遺跡の概要	
第1節 調査の経過	
（1）調査に至る経緯	1
（2）調査方法	1
（3）調査日誌抄	2
（4）調査面積	4
第2節 遺跡の立地	
（1）地理的環境と景観	4
（2）周辺遺跡	7
（3）発掘区の配置と遺跡内の微地形	7
（4）各時代の概要	8
第Ⅱ章 2区の遺構・遺物	
第1節 遺構	
（1）概要と基本土層	10
（2）竪穴住居	12
（3）土坑	23
第2節 遺物	
（1）概要	29
（2）土器・土製品	30
（3）石器	60
第Ⅲ章 3区の遺構・遺物	
第1節 3区の遺構	
（1）概要と基本土層	73
（2）土坑	75
（3）SK154とSK187	85
第2節 3区の遺物	
（1）概要	90
（2）土器	90
（3）彩色土器	131
（4）石器	149
第Ⅳ章 6・8・16・18区の遺構・遺物	
第1節 遺構	
（1）概要	176
（2）土坑	181
第2節 遺物	
（1）概要	183
（2）土器	183
（3）石器	186

付 編	
第1節 高崎情報団地Ⅱ遺跡における更新世終末期の古環境復原のための資料	
第2節 彩色土器の保存と復元	
第3節 高崎情報団地Ⅱ遺跡出土の縄文式土器表面の赤彩顔料分析	
補 遺	
抄 録	

挿 図 目 次

第1図 高崎情報団地Ⅱ遺跡位置図	5
第2図 高崎情報団地Ⅱ遺跡と周辺の縄文時代遺跡	6
第3図 高崎情報団地Ⅱ遺跡発掘区配置図	9
第4図 2区基本土層柱状図	10
第5図 2区縄文時代遺構配置図	11
第6図 2区検出の竪穴住居（1）	12
第7図 2区検出の竪穴住居（2）	13
第8図 2区検出の竪穴住居（3）	14
第9図 2区検出の竪穴住居（4）	15
第10図 2区検出の竪穴住居（5）	16
第11図 2区検出の竪穴住居（6）	17
第12図 2区検出の竪穴住居（7）	18
第13図 2区検出の竪穴住居（8）	19
第14図 2区検出の竪穴住居（9）	20
第15図 2区検出の土坑（1）	23
第16図 2区検出の土坑（2）	24
第17図 2区検出の土坑（3）	25
第18図 2区検出の土坑（4）	26
第19図 2区縄文遺構外出土ヒスイ製大珠	29
第20図 2区住居出土土器（1）	30
第21図 2区住居出土土器（2）	31
第22図 2区住居出土土器（3）	32
第23図 2区住居出土土器（4）	33
第24図 2区住居出土土器（5）	34
第25図 2区住居出土土器（6）	35
第26図 2区住居出土土器（7）	36
第27図 2区住居出土土器（8）	37
第28図 2区住居出土土器（9）	38
第29図 2区住居出土土器（10）	39
第30図 2区住居出土土器（11）	40
第31図 2区住居出土土器（12）	41
第32図 2区住居出土土器（13）	42
第33図 2区住居出土土器（14）	43

第34図	2区住居出土土器(15)	44
第35図	2区住居出土土器(16)	45
第36図	2区住居出土土器(17)	46
第37図	2区住居出土土器(18)	47
第38図	2区住居出土土器(19)	48
第39図	2区住居出土土器(20)	49
第40図	2区住居出土土器(21)	50
第41図	2区土坑出土土器(1)	51
第42図	2区土坑出土土器(2)	52
第43図	2区土坑出土土器(3)	53
第44図	2区土坑出土土器(4)	54
第45図	2区土坑出土土器(5)	55
第46図	2区土坑出土土器(6)	56
第47図	2区土坑出土土器(7)	57
第48図	2区土坑出土土器(8)	58
第49図	2区土坑出土土器(9)	59
第50図(写真1)	2区遺構出土石器(1)(石鏃・石錐・スクレイパー・磨製石斧)	61
第51図(写真2)	2区遺構出土石器(2)(打製石斧1)	62
第52図(写真3)	2区遺構出土石器(3)(打製石斧2)	63
第53図(写真4)	2区遺構出土石器(4)(打製石斧3)	64
第54図(写真5)	2区遺構出土石器(5)(打製石斧4)	65
第55図(写真6)	2区遺構出土石器(6)(打製石斧5)	66
第56図(写真7)	2区遺構出土石器(7)(打製石斧6)	67
第57図	2区遺構出土石器(8)(棒状礫1)	68
第58図	2区遺構出土石器(9)(棒状礫2)	69
第59図	2区遺構出土石器(10)(磨石・凹石・敲石)	70
第60図	2区遺構出土石器(11)(石皿)	71
第61図	2区遺構出土石器(12)(多孔石)	72
第62図	3区遺構配置図	73
第63図	3区基本土層兼SK87土層堆積状況図	74
第64図	3区検出の土坑(1)	76
第65図	3区検出の土坑(2)	77
第66図	3区検出の土坑(3)	78
第67図	3区検出の土坑(4)	79
第68図	3区検出の土坑(5)	80
第69図	3区検出の土坑(6)	81
第70図	3区検出の土坑(7)	82
第71図	3区検出の土坑(8)	83
第72図	3区検出の土坑(9)	84
第73図	SK154・SK187遺物出土状況図および土層堆積状況図	85
第74図	3区土坑出土土器(1)	91
第75図	3区土坑出土土器(2)	92

第76図	3区土坑出土土器(3)	93
第77図	3区土坑出土土器(4)	94
第78図	3区土坑出土土器(5)	95
第79図	3区土坑出土土器(6)	96
第80図	3区土坑出土土器(7)	97
第81図	3区土坑出土土器(8)	98
第82図	3区土坑出土土器(9)	99
第83図	3区土坑出土土器(10)	100
第84図	3区土坑出土土器(11)	101
第85図	3区土坑出土土器(12)	102
第86図	3区土坑出土土器(13)	103
第87図	3区土坑出土土器(14)	104
第88図	3区土坑出土土器(15)	105
第89図	3区土坑出土土器(16)	106
第90図	網代痕ある焼成粘土塊	106
第91図	3区土坑出土土器(17)	107
第92図	3区土坑出土土器(18)	108
第93図	3区土坑出土土器(19)	109
第94図	3区土坑出土土器(20)	110
第95図	3区土坑出土土器(21)	111
第96図	3区土坑出土土器(22)	112
第97図	3区土坑出土土器(23)	113
第98図	3区土坑出土土器(24)	114
第99図	3区土坑出土土器(25)	115
第100図	3区土坑出土土器(26)	116
第101図	3区土坑出土土器(27)	117
第102図	3区土坑出土土器(28)	118
第103図	3区土坑出土土器(29)	119
第104図	3区土坑出土土器(30)	120
第105図	3区土坑出土土器(31)	121
第106図	3区土坑出土土器(32)	122
第107図	3区土坑出土土器(33)	123
第108図	3区土坑出土土器(34)	124
第109図	3区土坑出土土器(35)	125
第110図	3区土坑出土土器(36)	126
第111図	3区土坑出土土器(37)	127
第112図	3区土坑出土土器(38)	128
第113図	3区土坑出土土器(39)	129
第114図	3区土坑出土土器(40)	130
第115図	3区土坑出土彩色土器(1)	131
第116図	3区土坑出土彩色土器(2)	132
第117図	3区土坑出土彩色土器(3)	133

第118図	3区土坑出土彩色土器（4）	134
第119図	3区土坑出土彩色土器（5）	135
第120図	3区土坑出土彩色土器（6）	136
第121図	3区土坑出土彩色土器（7）	137
第122図	3区土坑出土彩色土器（8）	138
第123図	3区土坑出土彩色土器（9）	139
第124図	3区土坑出土彩色土器（10）	140
第125図	3区土坑出土彩色土器（11）	141
第126図	3区土坑出土彩色土器（12）	142
第127図	3区土坑出土彩色土器（13）	143
第128図	3区土坑出土彩色土器（14）	144
第129図	3区遺構外出土彩色土器（1）	145
第130図	3区遺構外出土彩色土器（2）	146
第131図	3区遺構外出土彩色土器（3）	147
第132図	3区遺構外出土彩色土器（4）	148
第133図	3区出土石器（1）石鏃・石匙・石錐・石槍	149
第134図	3区出土石器（2）磨製石斧	149
第135図	3区出土石器（3）打製石斧①	150
第136図	3区出土石器（4）打製石斧②	151
第137図	3区出土石器（5）打製石斧③	152
第138図	3区出土石器（6）打製石斧④	153
第139図	3区出土石器（7）打製石斧⑤	154
第140図	3区出土石器（8）打製石斧⑥	155
第141図	3区出土石器（9）打製石斧⑦	156
第142図	3区出土石器（10）打製石斧⑧	157
第143図	3区出土石器（11）打製石斧⑨	158
第144図	3区出土石器（12）打製石斧⑩	159
第145図	3区出土石器（13）打製石斧⑪	160
第146図	3区出土石器（14）棒状礫①	161
第147図	3区出土石器（15）棒状礫②	162
第148図	3区出土石器（16）棒状礫③	163
第149図	3区出土石器（17）棒状礫④	164
第150図	3区出土石器（18）磨石・凹石①	165
第151図	3区出土石器（19）磨石・凹石②	166
第152図	3区出土石器（20）石皿①	167
第153図	3区出土石器（21）石皿②	168
第154図	3区出土石器（22）石皿③	169
第155図	3区出土石器（23）石皿④	170
第156図	3区出土石器（24）多孔石①	171
第157図	3区出土石器（25）多孔石②	172
第158図	3区出土石器（26）多孔石③	173
第159図	3区出土石器（27）多孔石④	174

第160図	3区出土石器（28）石棒①	175
第161図	6区遺構配置図	176
第162図	8区遺構配置図	177
第163図	16区遺構配置図	178
第164図	18区遺構配置図	179
第165図	6・8・16・18区検出の土坑	180
第166図	6・8区土坑出土土器（1）	182
第167図	6・8区土坑出土土器（2）	183
第168図	18区土坑出土土器（1）	184
第169図	18区土坑出土土器（2）	185
第170図	（写真8）6・8・16・18区土坑出土石器	186

表 目 次

表1	2区竪穴住居一覧表	21
表2	2区土坑一覧表	27
表3	3区土坑一覧表	86
表4	6・8・16・18区土坑一覧表	181

第Ⅰ章 遺跡の概要

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査対象地は、高崎市中大類町の、利根川の支流である井野川右岸である。対象地のすぐ北には、関越自動車道の高崎ICがあり、東京都心からはおよそ100kmの距離である。この政治経済の中心地に近く、また自然災害の少ない立地が、情報通信産業の集積地として期待され、群馬県企業局による工業団地造成が計画されたわけである。

対象地のすぐ西では、平成4～6年度まで高崎情報団地の一期工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査がおこなわれた。その結果、帆立貝形古墳を中心とした大小の古墳群、同時代及びその前後の居住区の一部、東山道とみられる道路状遺構、平安末の水田跡などが発見された。

平成7年度、新たな高崎情報団地造成計画書が群馬県企業局から高崎市に提出された。対象地は約4.5ヘクタールで、高崎情報団地遺跡からは道路を隔てた東となり、古墳群と居住域が東に連続することが予想された。

高崎市教育委員会は、開発者である群馬県企業局と話し合いを重ねたが、既に情報団地造成の計画は、用地の買収もほぼ終わるなど、造成目前の段階まで進んでいた。このため高崎市教育委員会では、記録保存やむなしとの結論に達し、本調査の前に遺跡の全体像をつかむための試掘調査が必要と回答した。

両者の合意のもと、試掘調査を関口修が担当し、平成8年5月7日から5月21日まで、66本のトレンチを設定して行われた。その結果、井野川右岸近くの低台地では古墳時代住居の濃密な分布を、低台地から低地に変換する地点では古墳周溝と埴輪の出土を、低地部では浅間B軽石(As-B)に覆われた水田跡の存在を確認した。また、井野川の河川敷の一部では洪水層と水田土壌と見られる粘質土層を確認した。

試掘調査の結果報告書を企業局に提出し、再度話し合いの上、平成9年度から平成13年度にかけて埋蔵文化財発掘調査事業を行うことが確定し、覚書が取り交わされた。平成9年度初頭より、高崎市教育委員会は発掘担当者に市職員2名を充て、直営事業にて調査をおこなう方針を固め、発掘調査計画が決定した。

(2) 調査方法

今回、発掘調査の対象となった地点は、高崎市中大類町の旧字名で字御所ノ宮・字寺ノ浦・字北ノ西・字上川原にある。高崎市教育委員会では、通常、遺跡を命名する際、町名と字名を組み合わせている。そして広域にわたる遺跡では、字名を全て羅列することを慣例としている。しかし、一次調査地点については、中大類町字御所ノ宮・字稲荷、宿大類町字万相寺・字塚ノ越に所在するものの、これを羅列するのではあまりに煩雑であるため、事業名を採って「高崎情報団地遺跡」という名称を使用した。そこで今回の地点についてもこれを踏襲し、「高崎情報団地Ⅱ遺跡」と呼ぶことにした。試掘調査の結果、遺跡は河川敷で遺構が確認出来ない部分を除いて、広大な区域に存在することがわかったため、本調査の対象は開発対象区域のうち、保存が約束された公園部分を除いた全域となった。

具体的な調査の方法は、以下の通りである。まず、遺構確認の効率化のため、As-Bまで大型バックホーで掘削した。純層の堆積がない場所では、As-B混土層までを掘削、黒褐色土上面で中近世遺構の精査及び遺構の調査をした。この方法は効率化のためには致し方ないと判断し採用したが、As-Bより上から掘り込まれているはずの中近世遺構の上部は、掘削により破壊され、残存するのは柱穴や堀など深い遺構の下半部のみとなってしまったという問題があった。

古代～縄文時代遺構の調査は、遺構面を探りつつ、しかし実際には、ほとんど井野川泥流層上面まで大形バックホーで掘削し、遺構の精査及び遺構の調査に移った。

遺構の土層堆積状況図は、原則として竪穴住居跡については二本以上取り、土坑は一本以上取ることとした。また、平面図は、平板と空中撮影写真実測を併用し、集石土坑や埋甕及び土器出土状態などは、必要に応じて簡

易遣り方測量（水系レベルは目測合わせ）や遣り方測量で1/10図を作成した。遺構写真撮影は、35mmカメラを用いてモノクロネガ及びカラーリバーサル写真を、空中写真撮影は業者に委託し、中判カメラにてモノクロネガおよびカラーリバーサル写真を撮影した。

国土座標及びレベル基準杭は、調査区の道路上に鋌打ち、及び調査区内の杭打作業を業者に委託した。遺構実測のための調査基準杭は、光波測量器（国土地理院認定3級トータルステーション）を用い、ここから調査区内に落とした。出土遺物は、光波測量器を用いて平面位置及び標高を手作業で記録し、必要に応じて整理作業の段階で出土地点の図化作業をおこない、ドット図を作成した。

以上のような方法で、平成9年度には、1区～8区までの発掘調査を終了し、9区の調査に着手した。平成10年度には、9区～15区までの発掘調査を終了した。そして、平成11年度に、16区～19区までの発掘調査をおこない、全ての発掘調査を終了したわけである。

基礎整理作業は、発掘調査と併行して平成9年度より行われ、遺物の水洗・注記などの遺物整理作業が、発掘調査終了時にはほぼ終わっていた。調査の一段落した平成11年12月からは、遺構台帳とトレース原図を兼ねた遺構カードの作成をおこない、この年度内に完成させた。

平成12年度には、本格的に報告書作成のための作業に入り、関口が弥生時代以降の部分について、実測等の遺物整理作業を始め、小林は遺構の整理などを担当した。平成13年度には、関口単独で整理作業を担当し、報告書を刊行する予定だったものの、進捗状況が思わしくないため、6月途中から角田が、未着手だった縄文時代部分について、整理作業を分担しておこなうこととなった。また、平成14年2月になって小泉範明が第2分冊を担当することとなった。

こうした経過があるため、角田が編集した本書（第1分冊）と、第2分冊および第3分冊とは、編集方針が異なっていることを断っておきたい。

今回、本書縄文時代編の遺構・遺物整理に割けた時間は、実質8ヶ月で、人員の確保もままならなかった。そこで、遺構外出土遺物については、原則として取り上げないこととし（例外は2区のヒスイ製大珠と3区の彩色土器・有舌尖頭器・網代痕ある焼成粘土塊である）、5名の作業員のうち、3名を土器、2名を石器の担当として、分業体制で実測・拓本作業を進めた。土器は実測委託に出した10数点をのぞいては、作業員の分業により実測・拓本・トレース作業を終了させた。石器の実測は、チャコ入れを角田がおこない、作業員が作成した図を再度角田が訂正する形でおこなった。

遺構に関しては、平成11年度に作成していた遺構カードに基づき、全ての縄文遺構を掲載対象としたが、平成10年度に調査した遺構の一部に、原図が紛失しているものがあり、一部掲載を断念せざるを得なかった。

なお、2区出土の石器については実測が間に合わなかったため、縮尺率を実測図に準じて一定にし、写真で掲載、概要を知って頂くこととした。

（3）調査日誌抄

1997（平成9）年度

- 4月18日（金）発掘器材搬入。担当は角田・鷺谷。
- 4月21日（月）1区 重機による掘削開始。As-B層を検出。ジョレンがけで水田面を追う。
- 5月6日（火）2区 表土掘削・ジョレンがけによる遺構確認作業開始。
- 6月3日（火）2区 西側の縄文遺物包含層、発掘開始。
- 7月7日（月）2区 SK14・SK18（縄文時代埋甕）発掘。
- 7月14日（月）2区 SI19（古墳）・SI33（縄文住居）発掘。
- 7月31日（木）2区 SI49から磨製石斧出土。
- 9月3日（水）2区 調査区が水没。早出して終日排水にあたる。
- 10月8日（水）2区 柱穴から縄文時代のヒスイ製大珠出土。出土遺構の時期は不明。

- 10月9日（木）2区 空中写真撮影。
- 10月16日（木）3区 掘削機による表土掘削開始。これより調査体制を2班に分ける。
- 10月27日（月）3区 ジョレンがけによる遺構確認作業で縄文時代土坑多数検出。
- 10月31日（金）3区 縄文時代彩色土器出土。
- 11月5日（水）4区 表土掘削。4区は鷺谷が担当する。
- 11月6日（木）3区 土坑の発掘が続き、袋状のものが多いことがわかる。担当角田。
- 11月11日（火）5区 As-B下水田検出。担当鷺谷。
- 12月4日（木）3区 土坑調査ほぼ終了、写真撮影。
- 12月19日（金）6区 重機による掘削と、As-B下水田検出作業。担当角田。
- 2月4日（水）8区 調査開始。担当鷺谷。
- 2月5日（木）7区 表土掘削。担当鷺谷。
- 3月17日（火）9区 中世面遺構調査。

1998（平成10）年度

- 4月7日（火）6区 中世堀の調査継続。担当は関口・小林へバトンタッチ。
- 4月16日（木）6区 調査終了。
- 4月22日（水）10区 掘削に着手。
- 8月31日（月）11区 住居重複激しい。調査継続。
- 9月17日（木）12区 調査に着手。
- 9月29日（火）13区 調査に着手。
- 11月25日（水）14・15区 表土掘削。
- 2月16日（火）16区 重機により表土掘削し、遺構確認。

1999（平成11）年度

- 4月7日（水）調査再開。担当は角田・小林。調査員として成田が加わる。滝沢匡・池田敬が6月まで来援。
- 6月3日（木）17区 古墳周堀確認。6区のSZ3（3号墳）の続きか。担当角田。
- 7月30日（金）18区 18区SZ1（18区1号墳）調査。担当角田。
- 10月7日（木）19区 遺構確認。担当角田。
- 11月23日（火）発掘作業すべて終了。
- 11月24日（水）整理作業を本格的に開始。接合・図面整理に着手。
- 12月10日（金）遺構カード（台帳兼トレース原図）づくり開始。
- 2月2日（水）遺構カード作成ほぼ終了。エクセルにて遺構一覧表の作成開始。
- 3月16日（木）遺物水洗・注記ほぼ終了。接合作業は次年度へ継続。

2000（平成12）年度

- 4月5日（水）図面整理再開。担当は関口・小林。古墳時代遺物の復元と実測を開始。
- 3月21日（水）16区 土器実測・復元。

2001（平成13）年度

- 4月6日（金）16区 土器の実測・復元を継続。縄文遺物の抽出をおこない、多数になることを確認。
- 6月22日（金）角田が縄文時代の整理を分担することになる。関口は古墳時代の整理を継続。
- 7月12日（木）縄文土器・石器の実測続く。この頃角田は試掘等で留守がち。
- 12月17日（月）遺物観察表づくり、遺構・遺物トレース。
- 1月17日（木）縄文時代編レイアウト作業にはいる。レイアウト案作成の余裕なく、版下に直接張り込み。
- 2月11日（月）縄文時代編レイアウト作業終了。2区石器は、遺物写真撮影後すぐに、レイアウト。
- 2月18日（月）印刷製本する部分を入稿。

3月1日（金）CD-ROM部分の1校と同時に、印刷製本部分の2校を入稿。

3月15日（金）調査報告書納品・発行となる。

（4）調査面積

1区：2,056.6㎡、2区：4,646.6㎡、3区：1,783.7㎡、4区：259.9㎡、5区：708.4㎡、6区：7,051.2㎡、7区：3,002.6㎡、8区：177.7㎡、9区西：1,699.7㎡、9区東：2,435.6㎡、10区：1,251.8㎡、11区：696.5㎡、12区：1,064.4㎡、13区：870.5㎡、14区：889.3㎡、15区：197.5㎡、16区：3,395.8㎡、17区：1,333.3㎡、18区：6,829.6㎡、19区：1,226.4㎡

合計 41,577.1㎡

第2節 遺跡の立地

（1）地理的環境と景観（第1図）

高崎情報団地Ⅱ遺跡は、高崎市街中心地から東へ約4km、行政区画でいう中大類町に位置する。高崎市を北西から南東にかけて縦断する井野川の両脇には、自然堤防状の低い台地が連なっているが、高崎情報団地Ⅱ遺跡は、この井野川右岸に立地しており、住居址群が見つかったのはこの低台地上である。

北側の井野川とは別に、南には一貫堀川と一貫堀放水路とがある。一貫堀放水路は、一貫堀川と井野川をつなぐ人工的な水路である。一方、遺跡地の西で一貫堀放水路と分岐する一貫堀川は、幾多の改修でその姿は相当変化しているが、現在でも左右に河岸段丘状の地形があり、また川が大きく蛇行する痕跡が明治時代の陸軍迅速図で確認できる。このため少なくとも一貫堀川の、井野川に近い部分については、旧来より自然河川であったとみられる。現在の遺跡周辺では、こうした周辺河川の流れは緩やかで、二毛作水田の平坦な地形が広がっている。しかし、地元の古老の話によると、昭和40年代に実施された圃場整備の前には、井野川に向けて数メートルほどの深さの谷が幾筋か入っており、セリなどが群生していた場所があるという。また、太平洋戦争中やその前後頃に、勤労奉仕で堤を構築・補修した際、丘を削って堤の土に使ったこともあるという。

つまり、現在観察できる平坦な地形は、現代人によって作り出されたものであり、かつて遺跡周辺は、蛇行する河川に沿って低い台地が連なるような起伏のある地形であったものと考えられる。

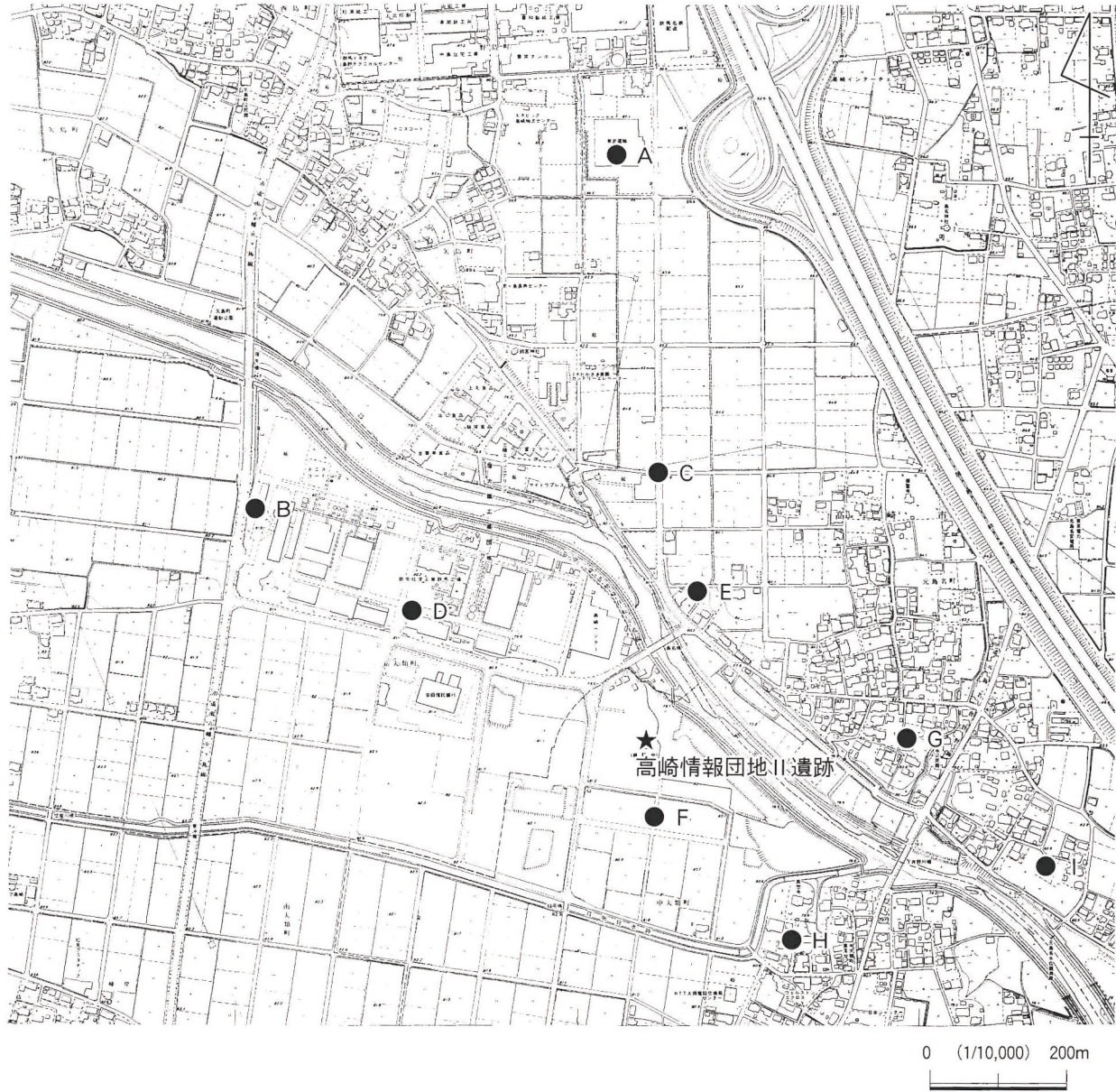
現在でも、川沿いにわずかに残る複雑な地形は、多様な生物をはぐくんでいる。調査区近隣では、ごく最近までキツネが崖に穴を掘り営巣していたとのことであり、発掘調査に着手した頃には、キジのつがいとヒナの姿をたびたび見かけた。在来種のタンポポの群生は春の訪れを告げ、ツクシやノビルを摘みにくる地元のご婦人の姿もまた、折々の季節を感じさせた。井野川は、一時の水質汚濁も改善されており、春や秋の天気の良い日には、コイやナマズをねらう釣り人の姿があった。

遺跡周辺の気候は、太平洋側内陸性気候であり、必ずしも穏やかとは言い難いが、おおむね過ごしやすい。夏場の気温は高いが、湿度は低めで、体感的には東京などの太平洋沿岸よりは涼しく感じる。冬場には乾燥した冷たいからっ風が吹き砂塵が舞うため、最近まで樫ぐね（屋根の高さくらいまで及ぶ常緑広葉樹の生け垣）を屋敷の北西側に持つ家が多かった。こうした風の影響で土壌が浸食されたことにより、検出される竪穴住居の覆土が薄かったり、古墳墳丘が平夷されている可能性も考えられる。

遺跡からの景観は、北東に赤城山、北西に榛名山がよく見え、さらに目を移すと浅間山が遠くにそびえ、さらに西に目をやると妙義・御荷鉾山系の山々が連なっている。浅間山は、夏には遠く靄にかすんで存在感がないが、初冬の冠雪から春先にかけては、乾燥した透明な空気の中、真っ白に雪化粧した雄大な姿をみせつける。古代東山道が西に向かってこの山を目指しているのは、群馬県内ではよく知られた話であるが、この遺跡に住んでいた縄文人もまた季節を知り、また遠く信州へのしるべとしたことも、想像に難くない。



第1図 高崎情報団地Ⅱ遺跡位置図



A 元島名瓦井遺跡

高崎市遺跡調査会文化財調査報告書第39集（1995）

B 天神久保遺跡

高崎市文化財調査報告書第64集（1985）

C 遺物包蔵地

高崎市文化財調査報告書第155集（1998）

D 宿大類万相寺遺跡

高崎市文化財調査報告書第66集（1985）

E 元島名遺跡

高崎市文化財調査報告書第6集（1979）

F 遺物包蔵地

高崎市文化財調査報告書第155集（1998）

G 遺物包蔵地

高崎市文化財調査報告書第155集（1998）

H 遺物包蔵地

高崎市文化財調査報告書第155集（1998）

I 中内出遺跡

群馬県遺跡台帳（1972）

（2）周辺遺跡（第2図）

井野川流域には多くの遺跡が存在するが、本書では紙面の都合上詳細な分布地図を掲載できなかった。遺跡分布状況については、高崎市文化財調査報告書第155集『高崎市遺跡分布地図』（高崎市教育委員会1998）を、市内各縄文時代遺跡の内容については、『新編高崎市史資料編1 原始古代Ⅰ』（高崎市史編纂室2000）などをご参照いただきたい。以下、簡単に縄文時代のみの概要をまとめ、記載しておく。弥生時代以降については、第2分冊および第3分冊をご参照頂きたい。

縄文時代に限っていえば、井野川周辺の遺跡数はそう多くない。しかし、高崎情報団地Ⅱ遺跡の周辺には、草創期の有舌尖頭器が出土した元島名瓦井遺跡、後期前葉の敷石住居が見つかった宿大類万相寺遺跡、後期中葉の墓墳の見つかった元島名遺跡など、重要な遺跡が点在している。

井野川左岸の元島名瓦井遺跡は、平安時代の水田遺構が調査された幾分低湿な土地である。水田跡を調査後、下部の状況を確認するため深掘りしたところ、泥流層上部から、縄文時代草創期の槍先形の尖頭器が1点出土している。前期の土器は、宿大類山鳥天神遺跡や宿大類村西遺跡・南大類稻荷遺跡・高崎情報団地遺跡などで土器が出土している。中期の遺跡は、最も数が多い。井野川右岸では、宿大類万相寺遺跡・高崎情報団地遺跡・宿大類天田遺跡・矢島町増殿遺跡・宿大類山鳥遺跡・南大類稻荷遺跡などがある。また、井野川左岸では、鈴ノ宮遺跡・元島名遺跡などが知られる。後期は宿大類万相寺遺跡・矢島町増殿遺跡・鈴ノ宮遺跡、元島名遺跡などがあり、全て後期前半に属す。宿大類万相寺遺跡では、後期前半の竪穴住居跡が3軒発見されている。そのうちの1軒は、柄鏡形敷石住居跡である。

（3）発掘区の配置と遺跡内の微地形（第3図）

発掘区の番号は、企業局側からの引き渡しの要請に基づき、調査に着手した順に任意に与えたものである。開発工事に配慮し、調査終了とともに発掘区ごとに開発者側に引き渡した。

発掘対象地の北部分にあたる、9・10・11・12・13・16・19区はこの微高地にのっており、徐々に標高を下げながら2区や18区のある南東方向に延びている。それに対して、南西方向の1・4・6区はやや低い。また、東端の7区は井野川右岸の旧河川敷にあたる部分である。標高は、北部の12区付近で82m前後であり、南及び東に向かって低くなる。

特に本書に関係の深い2区と3区について詳述すると、2区は、標高79～80mで周辺より高く安定した地形の場所である。中世館址や古墳時代と縄文時代中期の住居址群を発見し調査した。風などの自然営力によるとみられる浸食と、弥生時代以降の開発による破壊、直近では昭和40年代の圃場整備によって削平されていることなどから、残存状態は劣悪であった。さらに、2区の西よりでは地山が一部黒色土であったため、床面の検出は特に困難を極めた。

3区は、2区の北側に隣接する。厚く積もった黒色土（この黒色土には流れ込みとみられる土師器小片と、下部にはAs-C二次堆積層が含まれる。）の下に、水成堆積層と見られる砂が10cmほどの厚さに堆積しており、この砂層の下、谷状になった底から袋状の土坑が多数発見された。3区遺構検出面の2区との比高差は－1～2mである。砂層および土坑からは大量の土器・石器が出土したが、砂層出土遺物は、二次的に堆積したものと考えられる。

そのほかの区からは、断片的な資料しか発見されていない。6区からは袋状土坑が1基検出された。8区や18区からは埋甕などが発見されている。遺構あるいは遺物分布などからみると、2区の東側、あるいは南側に集落が展開していた可能性が高く、集落全体が3区のある谷を囲むような馬蹄形を呈する可能性もある。いずれにせよ、井野川流域でこれまでに発掘調査された中では、最大規模の縄文集落といえるだろう。

第2図 高崎情報団地Ⅱ遺跡と周辺の縄文時代遺跡

(4) 各時代の概要

縄文時代

縄文時代の遺構は、ほとんど全て中期に属す。対象地中央の台地部である2区、およびその北側の谷地である3区に集中して存在する。2区からは竪穴式住居34軒、土坑39基を検出し、3区からは土坑79基などを検出した。また、6区・8区・16区・18区でも土坑や埋甕を調査している。2区からは、集石土坑や埋甕も見つかっており、ヒスイ製大珠なども出土していて、集落域であったと考えられる。また、3区の土坑中からは磨製石斧、小形土器、赤と黒の漆で彩色された浅鉢形土器などが出土している。この場所が常時湿潤な状態だったため、漆が残ったと考えられる。遺構外からは、草創期の有舌尖頭器や、前期の諸磯b式土器破片なども出土している。

弥生時代

弥生時代の生活の痕跡は薄い。9区で3軒、10区で1軒、弥生時代の竪穴式住居を検出した。9区の3軒のうち、1軒からは中期後半の竜見町式土器が出土している。ほかはすべて後期の樽式土器をとまう。また、3区では、樽式土器を伴う土坑を1基検出した。なお、隣接する高崎情報団地遺跡で、縄文時代晩期末として報告されている資料は、弥生時代前期末～中期初頭の資料である。

古墳時代

古墳は4基検出した。5区・18区1号墳、6区2号墳、6区3号墳、2区4号墳である。規模は直径20m程度であり、どの古墳も主体部は検出されなかった。築造時期は、5区・18区1号墳が6世紀後半、6区2号墳は5世紀末、3号墳は6世紀初頭と考えられる。また、2区の4号墳は5世紀末と考えられる。

大規模な溝は3本見つかっており、うち2本は6世紀以降に掘削されたと考えられる。古墳時代前期の溝は(99号溝)、12区から5区まで調査区全体をほぼ直線に貫き、320mあまりにわたって構築されている(第2分冊参照)。

古墳時代の住居跡は、古墳前期から後期まで548軒検出された。古墳時代前期の住居は少なく、18区などで炉をもつ竪穴住居が数軒確認されている程度である。16区27号住居跡など5世紀台の住居跡からは、韓式系土器も出土している。16区44号住居跡からは、5世紀末(TK47併行)に位置づけられる樽形ハソウ・ハソウなどが出土している。最も住居の件数が多いのが6世紀前半台で、西側に展開する高崎情報団地遺跡の古墳群と対応する。2区54号住居跡からは、滑石片・石製模造品の未製品と製品など合計366.4gが、14区12号住居からは229.0gが出土しており、これらは石製模造品作成のための工房跡と考えられる。

奈良時代・平安時代

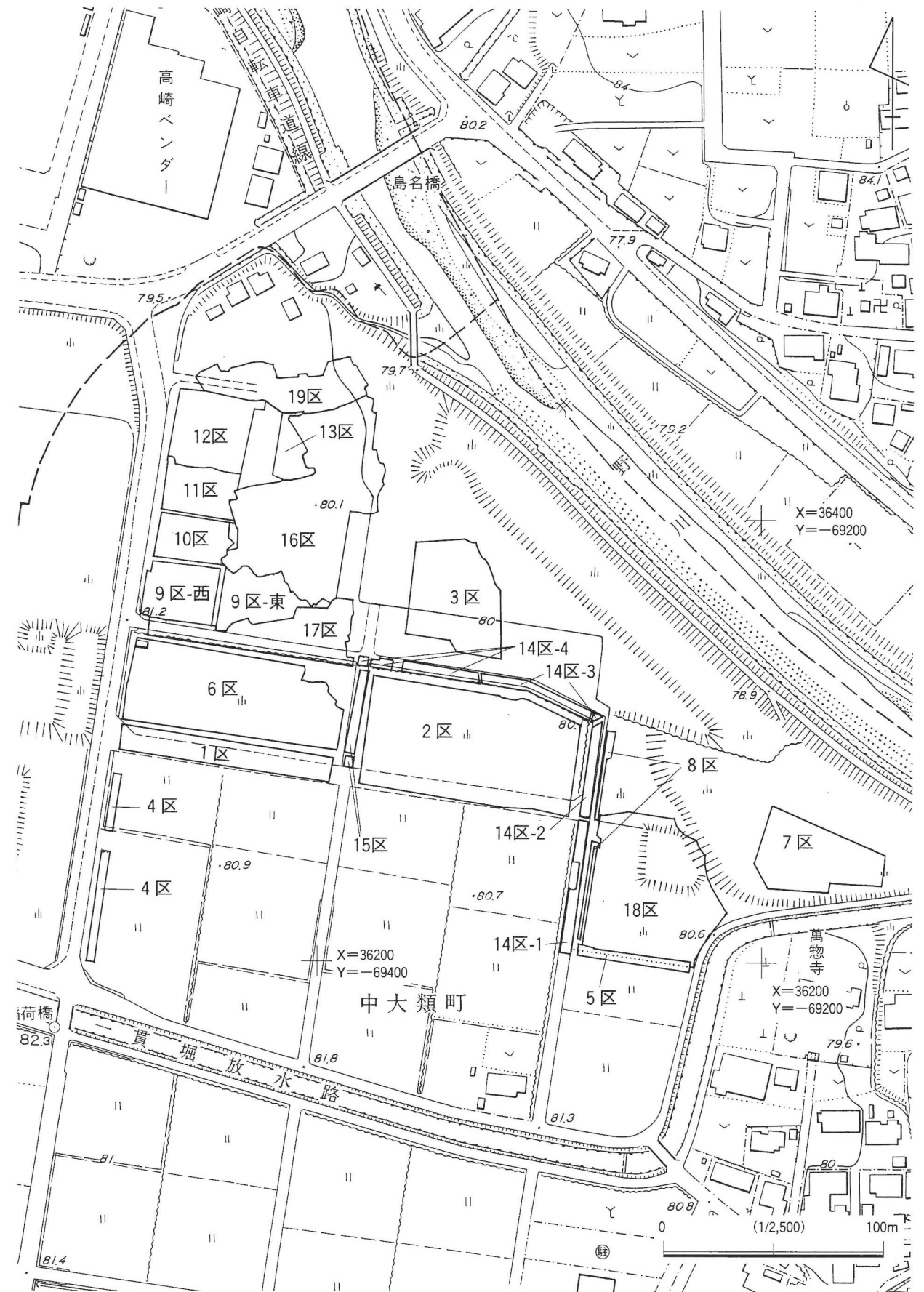
奈良時代の住居跡は検出されなかった。16区40号土坑からは、8世紀後半頃の遺物が出土している。平安時代の住居跡は18区で4軒検出された。平安時代末のもので、酸化焰焼成の粗雑な羽釜と土釜を伴う。また、口縁が玉縁の中国製白磁碗が17区の小穴から出土しており、11世紀後半に位置づけられる。12区では、調査区西側で、両側に溝を伴う東西方向の道路状遺構が検出されたが、調査区東側では削平されてしまっており、井野川に向かってどのような進路を取るのかは確認できなかった。西隣の高崎情報団地遺跡で発見された東山道駅路の続きであり、いわゆる「東山道駅路 牛堀・矢ノ原ルート」にあたる。

なお、調査区南の1区・4区・17区などで、As-Bに埋没した水田跡が検出された。浅間山の噴火は、『中右記』から天仁元年(1108年)とする説が有力であり、平安時代末の水田跡と考えられる。

中世

9・10・11・16区・17区とやや小高い場所を長方形に区画する中世堀が検出された。堀中及び区画内部の土坑からは、13～14世紀の常滑甕・片口鉢や軟質陶器の鉢などが出土しており、鎌倉期の館址と考えられる。一方、6区及び1・2・3区、18区で大きく深い堀跡が発見された。これに囲まれる15～16世紀の館跡(城跡と呼んでも良いくらいの規模である)が考えられる。この堀跡は、中途まで埋まった後、As-Aの処理に利用されている。ほかに、火葬跡が14区で、掘立柱建物跡・井戸跡・堀・溝跡などが18区で検出されている。

井野川の河川敷に当たる7区では、水田跡が検出された。浅間B軽石(1108年)降下後、堆積した土壌が耕作面として使用され、その後の洪水によって埋没しており、中世水田の可能性が高い。



第3図 高崎情報団地Ⅱ遺跡発掘区配置図

第Ⅱ章 2区の遺構・遺物

第1節 遺 構

(1) 概要と基本土層

2区は、平成9年の春から初夏にかけて、鷲谷と筆者が発掘調査を担当した区画である。面積は約4,500m²。夏場の田植え時には、隣接する水田から水が出て、調査は困難を極めたため、土層の確認を兼ね、調査区の周囲を幅50cmほど断ち割って排水しながら調査を進めた。

この2区からは、縄文時代～中世の遺構を多数検出したが、縄文時代の遺構としては、竪穴住居35軒、土坑40基などを発掘調査している。地山は、いわゆる井野川泥流堆積物（早田ほか1991）と呼ばれる、旧石器時代末期の泥流層であり、直径10cmほどの亜円礫を含む黄褐色土層が3m以上堆積しているが、部分的に灰白の粘土・シルト層や砂を含む部分もある。なお、発掘区西側では、井野川泥流層と縄文時代中期の遺構の間に、黒色土の堆積（基本土層図中の⑥）がみられ、遺構床面の確認は困難であった。この黒色土は特に上層で遺物を包含しており、縄文時代中期中葉の土器が出土している。

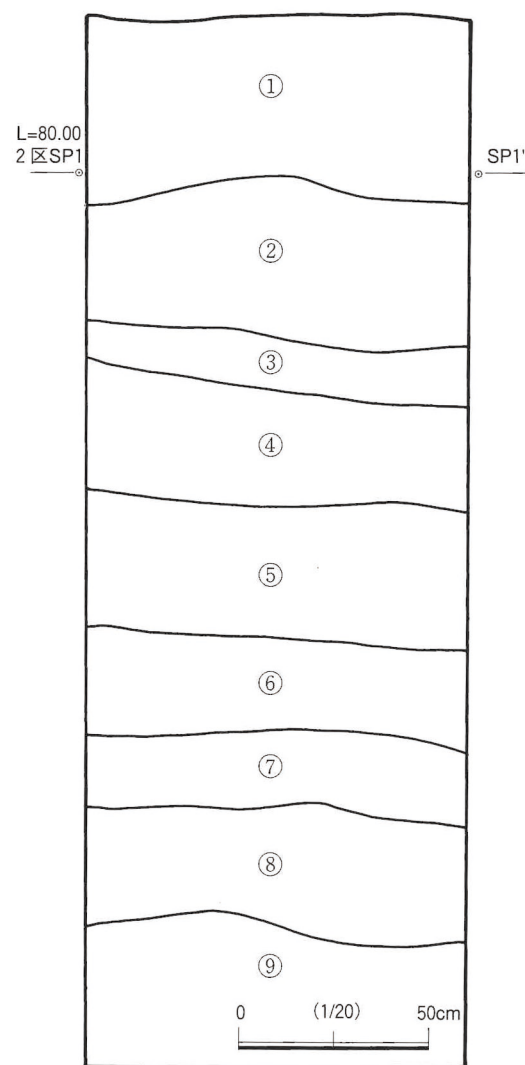
竪穴住居は、覆土が薄いものが多く、柱穴が確認できないものもあり、35軒すべてが明確な竪穴住居とはいえない。特に、SI5・6・17は、倒木痕が絡んでおり、形状がはっきりしなかった。柄鏡形竪穴住居は1軒検出されており、中期のものと考えられるが、残存状態は悪い。なお、2区竪穴住居跡から出土した土器は、おおむね加曽利E1～加曽利E3式のものを中心である。出土土器からみて、SI68などが、この遺跡の住居の中でも一番古い段階のものであろう。

このほか、特筆すべき遺構としては、浅い皿状の掘り込みに、拳大ほどの焼礫が10点ほど集中して検出される集石遺構が発見されている。焼礫の石質は、おおむね安山岩である。この遺構に伴って出土する土器は少ないが、出土土器の時期は竪穴住居の時期とほぼ一致する。竪穴住居を切ってその上に構築されたものもあり、住居と同じか、やや新しい時期の遺構と考えられる。遺構の規模や礫の状態から見て、石蒸しなどに使用する調理施設であろう。

なお、個々の遺構については、各遺構図版の後にまとめて掲載した遺構一覧表をご参照頂きたい。

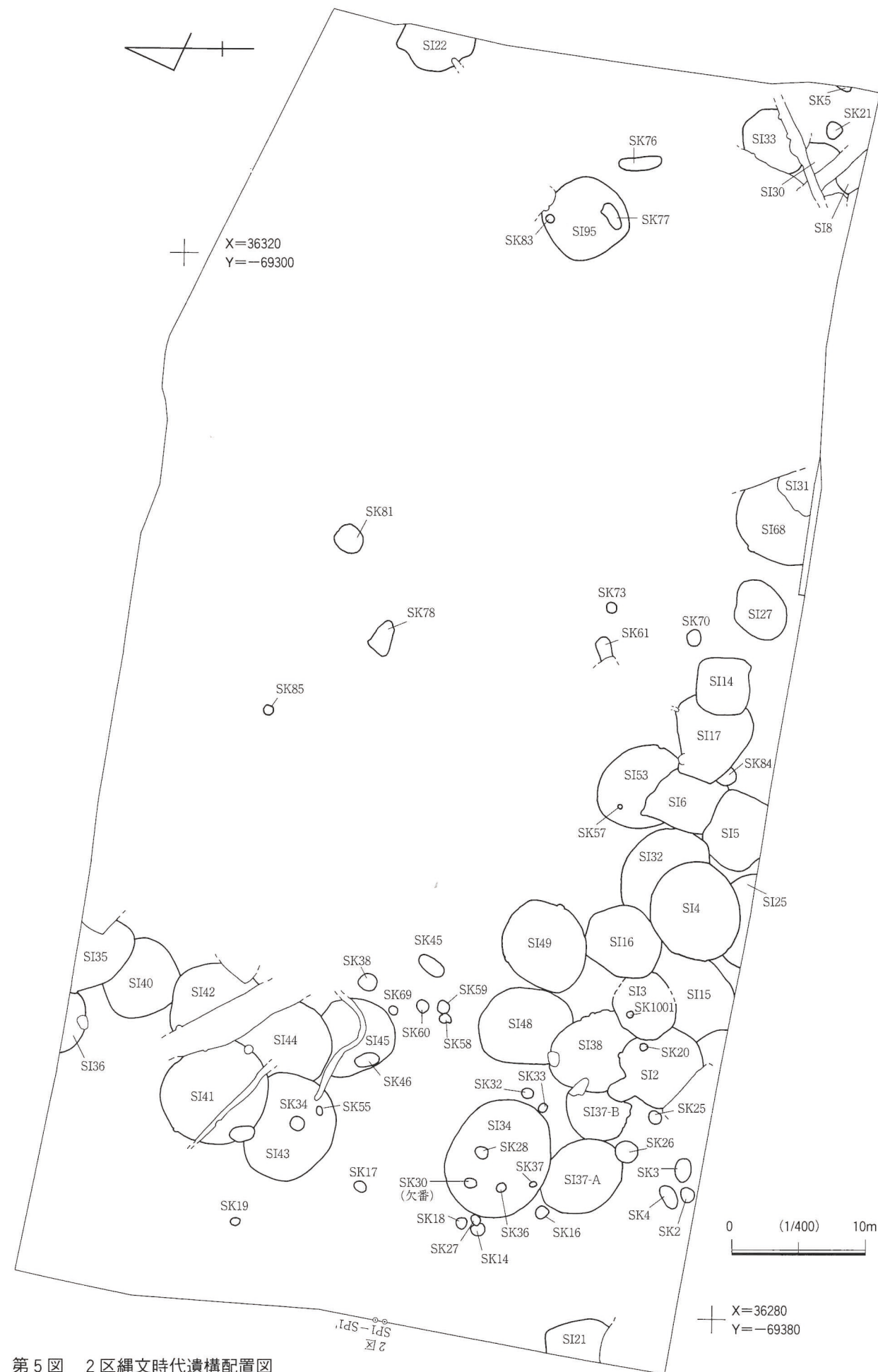
参考文献

早田勉ほか1991「第1章 群馬県の自然と風土」『群馬県史通史編1原始古代1』



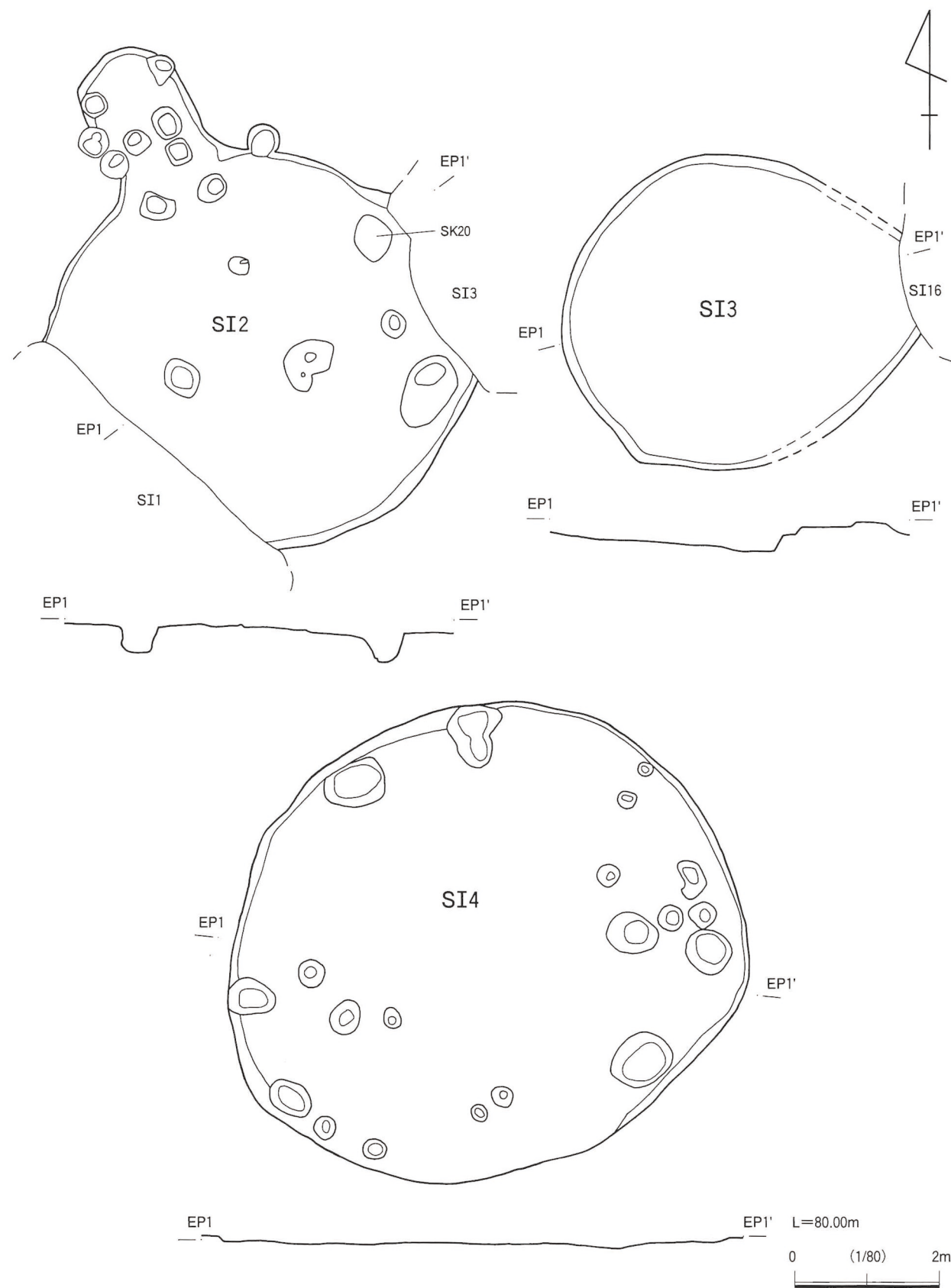
第4図 2区基本土層柱状図

- ①10YR2/1 黒色土。白色軽石粒・黄色スコリア粒・地山褐色土ブロックやや多く含む。ほ場整備時の埋土。
- ②10YR4/4 褐色土。白～灰色軽石粒（径1～3mm As-AおよびAs-Bと思われる）を含む。圃場整備前の耕作土と思われる。
- ③10YR3/2 黒褐色土。灰色軽石粒の二次堆積層（径1～2mm As-B）。黒色土を含む。
- ④10YR3/2 黒褐色土。乾燥するとクラックが入るやや粘土質の土。白色軽石粒・黄色スコリア粒（径1～3mm）少量含む。B下水田土壌。
- ⑤10YR2/2 黒褐色土。④に似るが縄文時代遺物を少量含む。
- ⑥10YR2/1 黒色土。縄文時代中期遺物包含層。阿玉台式・加曽利E式出土する。亜円礫（径30～50mm）含む。黄色スコリア・白色軽石粒（径1～3mm）少量含む。
- ⑦10YR2/2 黒褐色土。縄文時代中期遺物少量含む。やや粘質。黄色スコリア・白色軽石粒（径1～2mm）少量含む。
- ⑧10YR4/2 灰黄褐色土。地山無遺物層。白色軽石粒・亜円礫（径約5cm）やや多い。シルト質粘土。
- ⑨10YR7/2 にぶい黄褐色土。地山無遺物層。風化した扁平なグリーンタフ（径約3～5×5～10cm）を多く含む。

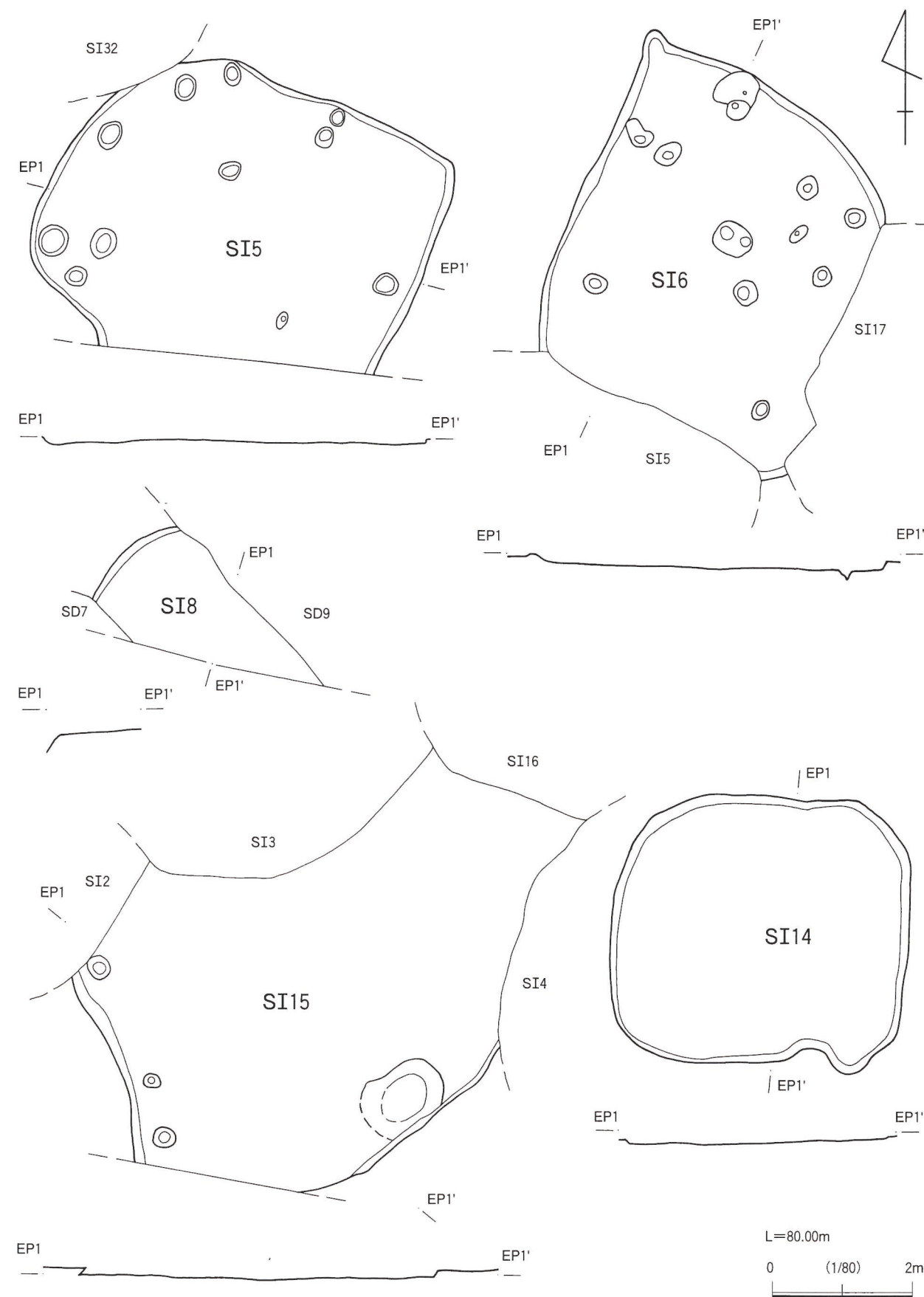


(2) 竪穴住居

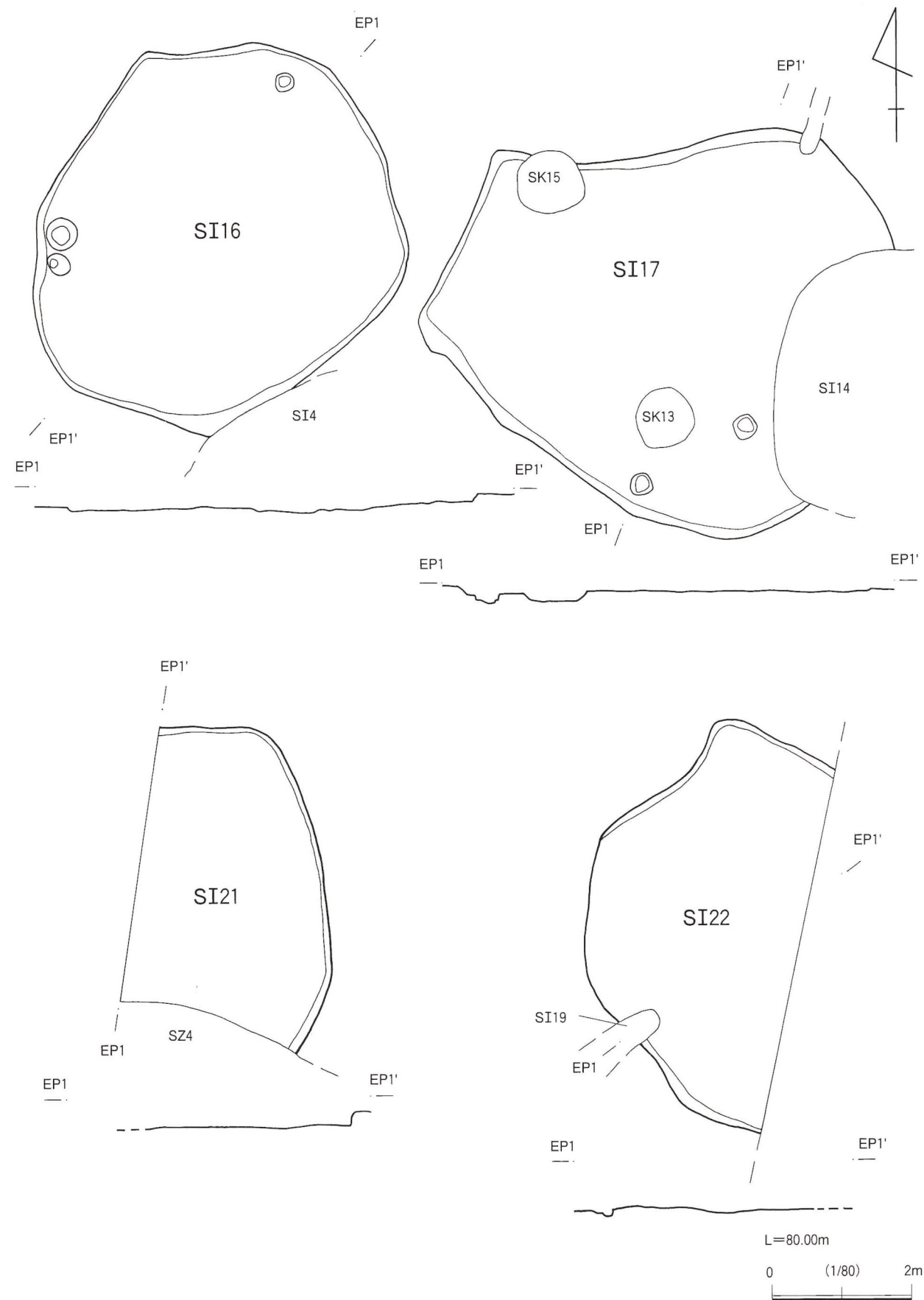
以下、2区検出竪穴住居跡の図版を掲載する。張床の観察できるものはなかった。



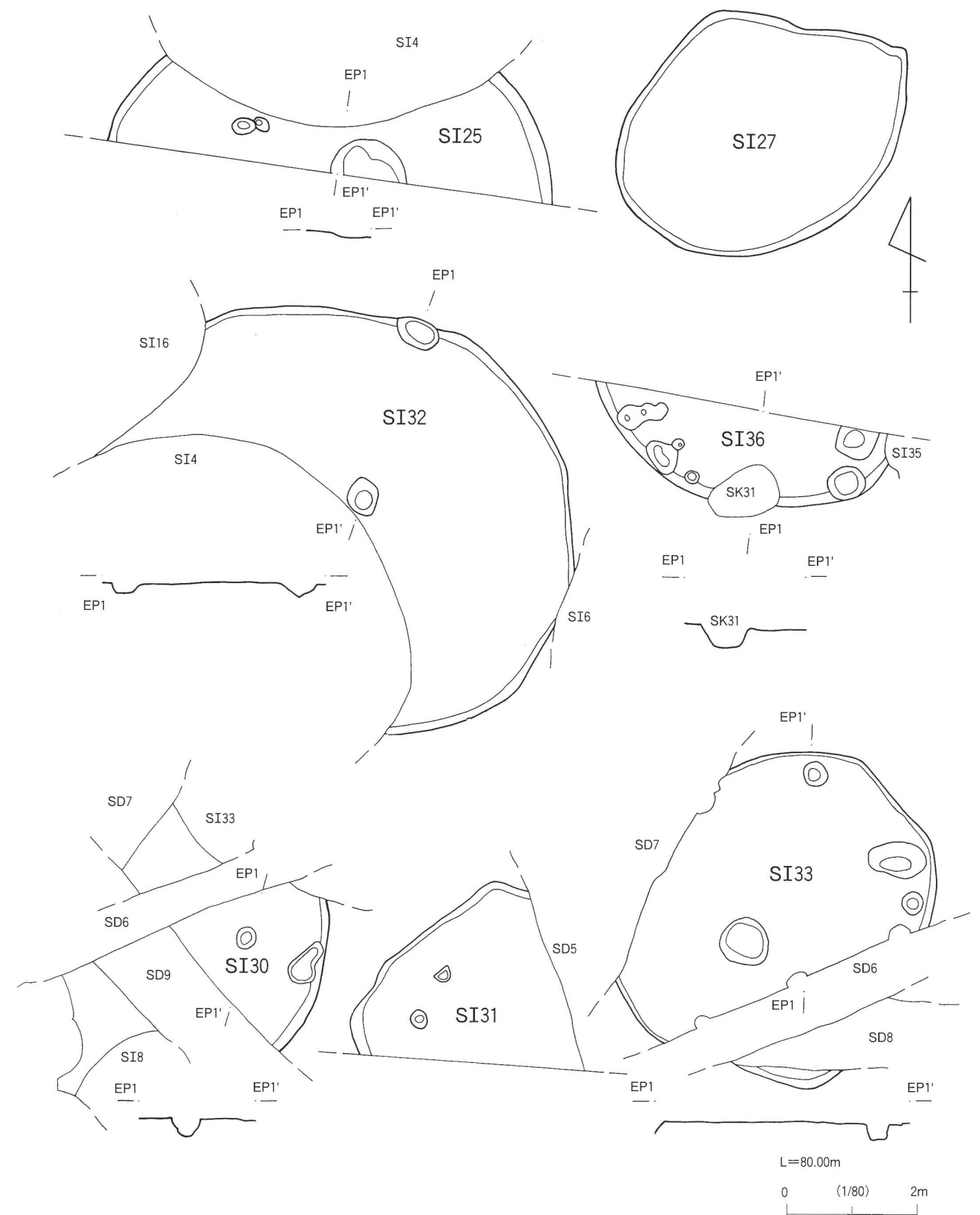
第6図 2区検出の竪穴住居(1)



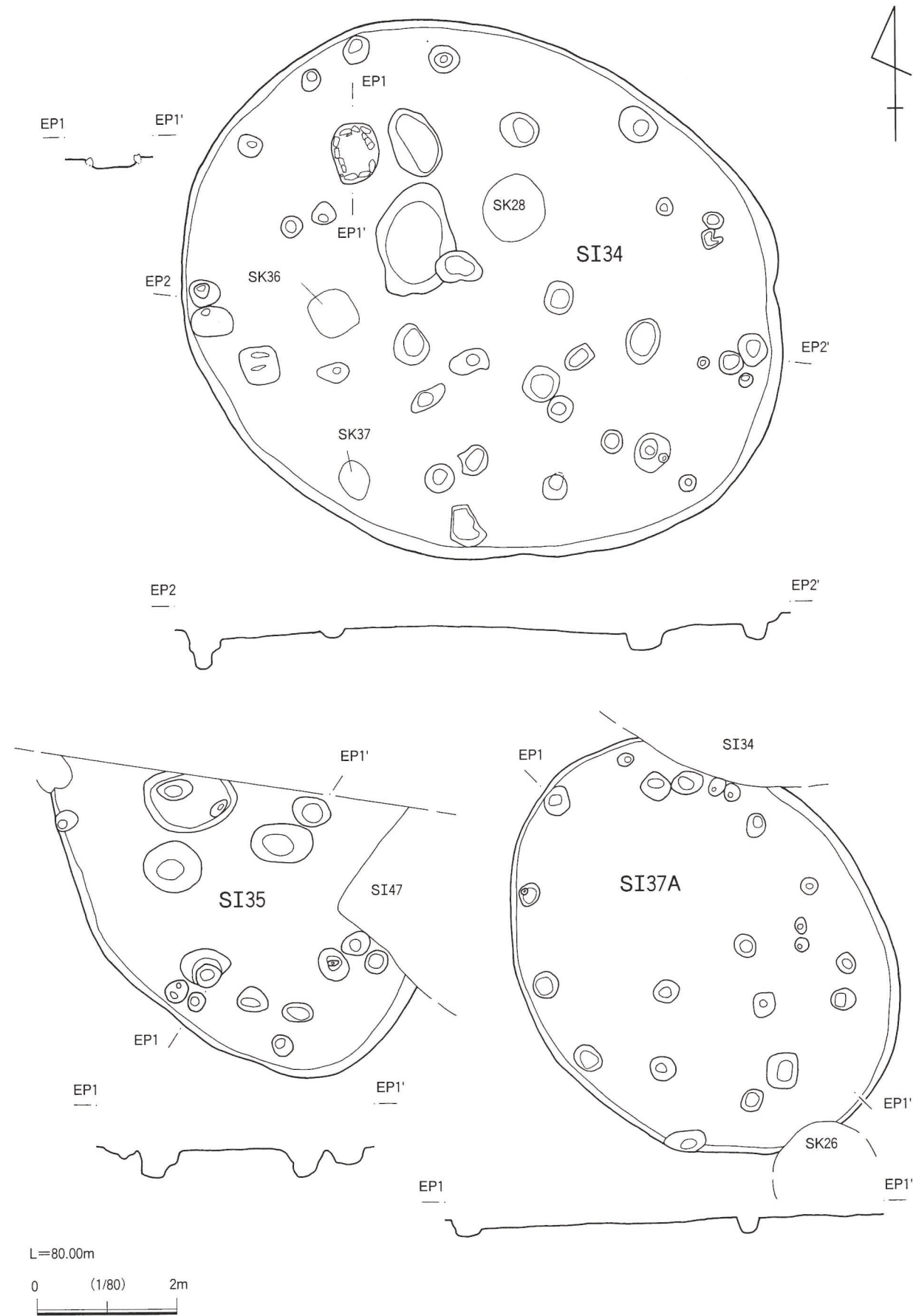
第7図 2区検出の竪穴住居(2)



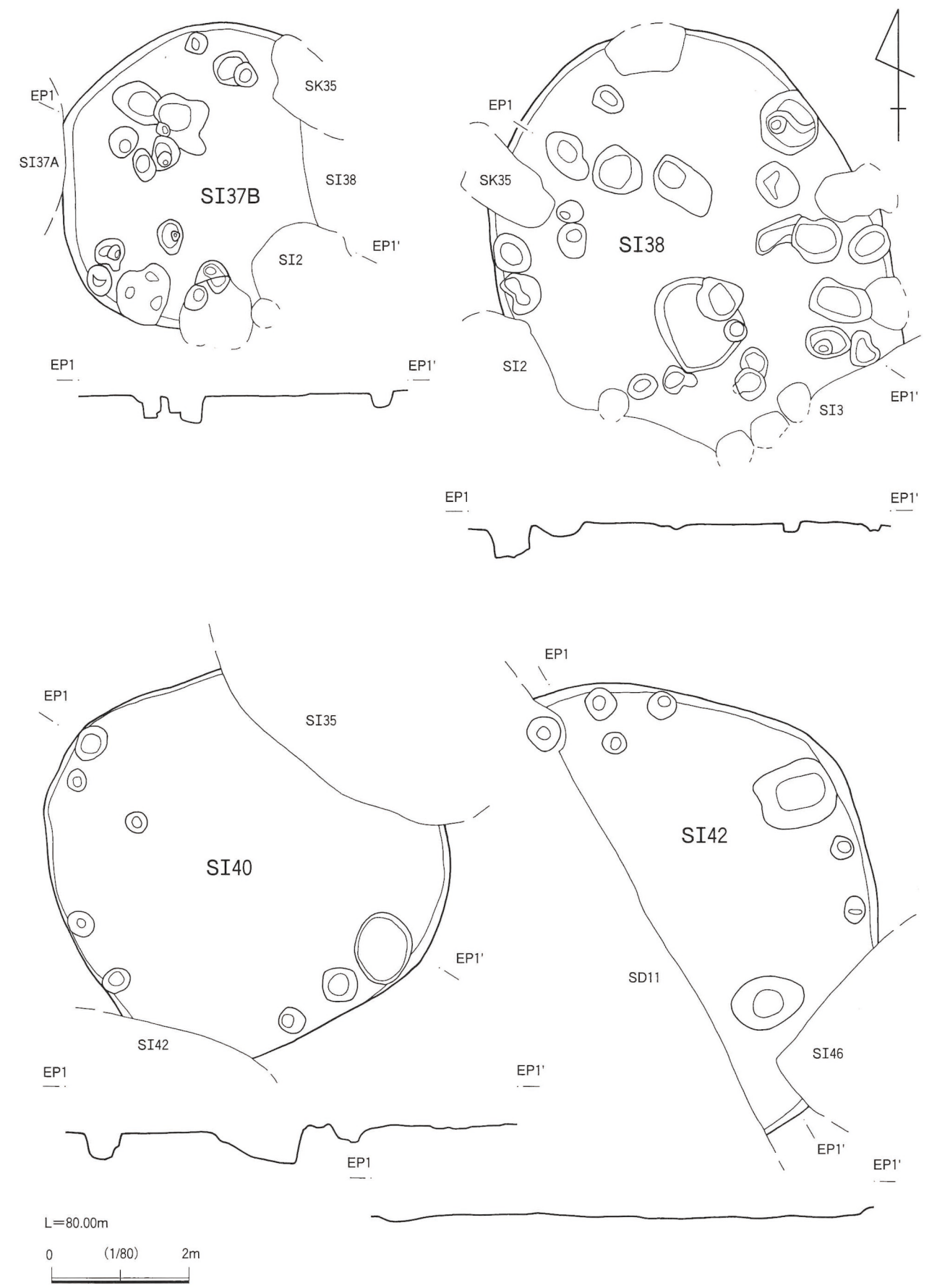
第8図 2区検出の竪穴住居(3)



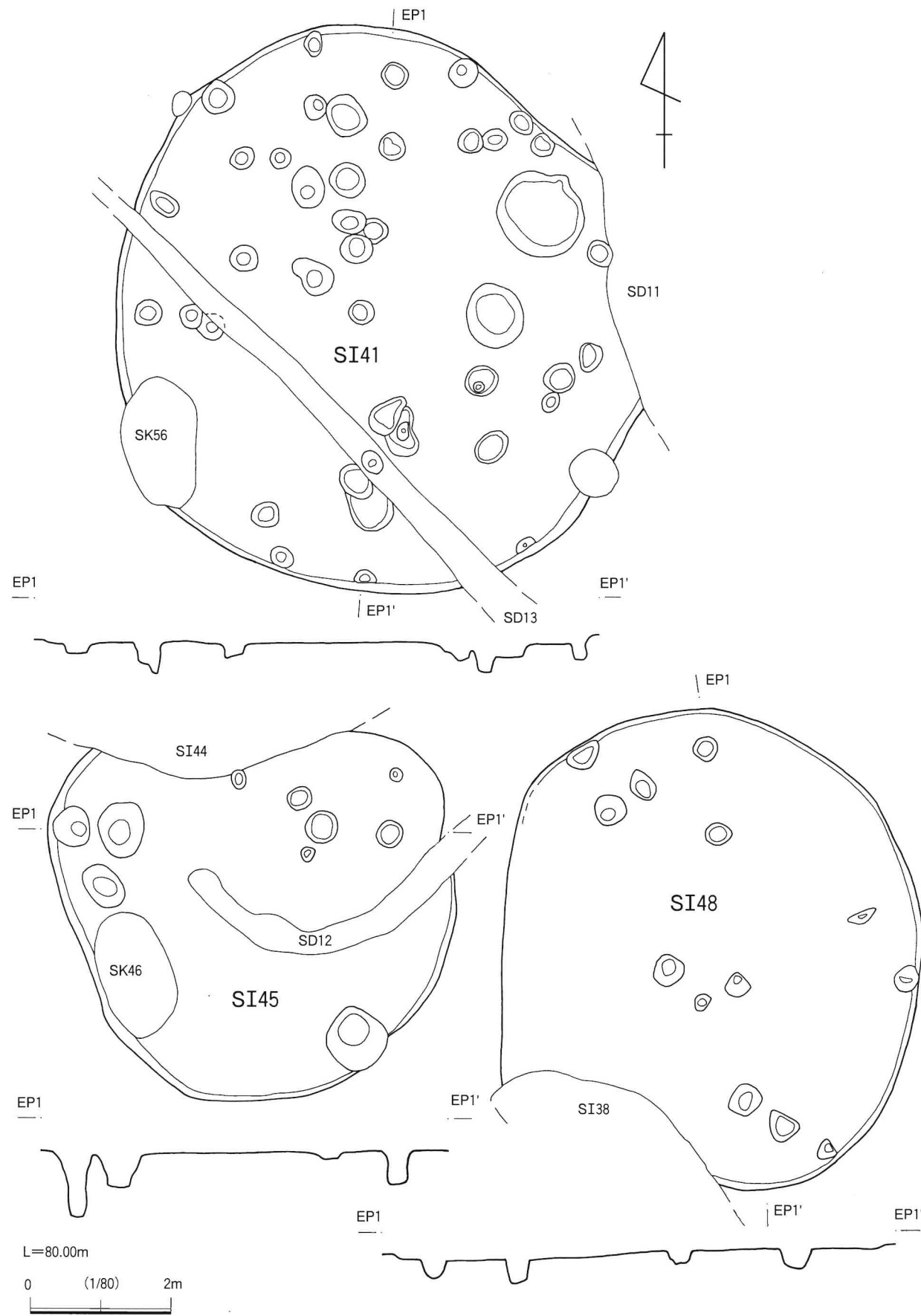
第9図 2区検出の竪穴住居(4)



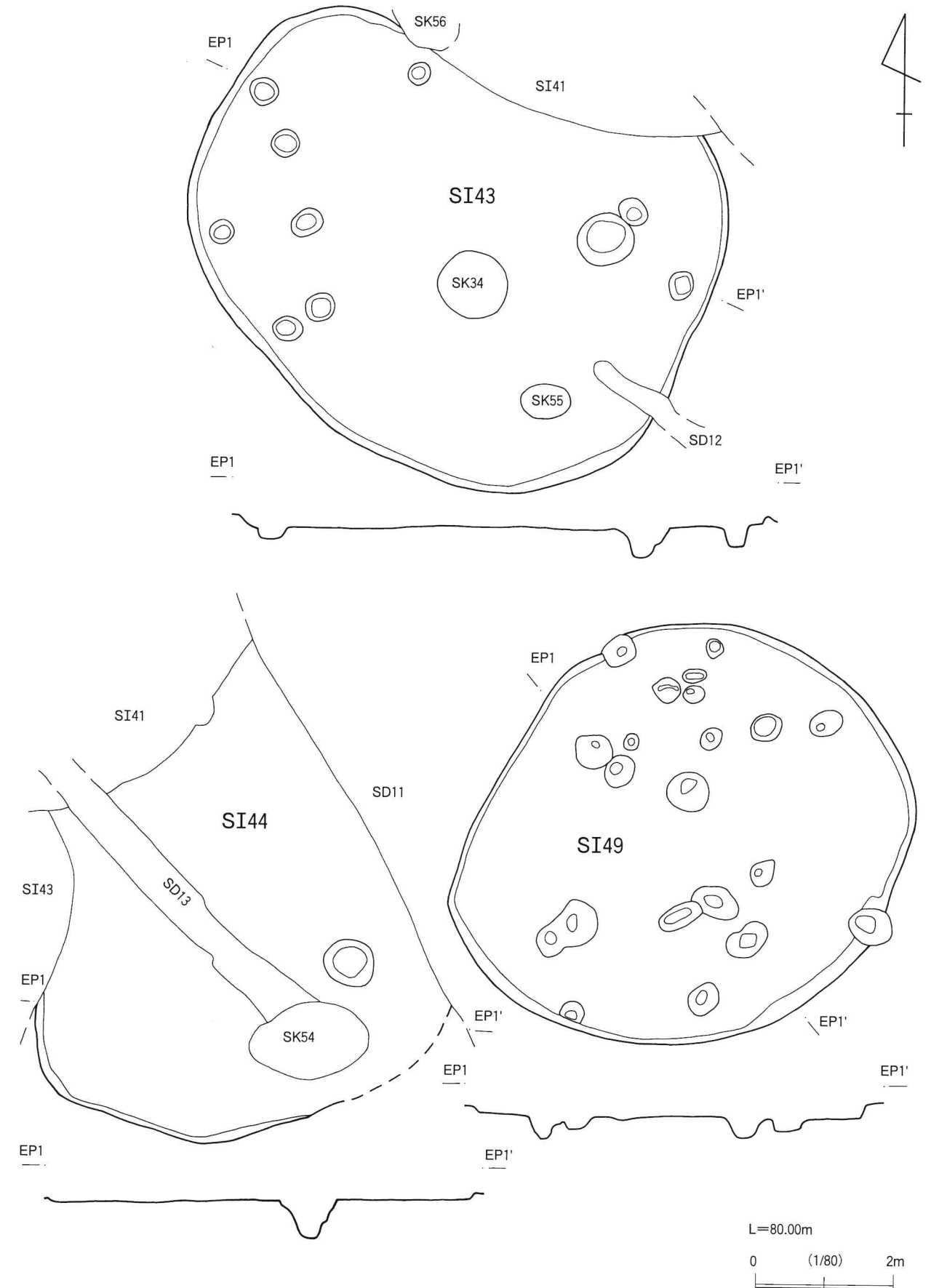
第10図 2区検出の竪穴住居（5）



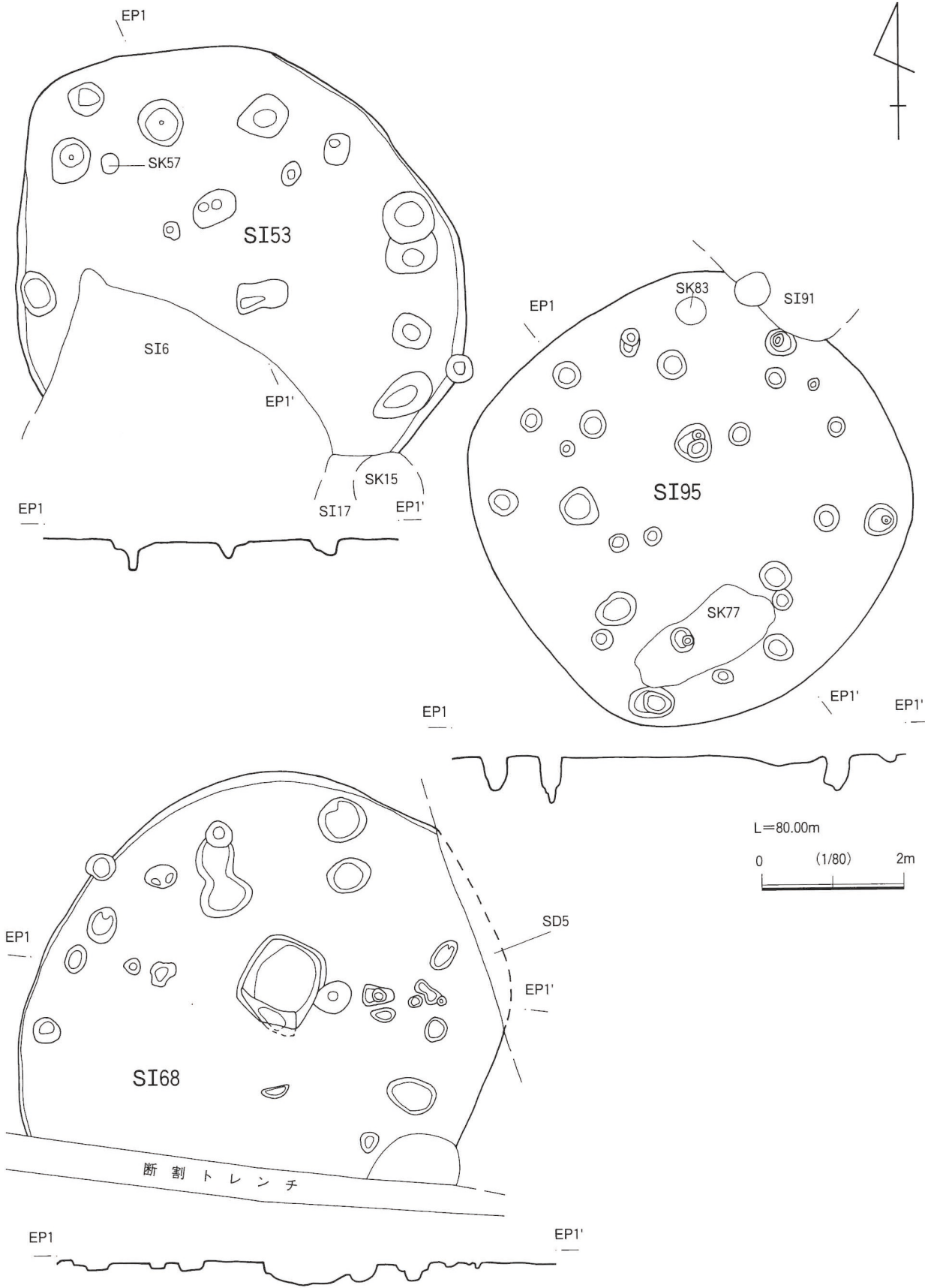
第11図 2区検出の竪穴住居（6）



第12図 2区検出の竪穴住居（7）



第13図 2区検出の竪穴住居（8）



第14図 2区検出の竪穴住居（9）

表1 2区竪穴住居一覧表

区	住居番号	形状	規模 (m)	住居内柱穴数	炉	確認面からの深さ (cm)	重 複 関 係	時代・時期	備 考
2区	SI2	柄鏡形	7.40×5.70	15	不明	18	SI1・SI3に切られる。	縄文中期	敷石なし。軸は北-29°-西。
2区	SI3	円形	4.50×4.45	不明	不明	30	SI2を切る。SI16に切られる。	縄文中期	
2区	SI4	円形	7.18×6.60	21 (うち壁柱穴12)	不明	15	SI16・25・32を切る。SK7に切られる。	縄文中期	
2区	SI5	不定形	5.48×4.50	11	不明	13	SI6を切る。SI32に切られる。	縄文中期	
2区	SI6	不定形	(4.82)×(4.10)	11	住居中央に炉の残存有り？	15	SI32・53を切る。SI5・17に切られる。	縄文中期	
2区	SI8	円形？	(1.58)×-	不明	不明	12	SD7・SD9に切られる。	縄文中期	
2区	SI14	隅丸方形	4.28×3.84	不明	不明	10	SI17・18を切る。	縄文中期	
2区	SI15	不定形	(8.00)×(5.50)	3	不明	15	SI2・3・4・16に切られる。	縄文中期	住居内土坑1基。
2区	SI16	不整円形	5.70×4.90	3	不明	18	SI3・32を切る。SI4に切られる。	縄文中期	
2区	SI17	不定形	5.85×4.90	2	不明	12	SI6・SI53・SK84を切る。SI14に切られる。	縄文中期	SI17とSI18に分かれていたが同一の住居のためSI17に統一。
2区	SI21	不定形	-	不明	不明	15	SZ4に切られる。	縄文中期	
2区	SI22	不整円形	径5.95～	不明	不明	14	SI19に切られる。	縄文中期	
2区	SI25	円形？	径6.90～	2	不明	11	SI4に切られる	縄文中期	住居内土坑1基。
2区	SI27	不整円形	4.90×3.70	不明	不明	?	なし	縄文中期	
2区	SI30	円形？	-	2	不明	8	SI8・SI33・SD6・SD7・SD9に切られる。	縄文中期	
2区	SI31	不明	不明	不明	不明	8	SI68を切る。	縄文中期	住居でない可能性有り。
2区	SI32	不整円形	径7.13	2	不明	14	SI5を切る、SI4・6・16に切られる。	縄文中期	
2区	SI33	不整円形	径5.25	23	不明	5	SI30を切る。SD6・SD7・SD8に切られる。	縄文中期	住居内土坑1基。
2区	SI34	楕円形	8.95×7.50	40	住居中央西よりに石組炉	32	SI37Aを切る。	縄文中期	住居内土坑1基。

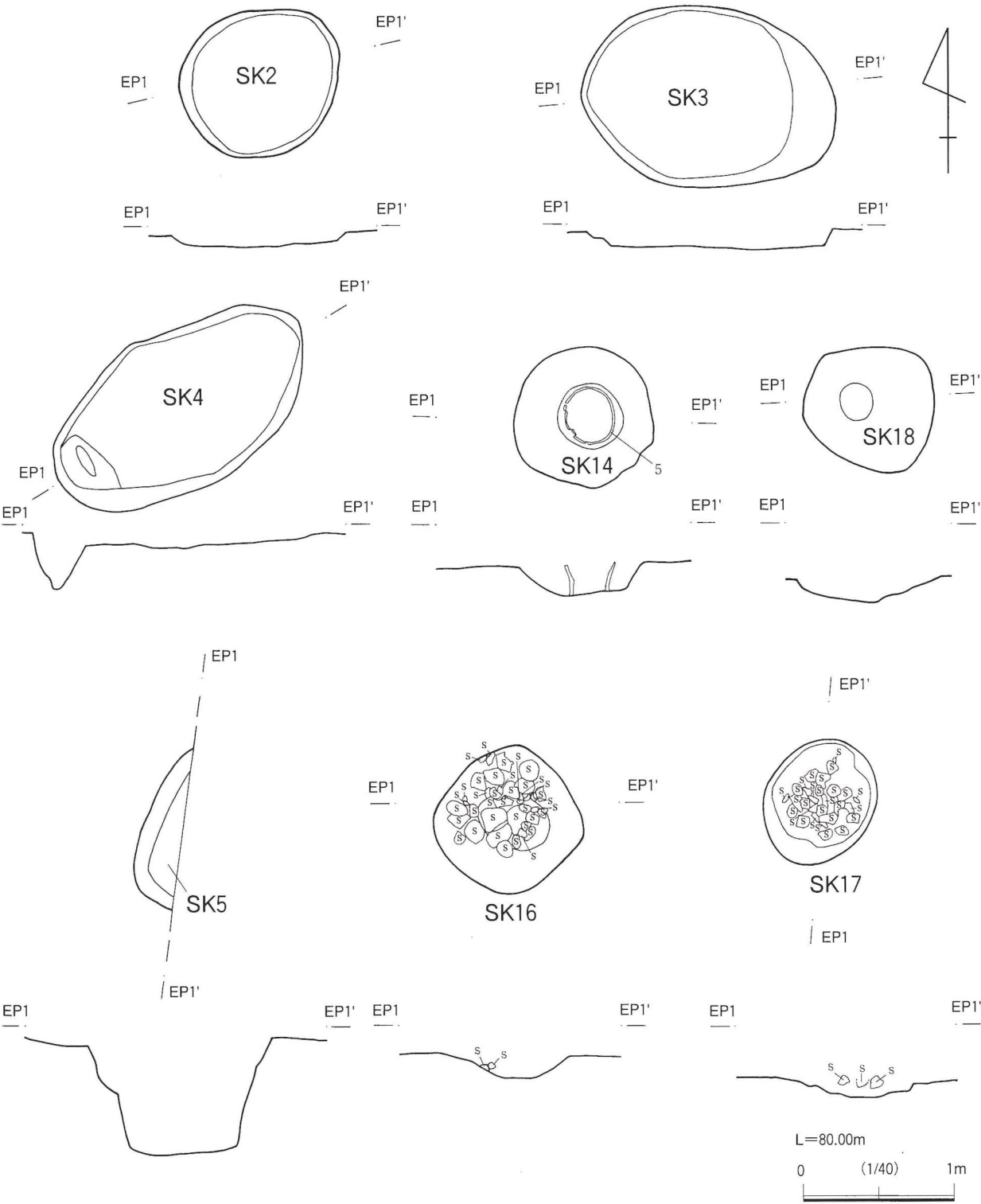
2区	SI35	円形?	径5.90～	15	不明	11	SI36・40を切る。SI47に切られる。	縄文中期	
2区	SI36	円形?	径4.80～	7	不明	6		縄文中期	
2区	SI37 - A	楕円形	6.40×5.10	21	不明	20	SI37Bを切る。SI34・SK26に切られる。	縄文中期	はじめSI37-Bと同一。後に分割。
2区	SI37 - B	不整形円形	径4.60～	16	不明	12	SI2・SI37A・SI38・SI35に切られる。	縄文中期	はじめSI37-Aと同一。後に分割。
2区	SI38	楕円形?	5.76×6.00	27	不明	?	SI37B・SI48を切る。SI2・SI3に切られる。	縄文中期	住居内土坑3基。
2区	SI40	不整形円形	5.75×4.50	8	不明	6	SI35・42に切られる。	縄文中期	住居内土坑1基。
2区	SI41	不整形円形	8.00×7.80	41	不明	24	SD11・SD13・SK56に切られる。SI43・SI44を切る。	縄文中期	住居内土坑2基。
2区	SI42	円形?	7.17×3.60	7	不明	11	SI40を切る。SI46に切られる。SD11に切られる。	縄文中期	住居内土坑1基。
2区	SI43	不整形円形	7.73×5.50	10	不明	25	SI44を切る。SI41・SD12に切られる。	縄文中期	住居内土坑3基。
2区	SI44	不明	—	1	不明	12	SI45を切る。SI41・43・SD11・SD13に切られる。	縄文中期	
2区	SI45	不整形円形	(5.70×4.75)	8	不明	12	SI44・SK46・SD12に切られる。	縄文中期	住居内土坑2基。
2区	SI48	不整楕円形	(6.78×5.92)	14	不明	25	SI38に切られる。	縄文中期	
2区	SI49	不整形円形	6.95×5.90	16	不明	26	なし	縄文中期	
2区	SI53	不整形円形	7.15×6.06	16	不明	16	SI6・17に切られる。	縄文中期	埋甕出土。
2区	SI68	不整形円形	径約6.40	7本	—	?	SD5に切られる。	縄文中期	
2区	SI95	不整形円形	(6.43×6.30)	17本	—	?	SI91・SK77・83に切られる。	縄文中期	

(3) 土坑

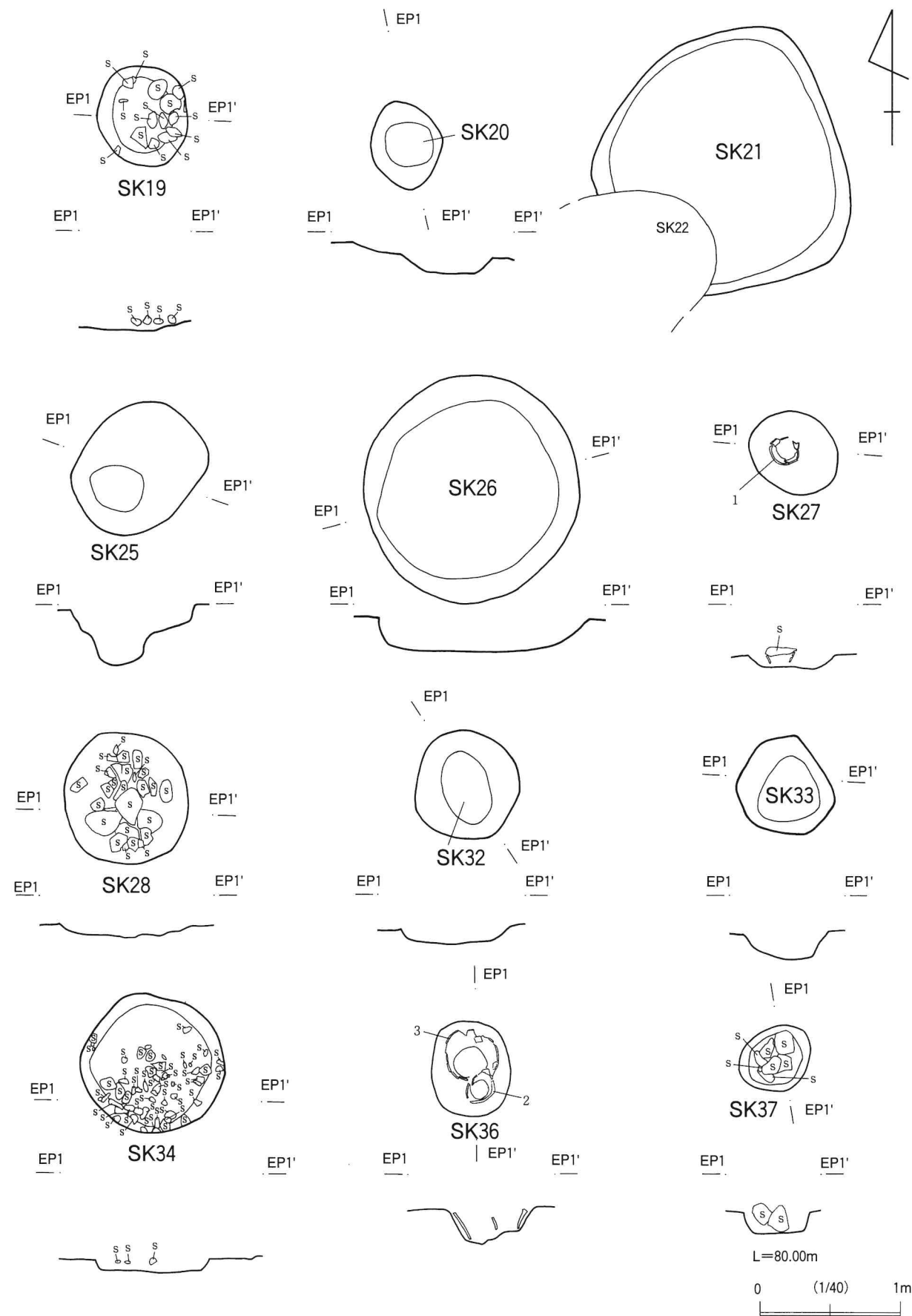
以下、2区検出の土坑図版を掲載する。SK14・SK18・SK27・SK36・SK55・SK57・SK83・SK1001は埋甕である。SK27は平らな礫を蓋のようにして置いており、SK36は2個体が並んでいる。

SK16・SK17・SK19・SK28・SK34・SK37は集石土坑である。SK37以外、浅い皿状の土坑に焼礫が集められている。

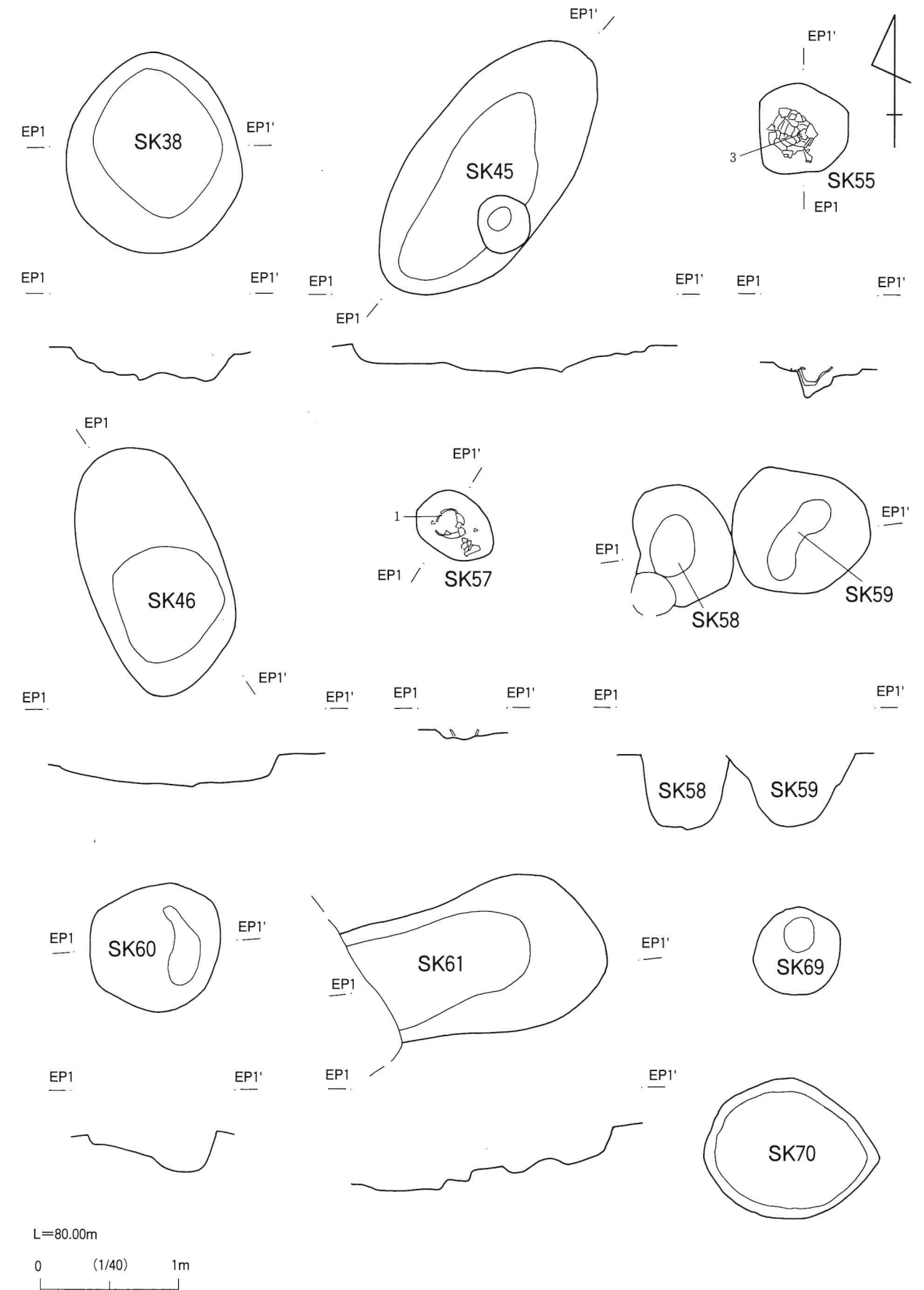
SK4は、片側にピットを持つ土坑である。SK26は整った円形の遺構であり、出土遺物も多い。



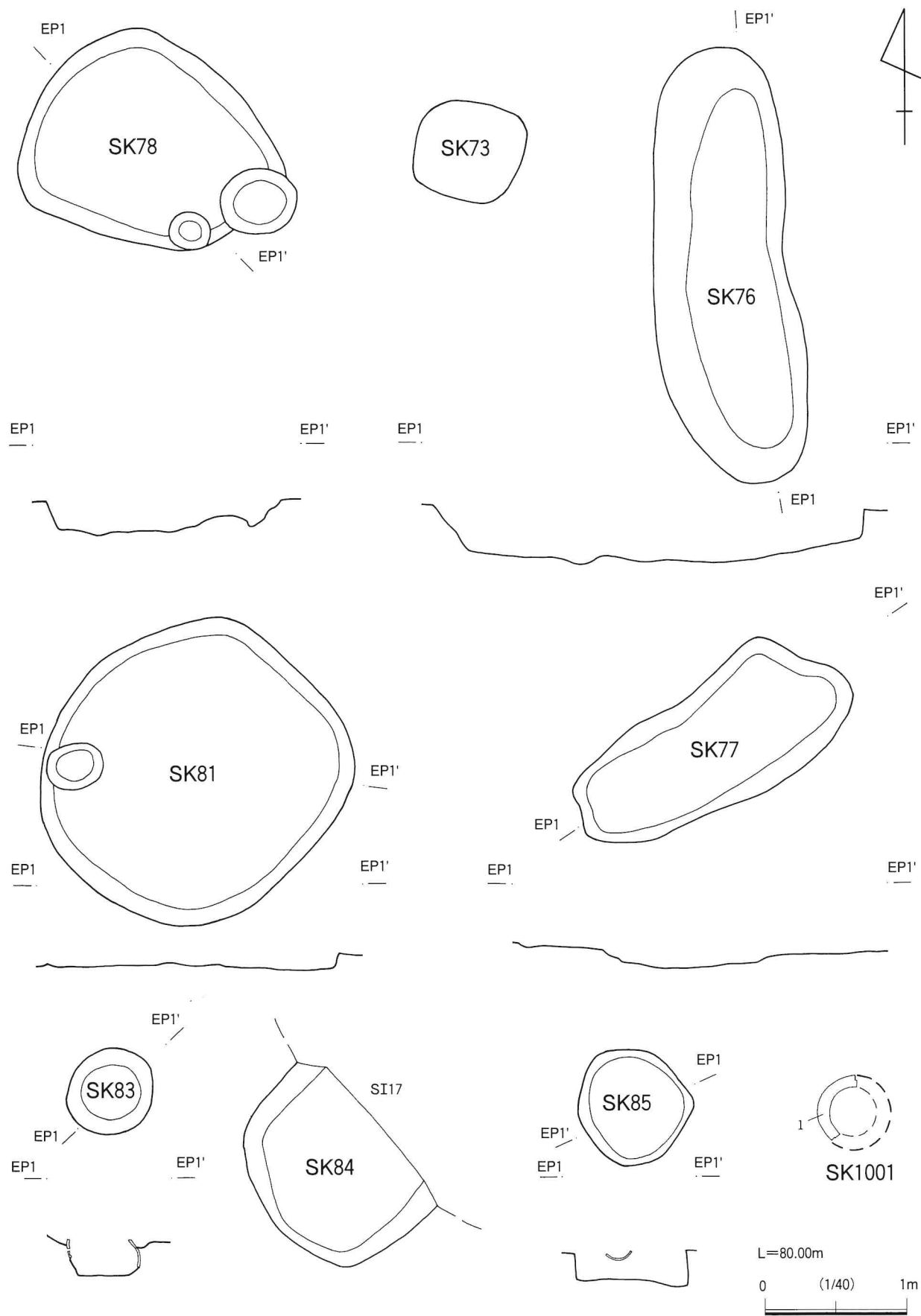
第15図 2区検出の土坑(1)



第16図 2区検出の土坑（2）



第17図 2区検出の土坑（3）



第18図 2区検出の土坑（4）

表2 2区土坑一覧表

遺構名	検出位置	規模（m）	平面形状	主軸方向	断面形状	覆土（cm）	重複関係	時代	時期	備 考
SK2	2区	1.10×1.00	円形	東-35°-北	皿状	10	なし	縄文	中期	
SK3	2区	1.70×1.22	楕円形	西-3°-北	皿状	9	なし	縄文	中期	
SK4	2区	1.95×1.10	楕円形	北-45°-東	不整形	38	なし	縄文	中期	
SK5	2区	1.05×-	不明	不明	不明	32cm以上	なし	縄文	中期	
SK14	2区	1.02×0.87	楕円形	南北が軸	皿状	22	SK27に切られる	縄文	中期	埋甕
SK16	2区	1.00×1.00	円形	南北が軸	皿状	14	なし	縄文	中期	集石土坑
SK17	2区	0.95×0.80	楕円形	南北が軸	皿状	10	なし	縄文	中期	集石土坑
SK18	2区	0.93×0.90	不整形円形	北-45°-東	皿状	16	なし	縄文	中期	埋甕
SK19	2区	0.72×0.62	円形	南北が軸	皿状	4	なし	縄文	中期	集石土坑
SK20	2区	0.65×0.52	楕円形	北-15°-西	皿状	23	SI2に切られる	縄文	中期	
SK21	2区	1.95×1.90	不整形円形	南北が軸	皿状	23	SK22に切られる	縄文	中期	
SK25	2区	1.00×0.80	楕円形	北-45°-東	不整形	45	なし	縄文	中期	
SK26	2区	1.62×1.52	円形	南北が軸	ボウル状	26	SI37Aを切る	縄文	中期	
SK27	2区	0.75×0.65	円形	東西が軸	ボウル状	20	SK14を切る	縄文	中期	埋甕
SK28	2区	0.95×0.90	円形	南北が軸	皿状	10	SI34を切る	縄文	中期	集石土坑
(SK30)	2区	0.82×0.65	楕円形	北-15°-西	ボウル状	14	なし	縄文	中期	欠番。住居（SI34）の炉跡。
SK32	2区	0.78×0.77	円形	南北が軸	皿状	12	なし	縄文	中期	
SK33	2区	0.68×0.62	不整形円形	北-30°-西	ボウル状	18	なし	縄文?	中期	
SK34	2区	0.98×1.03	円形	南北が軸	皿状	7	SI43を切る	縄文	中期	集石土坑
SK36	2区	0.66×0.64	円形	南北が軸	ボウル状	14(A)・25(B)	SI34を切る	縄文	中期	埋甕。2個体（A・B）有り。
SK37	2区	0.56×0.44	楕円形	南北が軸	ボウル状	16	SI34を切る	縄文	中期	集石土坑
SK38	2区	1.43×1.30	楕円形	南北が軸	ボウル状	22	なし	縄文	中期	
SK45	2区	2.18×1.08	楕円形	北-39°-東	皿状	20	なし	縄文	中期	
SK46	2区	1.76×1.00	楕円形	北-20°-西	皿状	16	SI45を切る	縄文	中期	

SK55	2区	0.75×0.50	楕円形	東西が軸	不整形	27	SI43を切る	縄文	中期	埋甕。SI43に付随するものか。
SK57	2区	径0.28	円形	—	皿状	7	SI53を切る	縄文	中期	埋甕。SI53に付随するものか。
SK58	2区	0.90×0.68	不整形	南北が軸	ボウル状	54	SK59に切られる	縄文	中期	
SK59	2区	径1.00	不整円形	南北が軸	ボウル状	52	SK58を切る	縄文	中期	
SK60	2区	0.98×0.92	不整円形	南北が軸	不整形	30	なし	縄文	中期	
SK61	2区	(220× 1.14)	楕円形	北−43°−東	不整形	48	SI54に切られる	縄文	中期	
SK69	2区	径0.66	円形	—	—	—	なし	縄文	中期	遺物多量に出土。
SK70	2区	1.31×1.00	不整円形	東西が軸	—	6	なし	縄文	中期	掘り込み浅い。
SK73	2区	0.8×0.70	不整円形	北−45°−東	—	—	なし	縄文	中期	
SK76	2区	3.10×1.08	楕円形	南北が軸	ボウル状	46	なし	縄文	中期	
SK77	2区	2.14×0.90	不整楕円形	東−30°−北	皿状	16	SI95を切る	縄文	中期	
SK78	2区	1.80×1.60	不整形	北−55°−西	ボウル状	30	なし	縄文	中期	
SK81	2区	2.25×2.20	略円形	北−30°−東	皿状	8	SI73を切る	縄文	中期	
SK83	2区	0.65×0.60	円形	—	円筒状	22	SI95を切る	縄文	中期	埋甕
SK84	2区	(×1.42)	不整形	—	—	—	SI6を切り、SI17に切られる	縄文	中期	
SK85	2区	径0.80	円形	—	円筒状	23	なし	縄文	中期	
SK1001	2区	—	—	—	—	—	SI3を切る	縄文	中期	埋甕

第2節 遺物

(1) 概要

2区からは、深鉢形土器を中心に多くの縄文土器が出土している。残存状態は、埋甕を除き、ほとんどが小破片である。土器型式では、勝坂式・阿玉台式〜加曽利E3式を確認しているが、加曽利E2式の土器が最も多いようである。このほか、土製垂飾と土製耳飾りが別の竪穴住居跡からそれぞれ1点ずつ出土しており、土器図版中に掲載している。

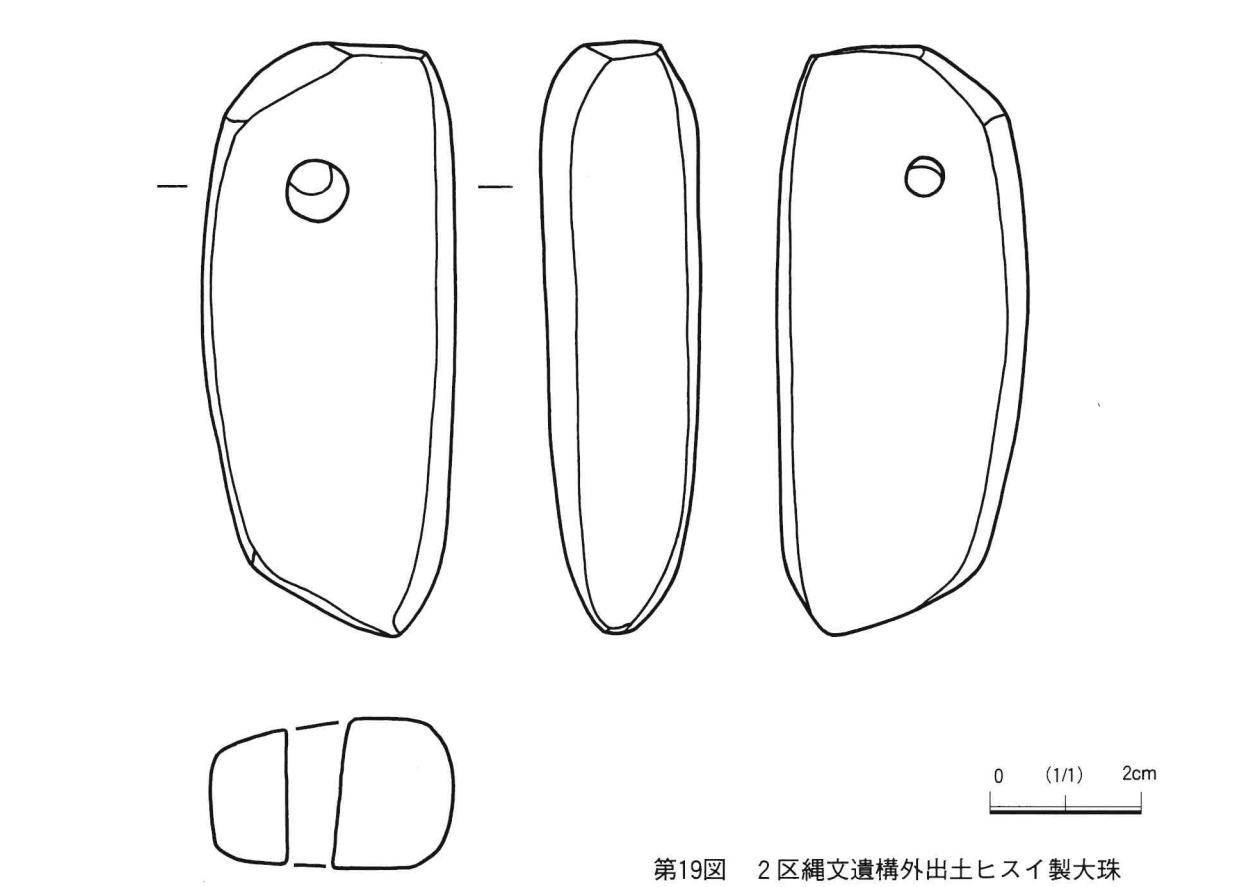
石器は、多量の打製石斧のほか、石鏃、粗製石匙、磨製石斧、敲石、多孔石などが出土した。報告したのは、遺構出土の定型的な石器のみである。最も出土量が多い石器は打製石斧で、ほとんどが短冊形である。破片も含め写真撮影・掲載したが、先端部破片は案外少ない。遺跡外で使用していたことを物語るものであろうか。

また今回、定型的な棒状礫を報告した。ほとんどが結晶片岩製である。最近、これに類する結晶片岩棒状礫については、松村和男が短剣形石器として報告、分析している（松村ほか1999）。しかし、本遺跡出土のものは敲打・研磨による加工の痕跡が無いものがほとんどであるため、この名称は採用しなかった。この石器の用途は不明であるが、わざわざ結晶片岩を入手していることに、何らかの意味があったものと考えられる。

発掘区北側の中央付近では、ヒスイ製大珠の優品が出土した。石質は非常に良質で、片側からの管錐穿孔により貫通孔を開けている。重さは112 gである。この大珠については、鷲谷亨信が以前、資料紹介している（鷲谷1998）。こうした良質のヒスイが、上越地方からどのようなルートでこの地に持ち込まれたか明らかでないが、群馬県内において、関越自動車道・上越新幹線関連調査よりも、上信越自動車道・北陸新幹線関連調査で多くのヒスイ製大珠が出土していることは示唆的である。

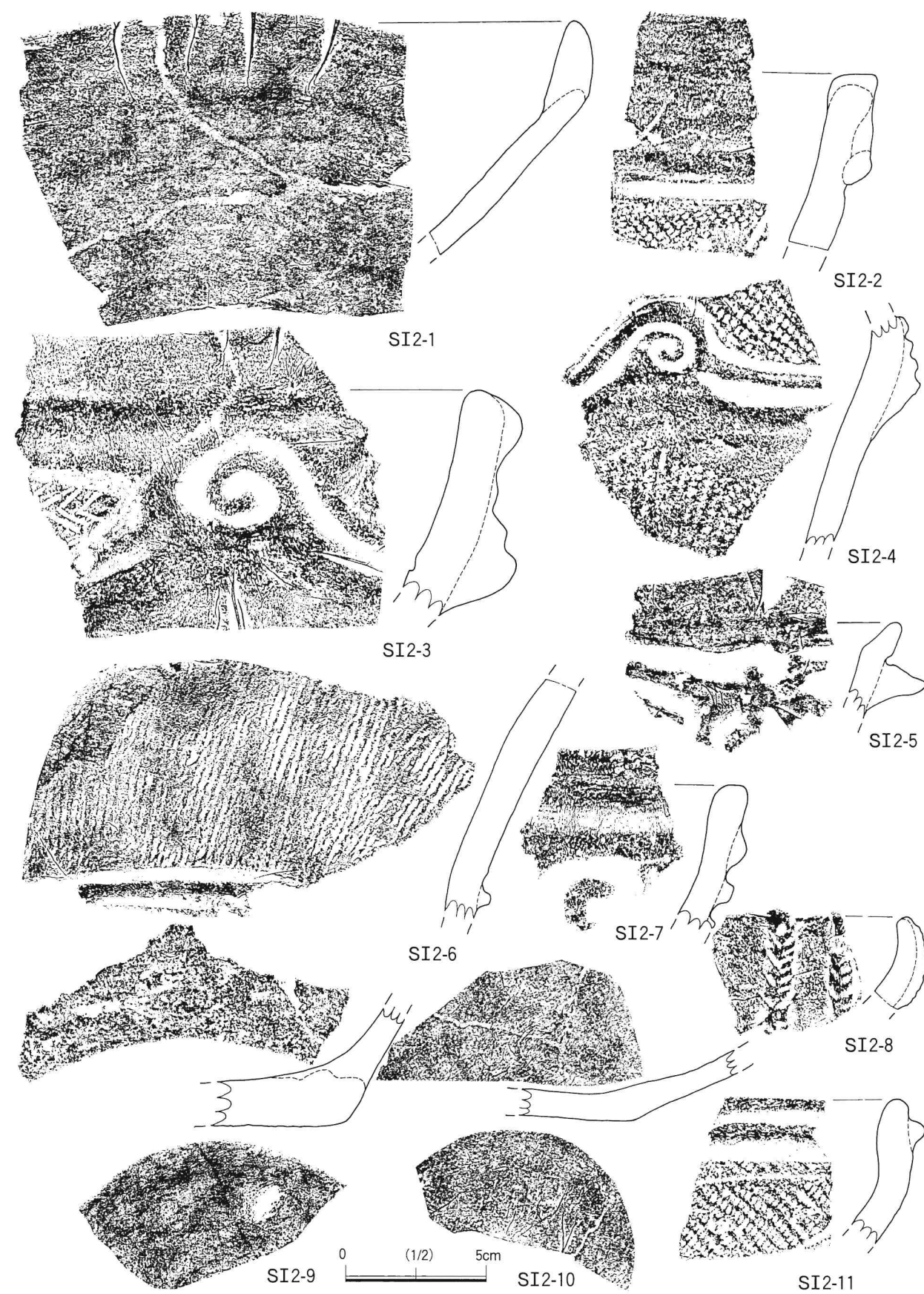
引用文献

鷲谷亨信 1998「高崎情報団地Ⅱ遺跡出土の翡翠製大珠」東国史論第13号 群馬考古学研究会
松村和男 1999「短剣形石器について」『沼南遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第259集

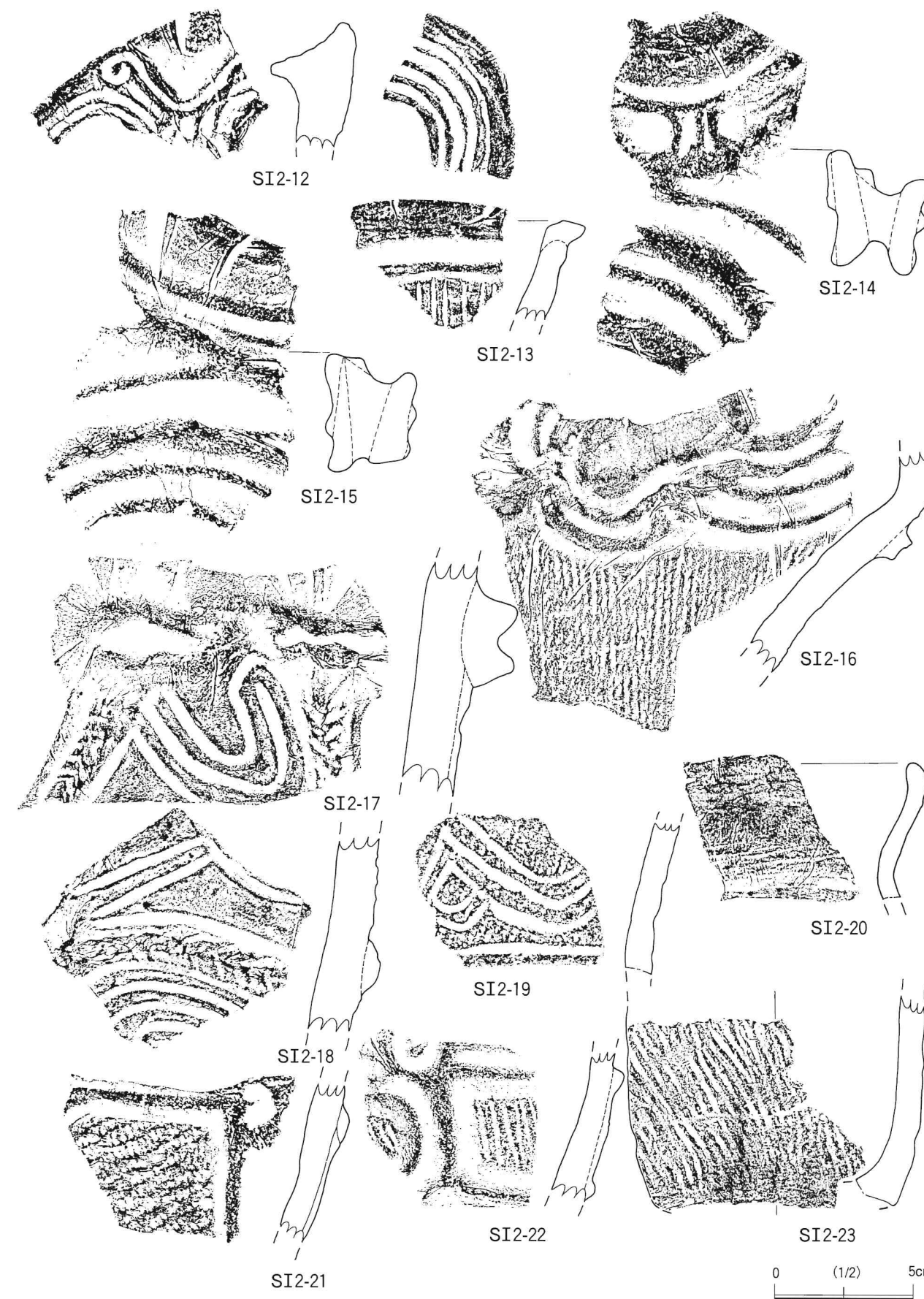


第19図 2区縄文遺構外出土ヒスイ製大珠

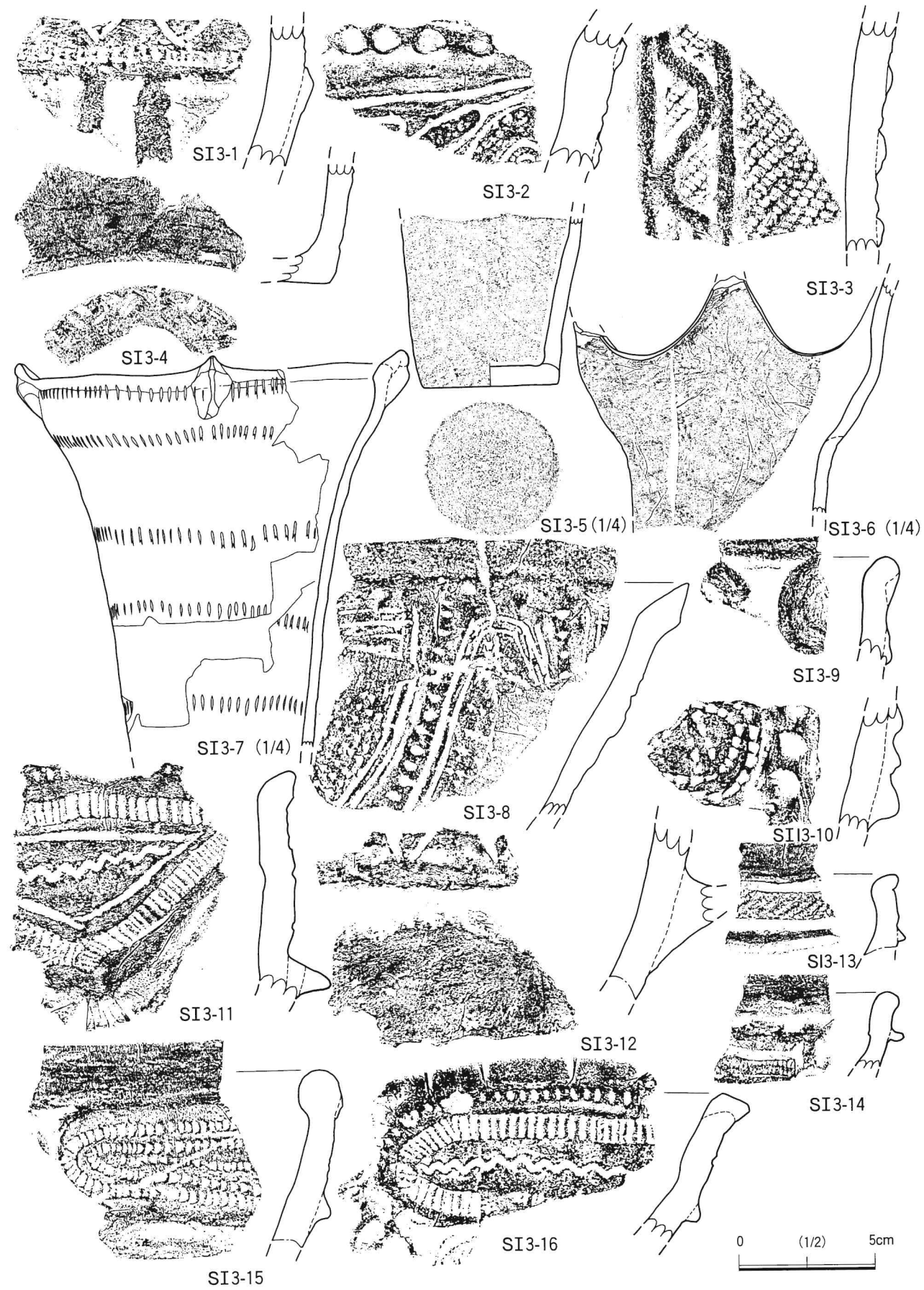
(2) 土器・土製品



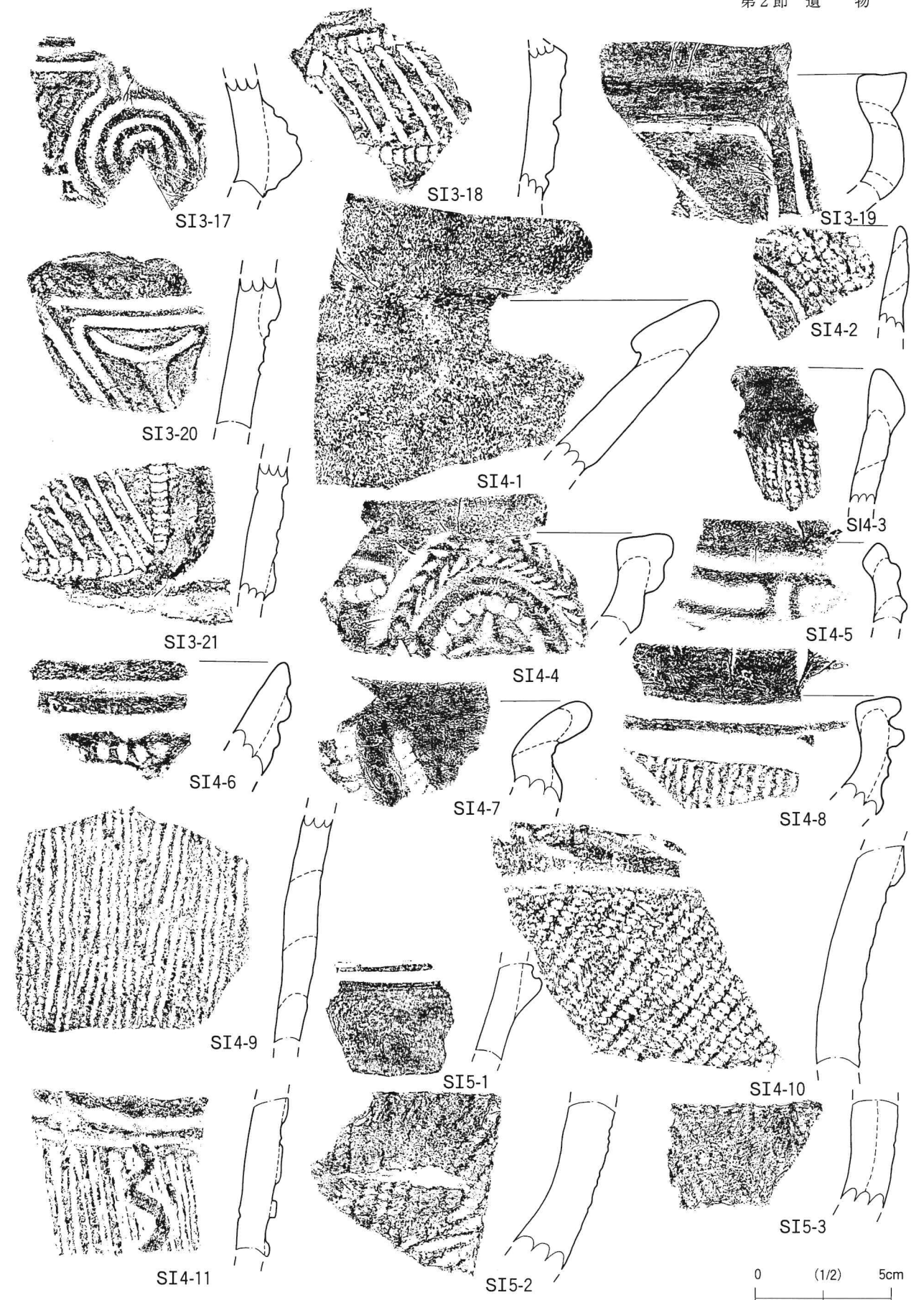
第20図 2区住居出土土器(1)



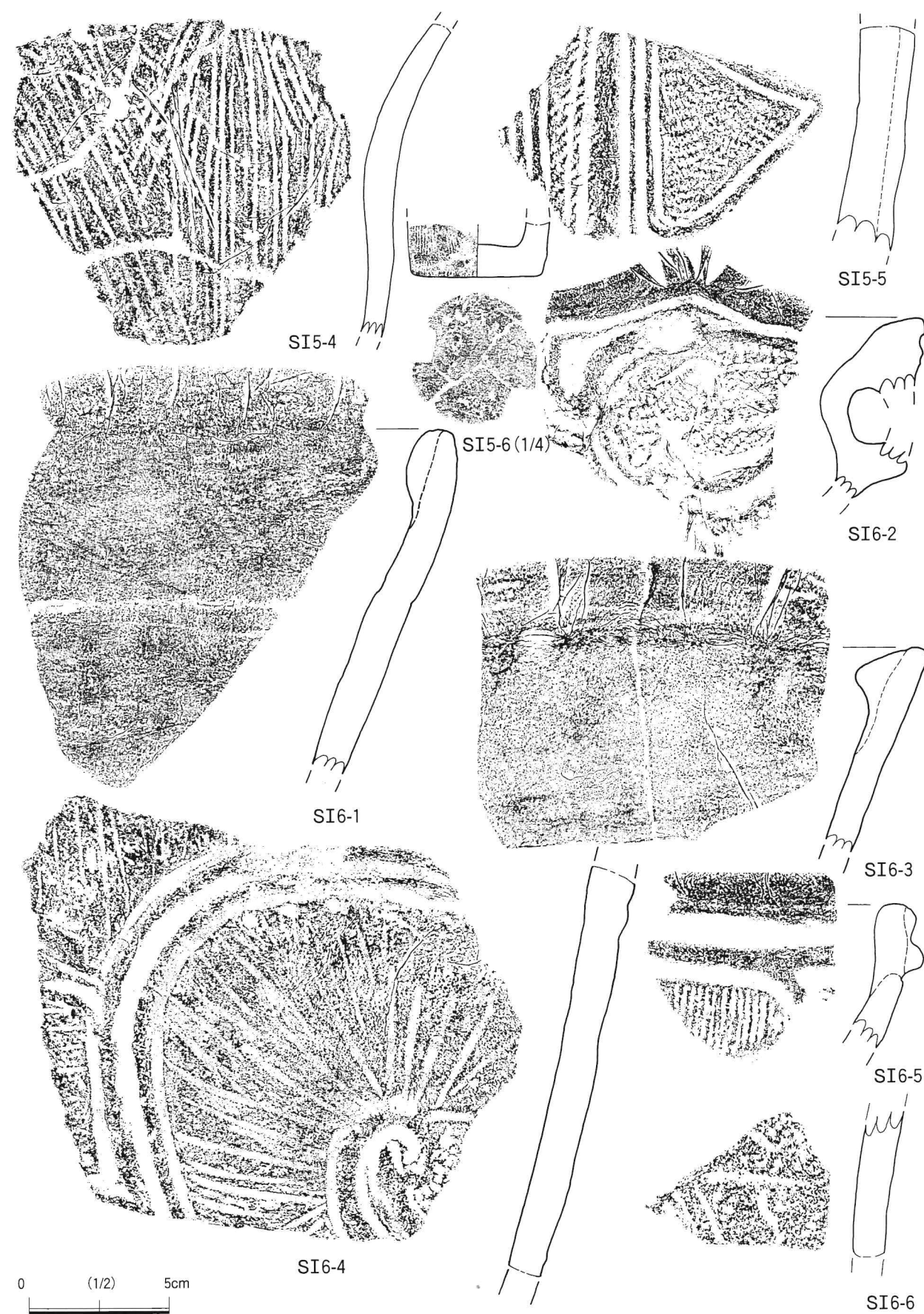
第21図 2区住居出土土器(2)



第22図 2区住居出土土器（3）



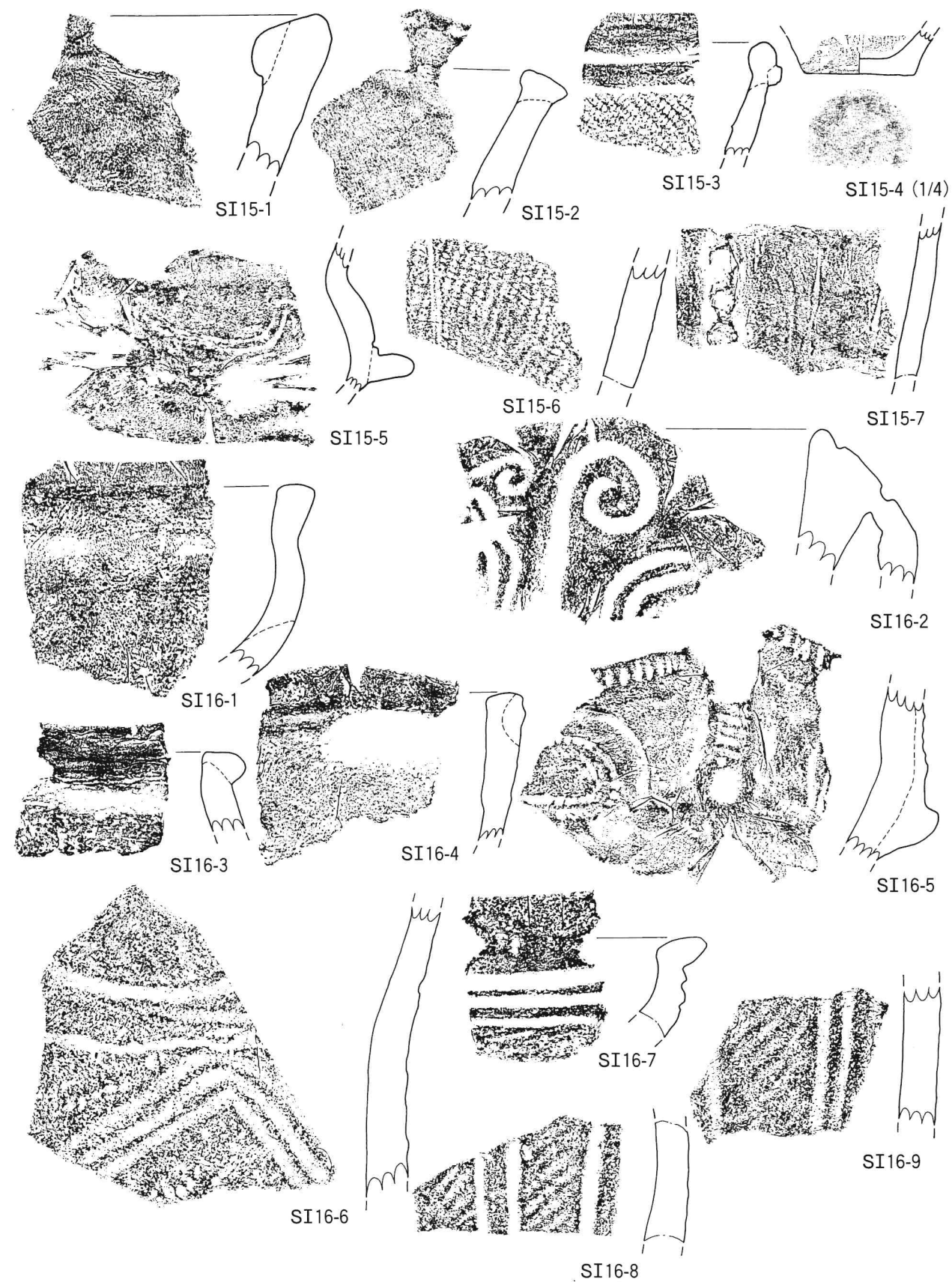
第23図 2区住居出土土器（4）



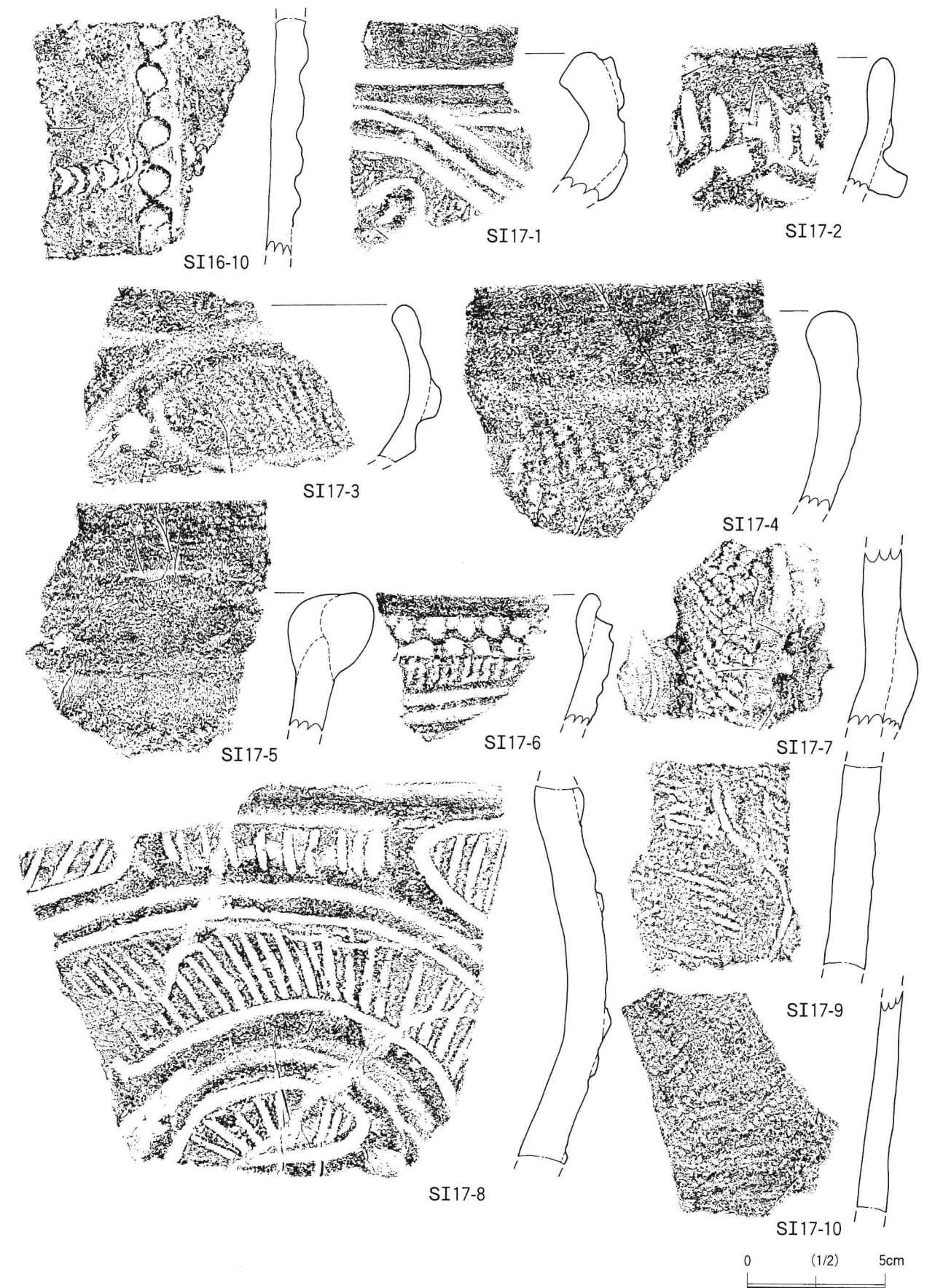
第24図 2区住居出土土器（5）



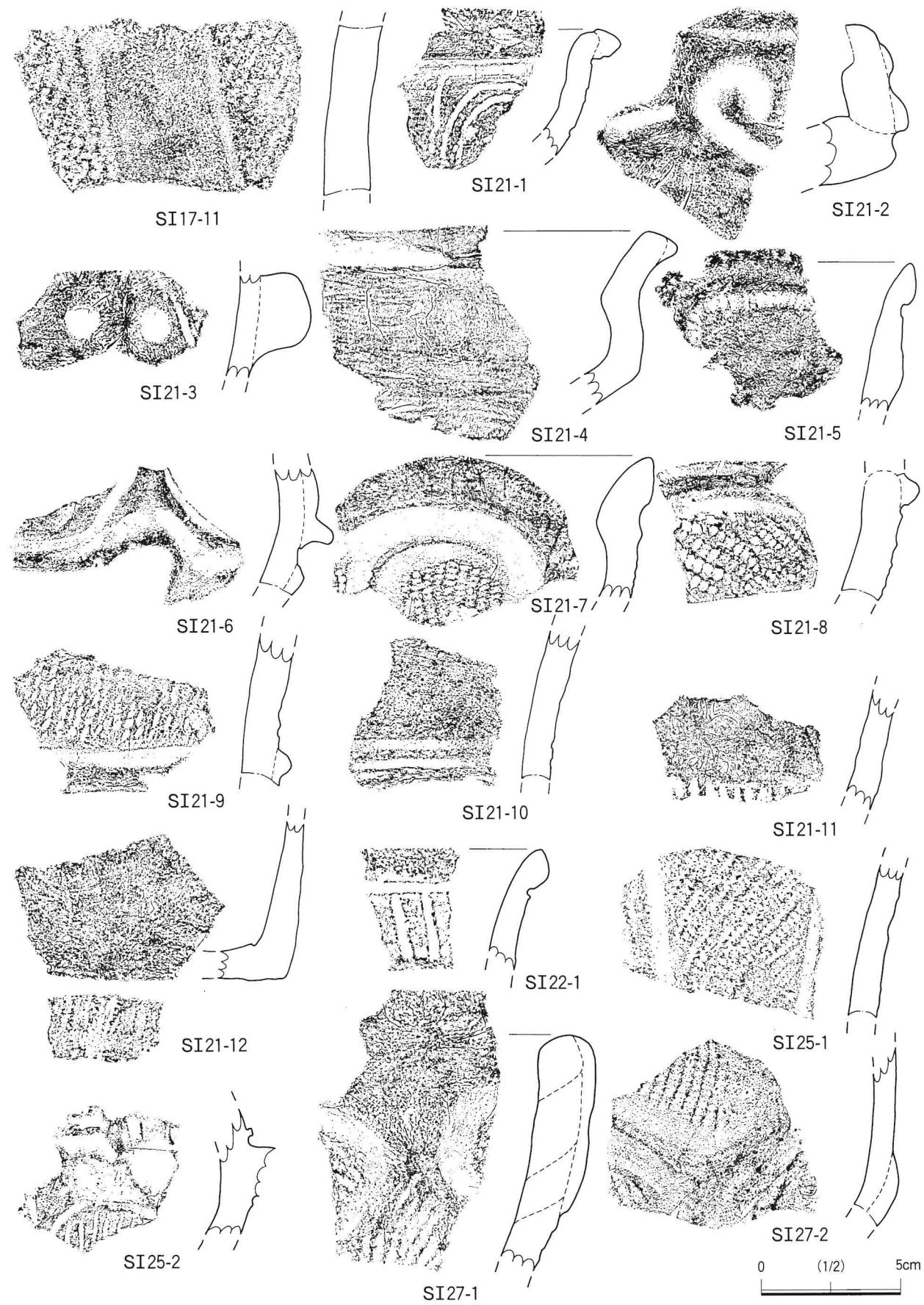
第25図 2区住居出土土器（6）



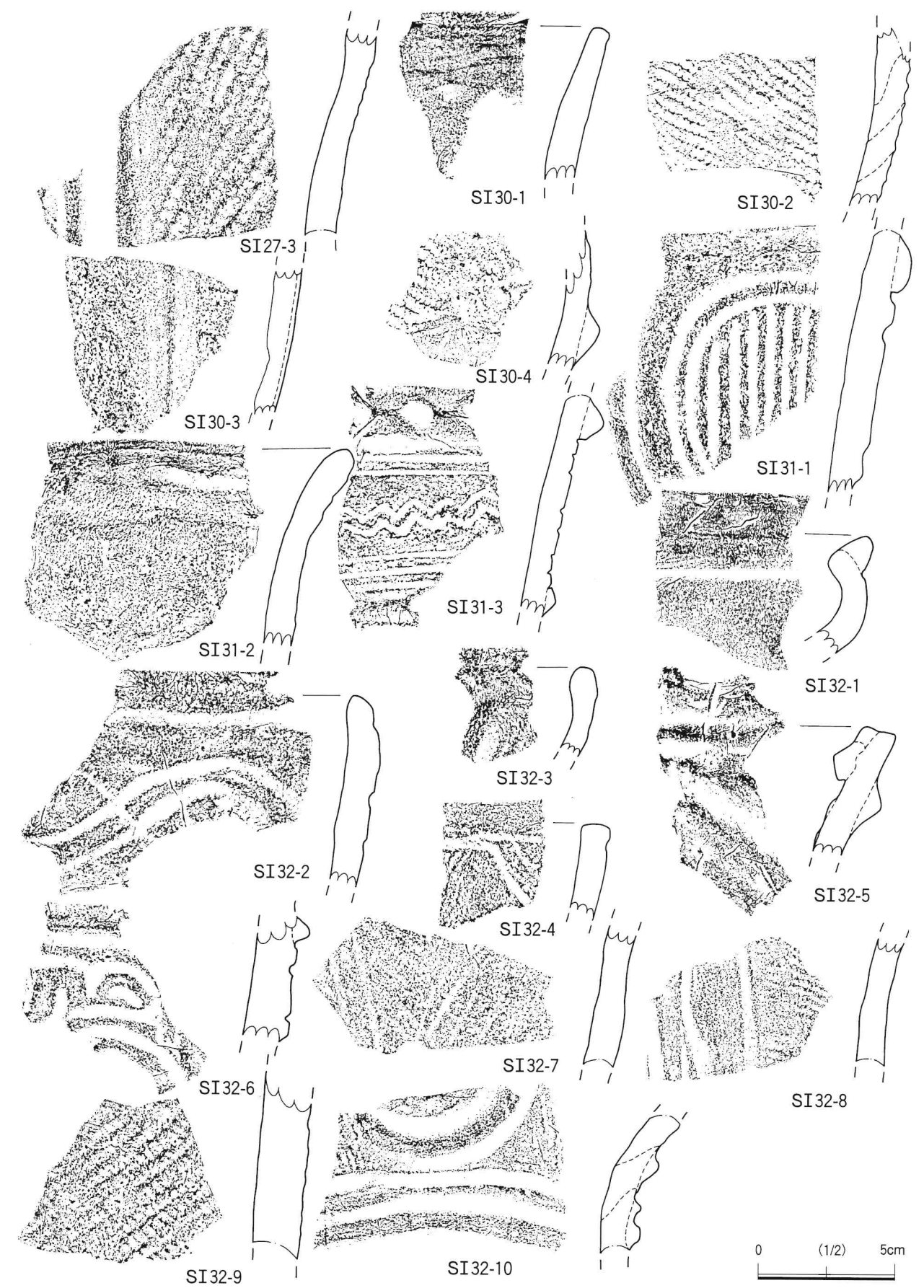
第26図 2区住居出土土器（7）



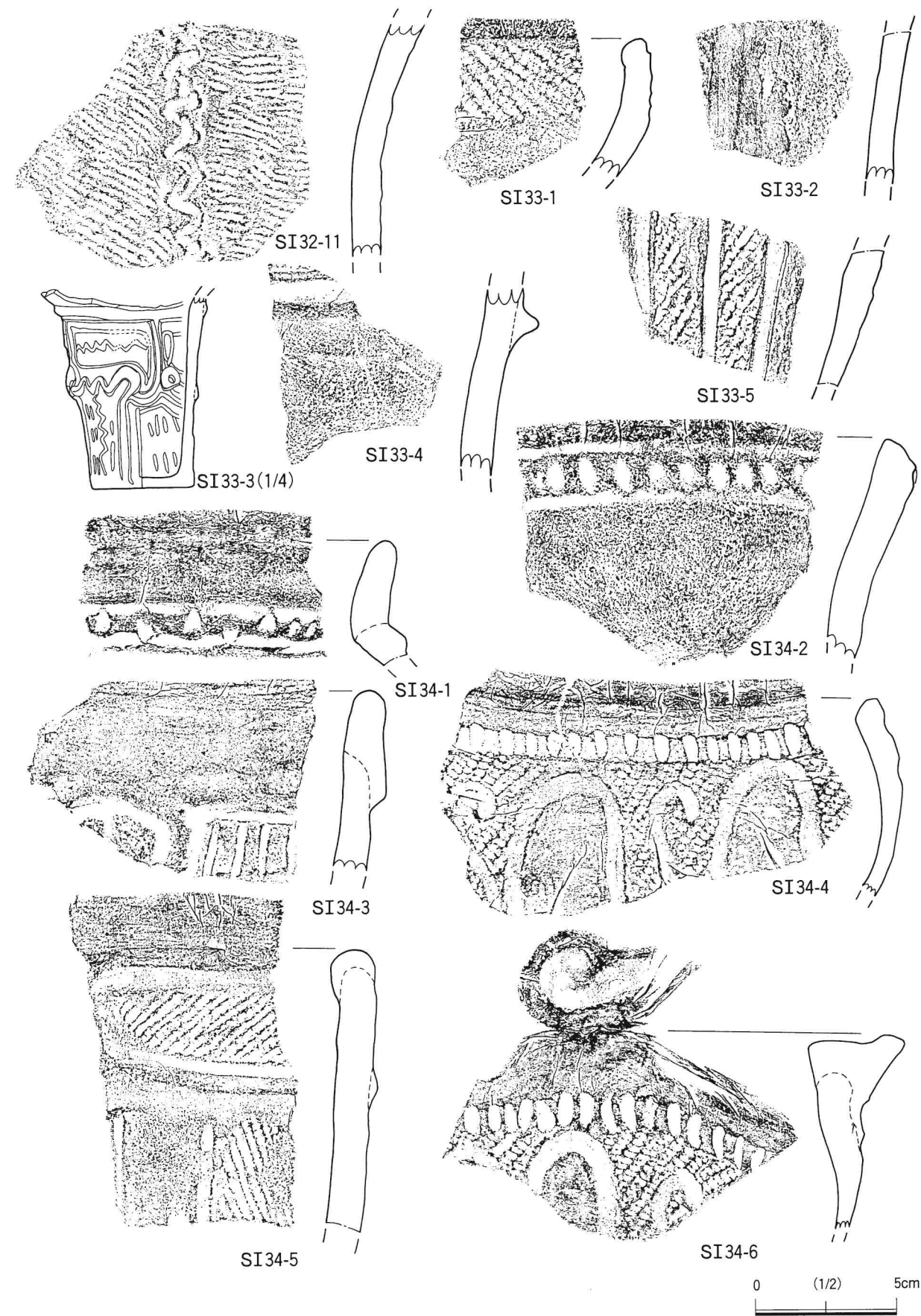
第27図 2区住居出土土器（8）



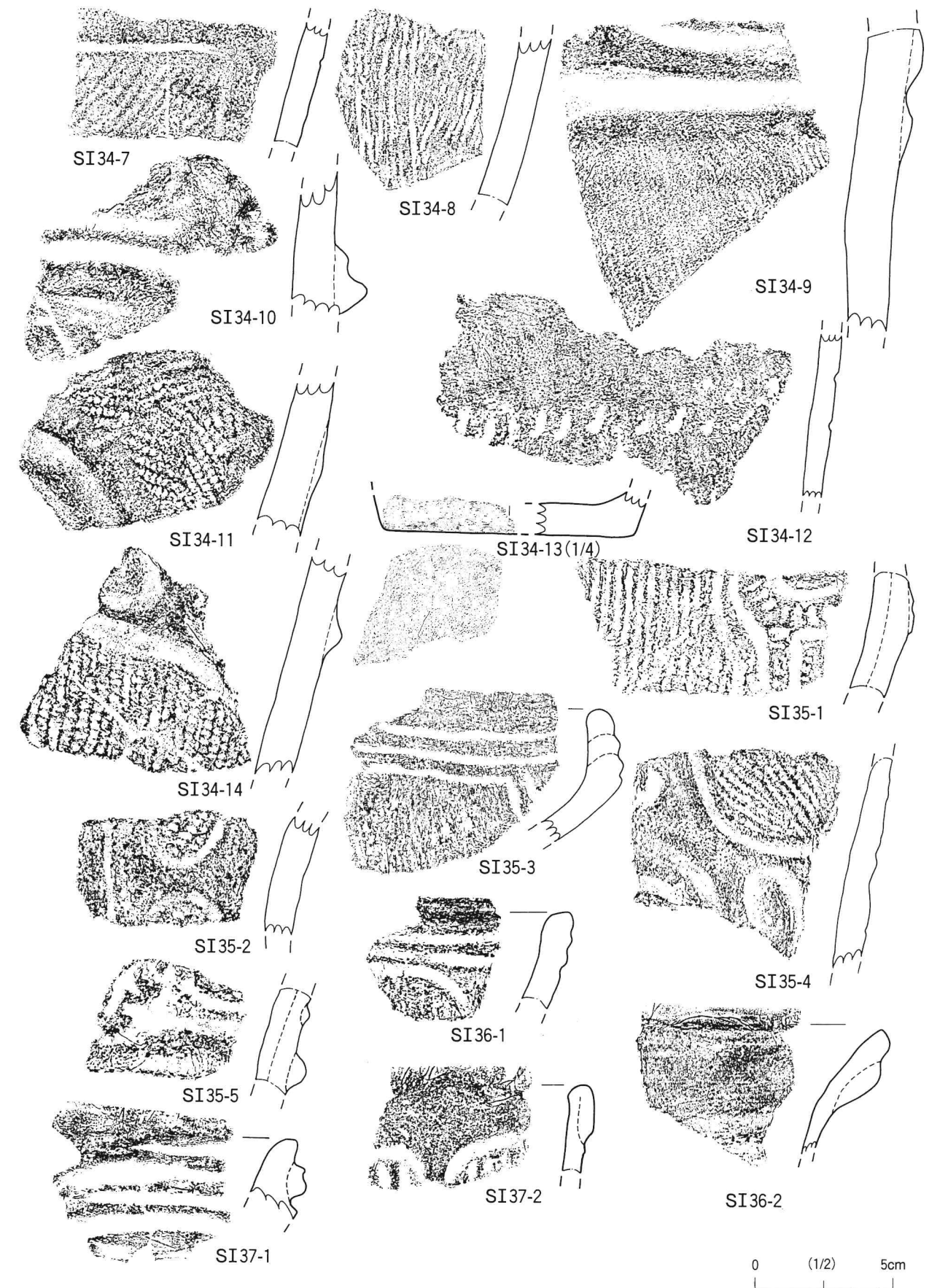
第28図 2区住居出土土器 (9)



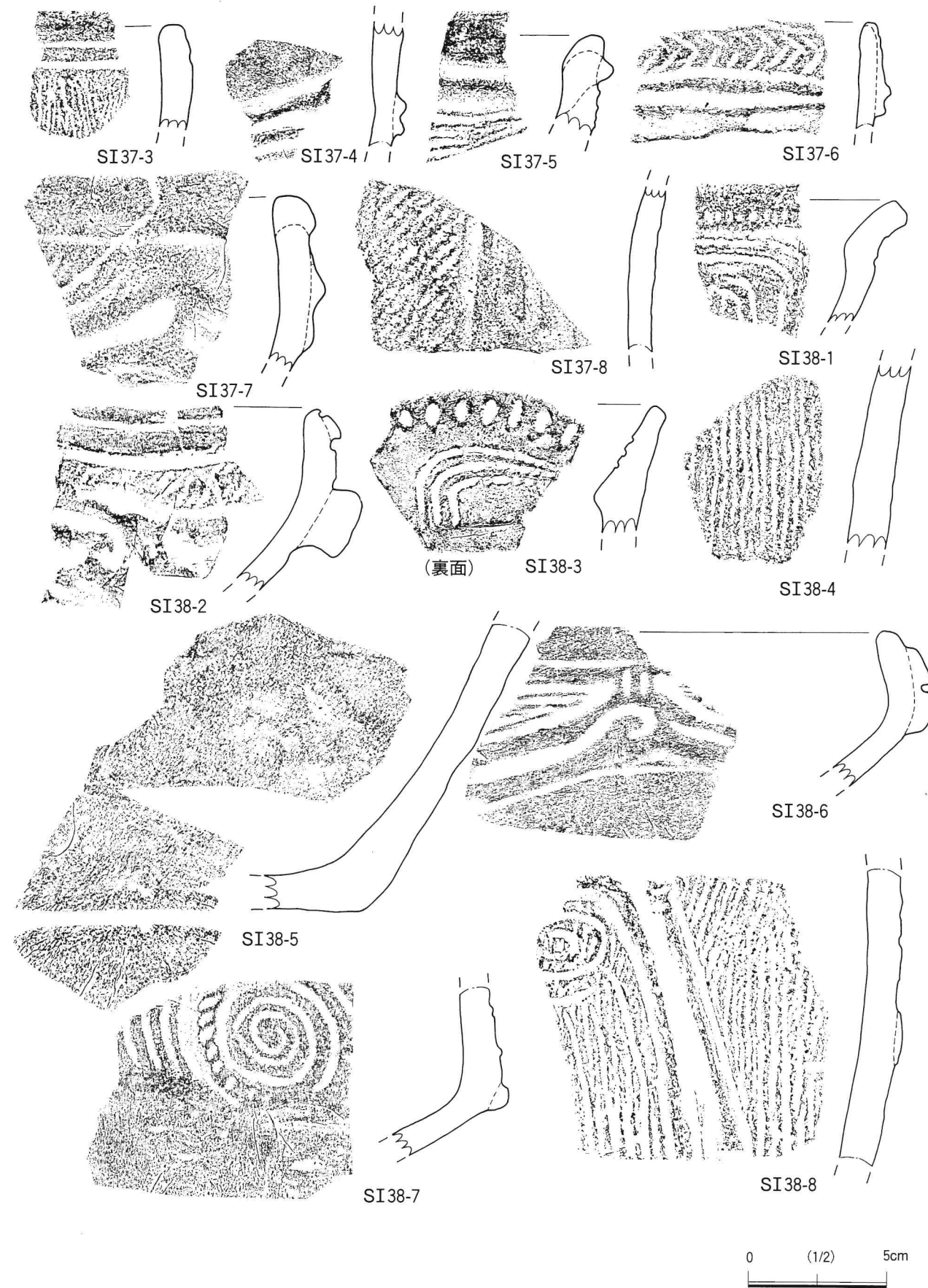
第29図 2区住居出土土器 (10)



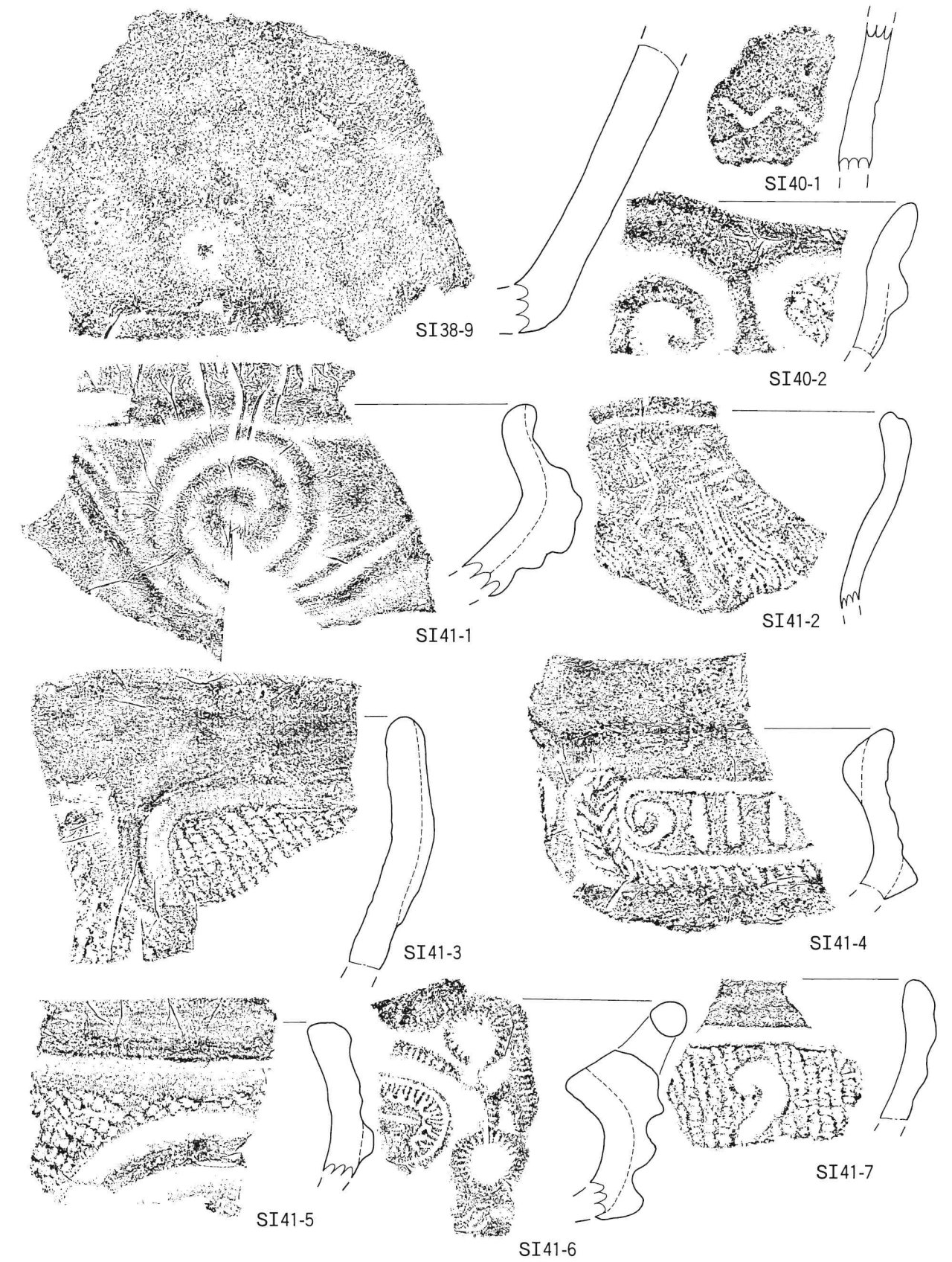
第30図 2区住居出土土器 (11)



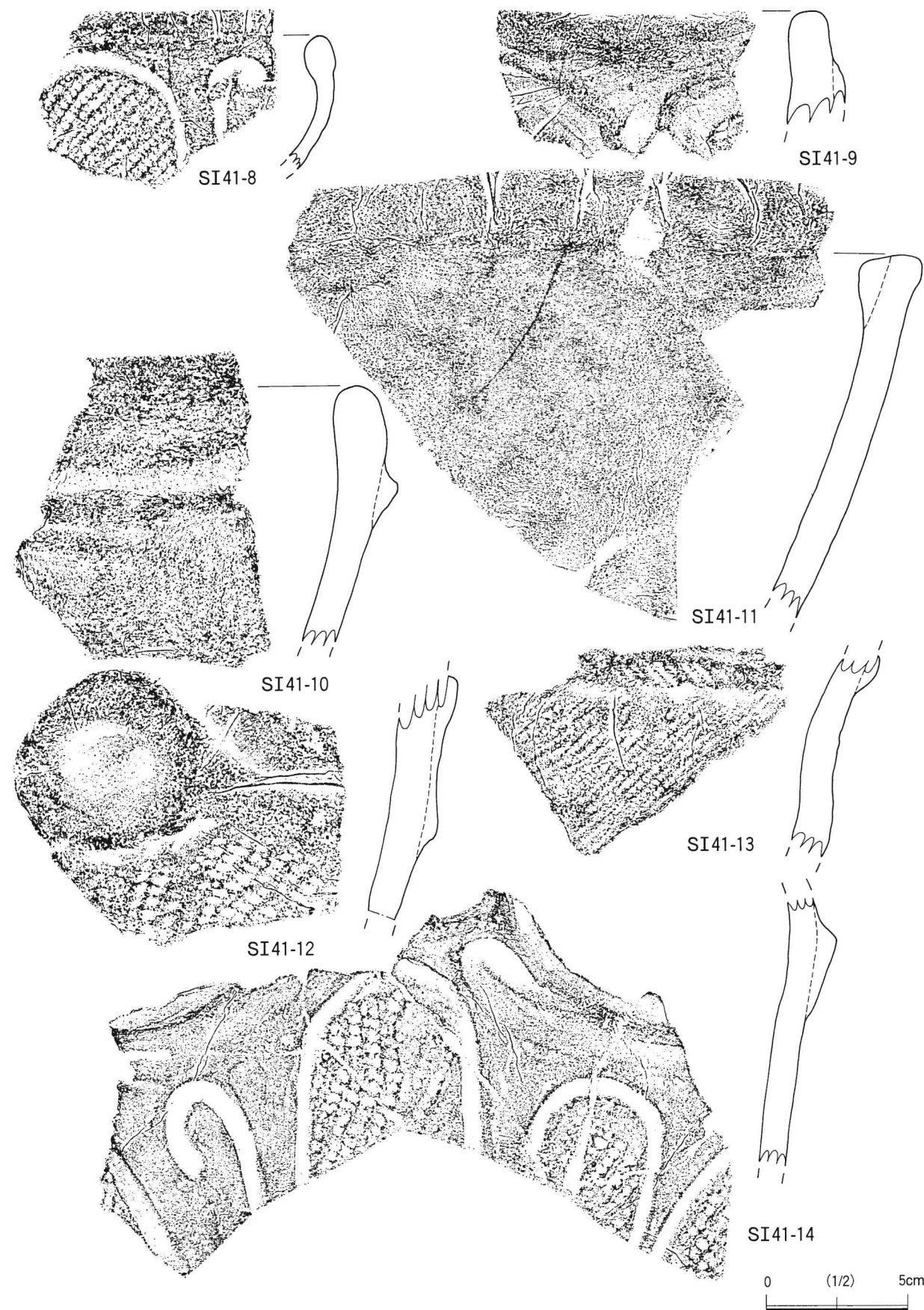
第31図 2区住居出土土器 (12)



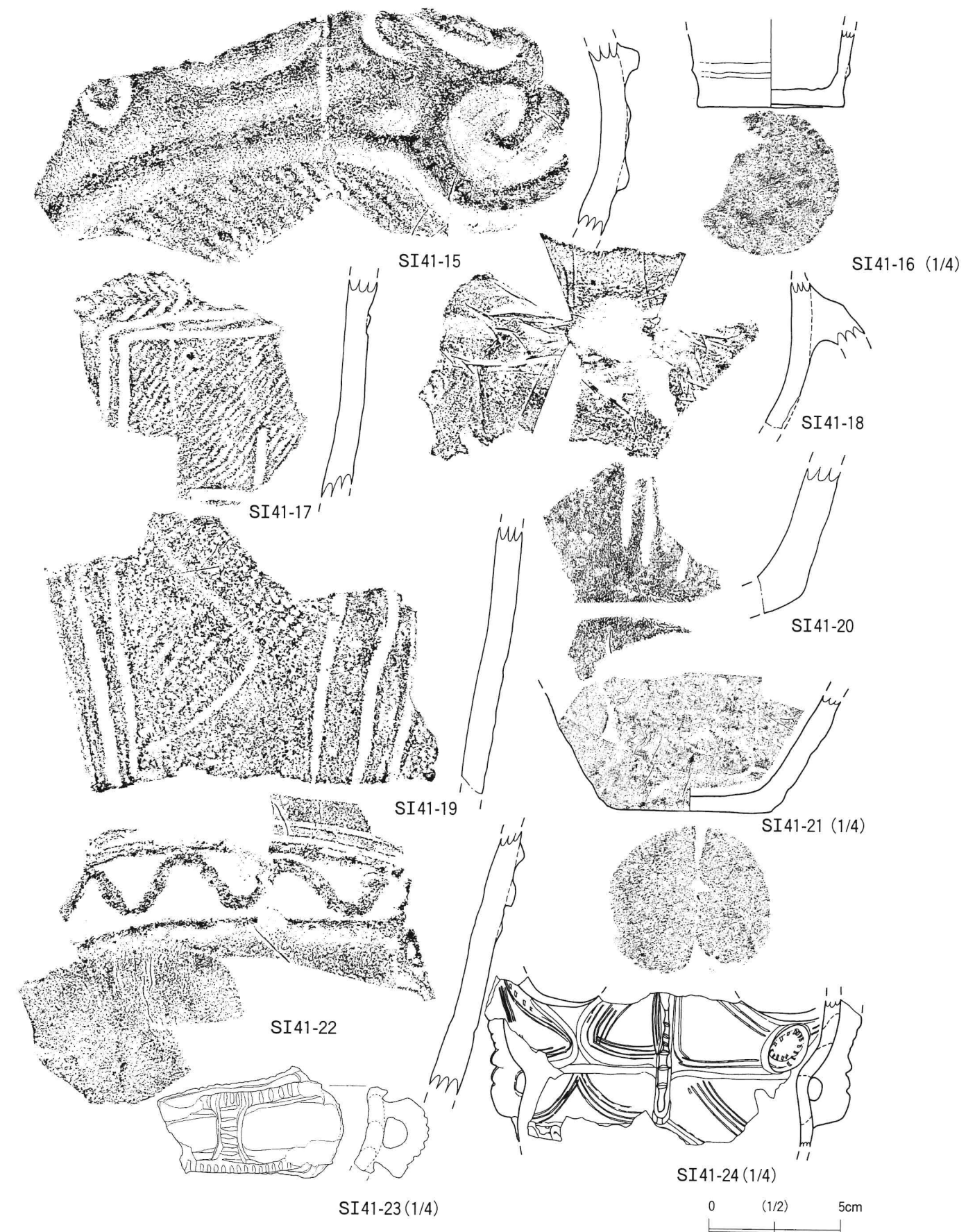
第32図 2区住居出土土器 (13)



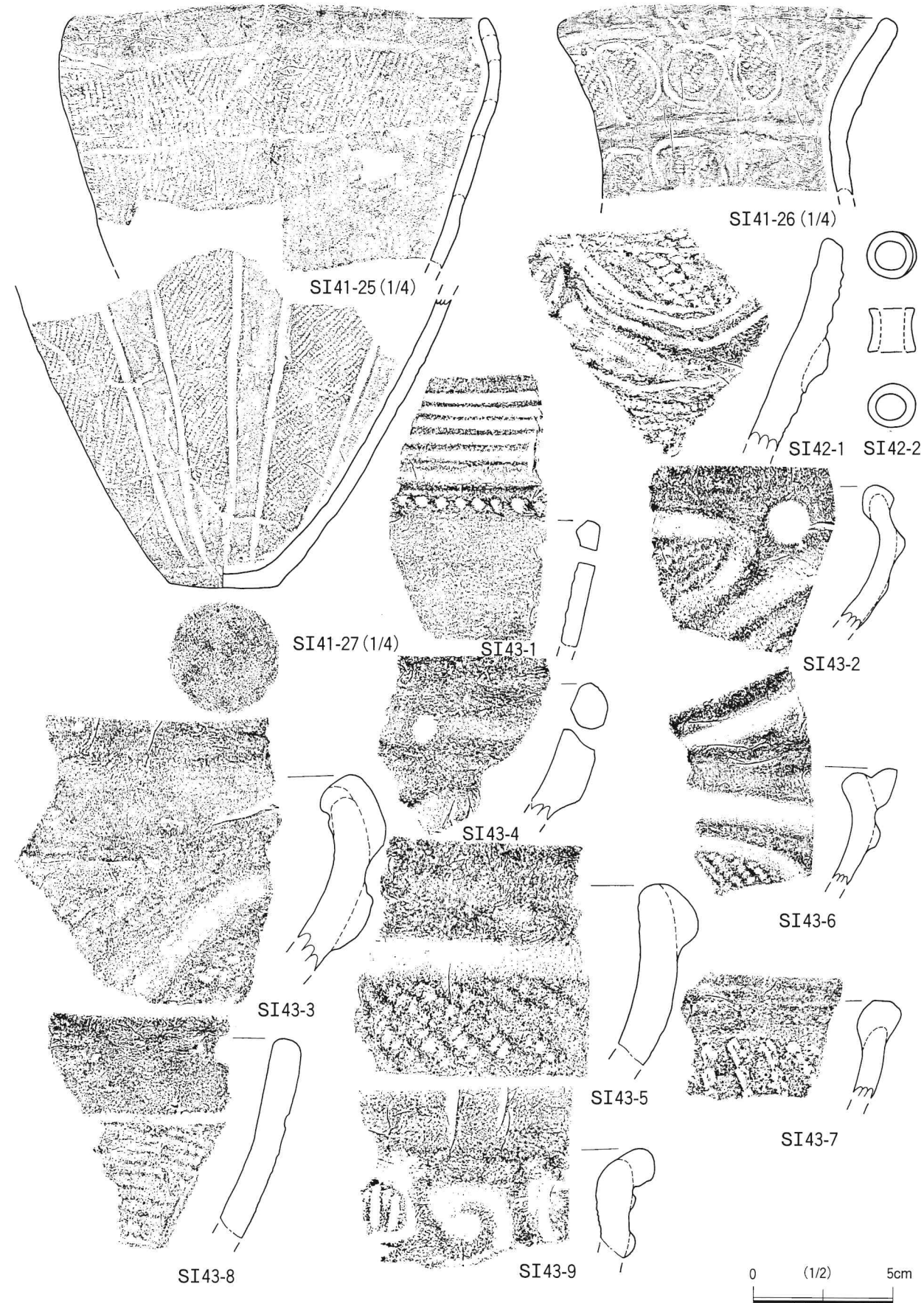
第33図 2区住居出土土器 (14)



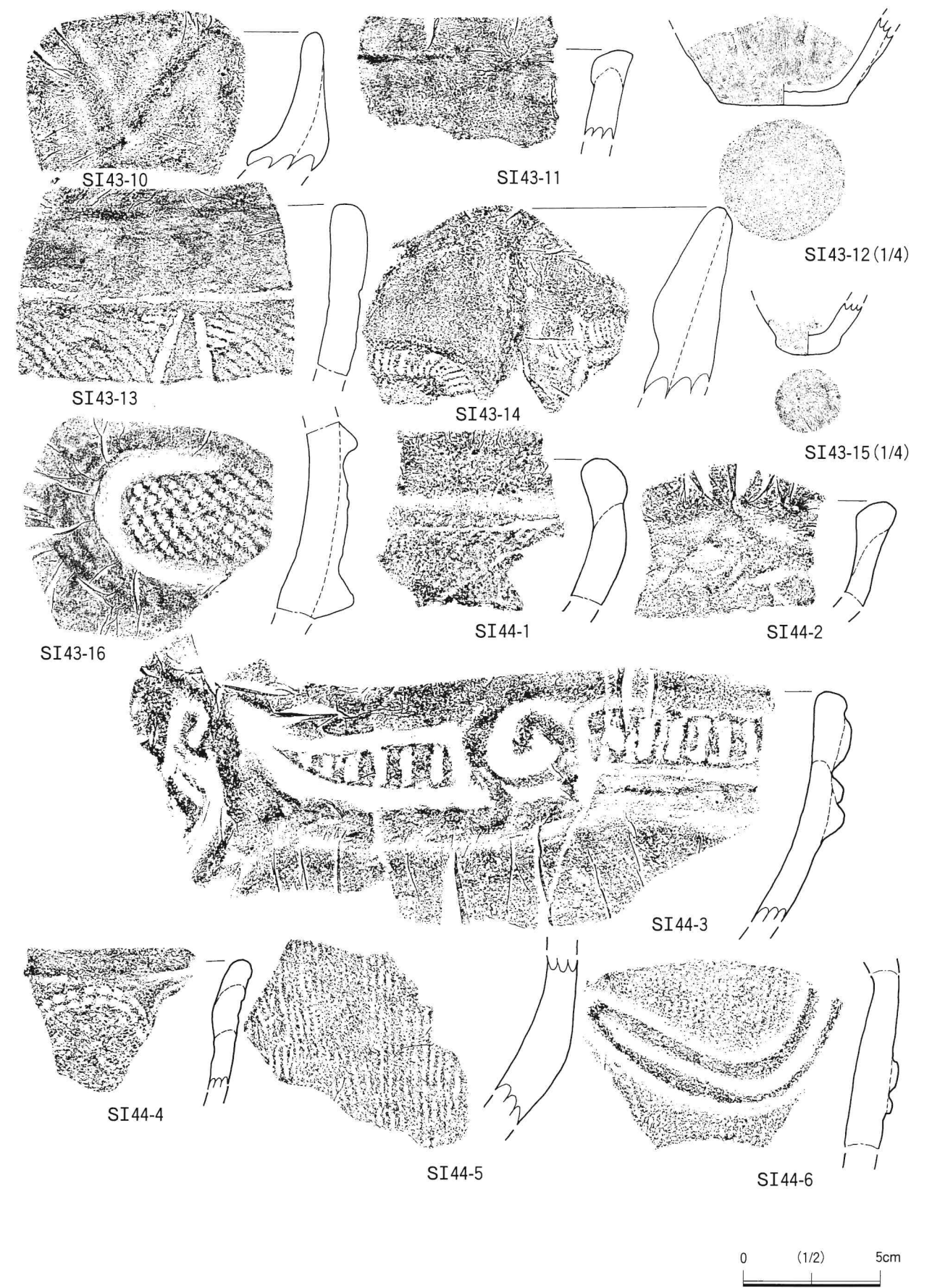
第34図 2区住居出土土器 (15)



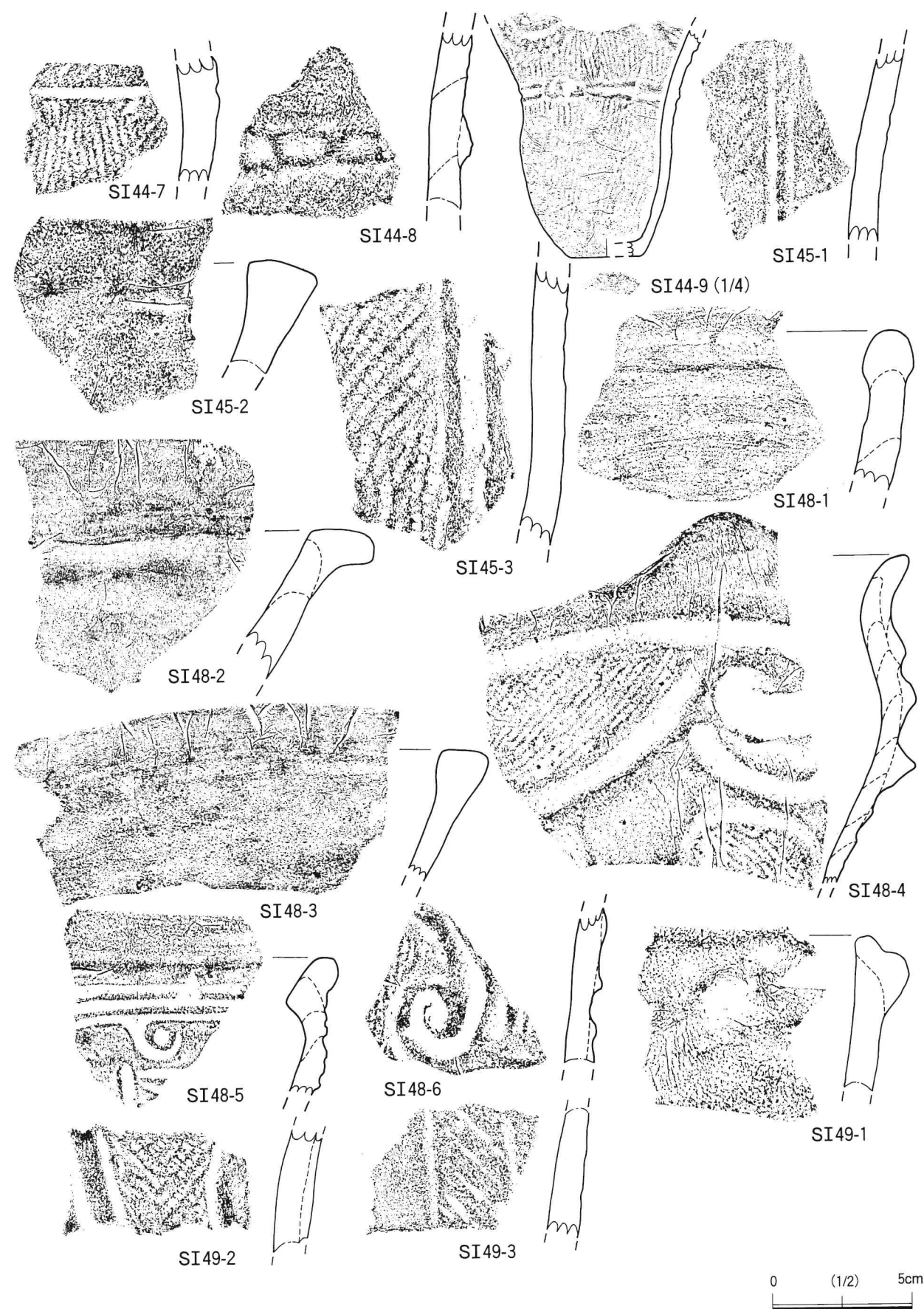
第35図 2区住居出土土器 (16)



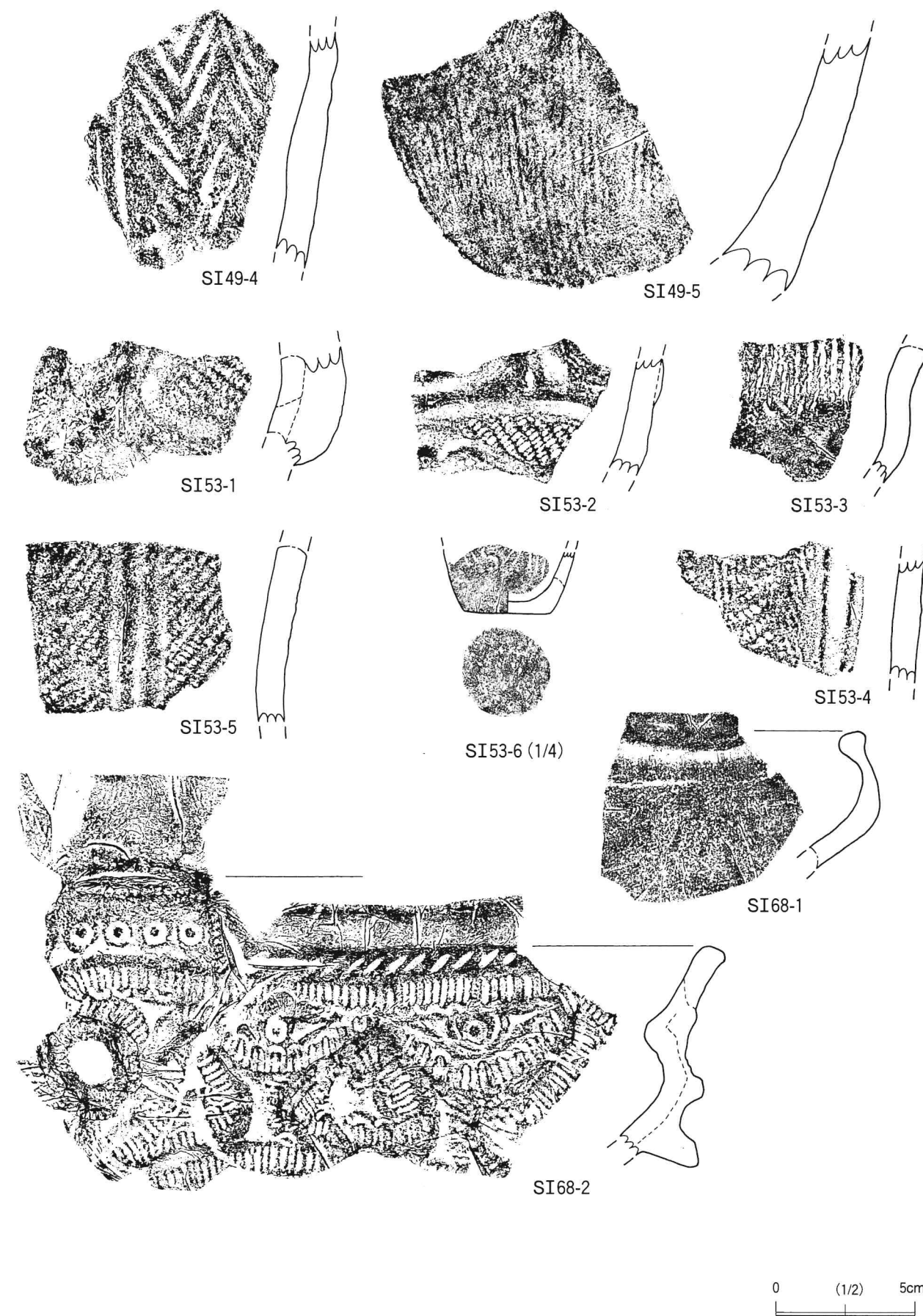
第36図 2区住居出土土器 (17)



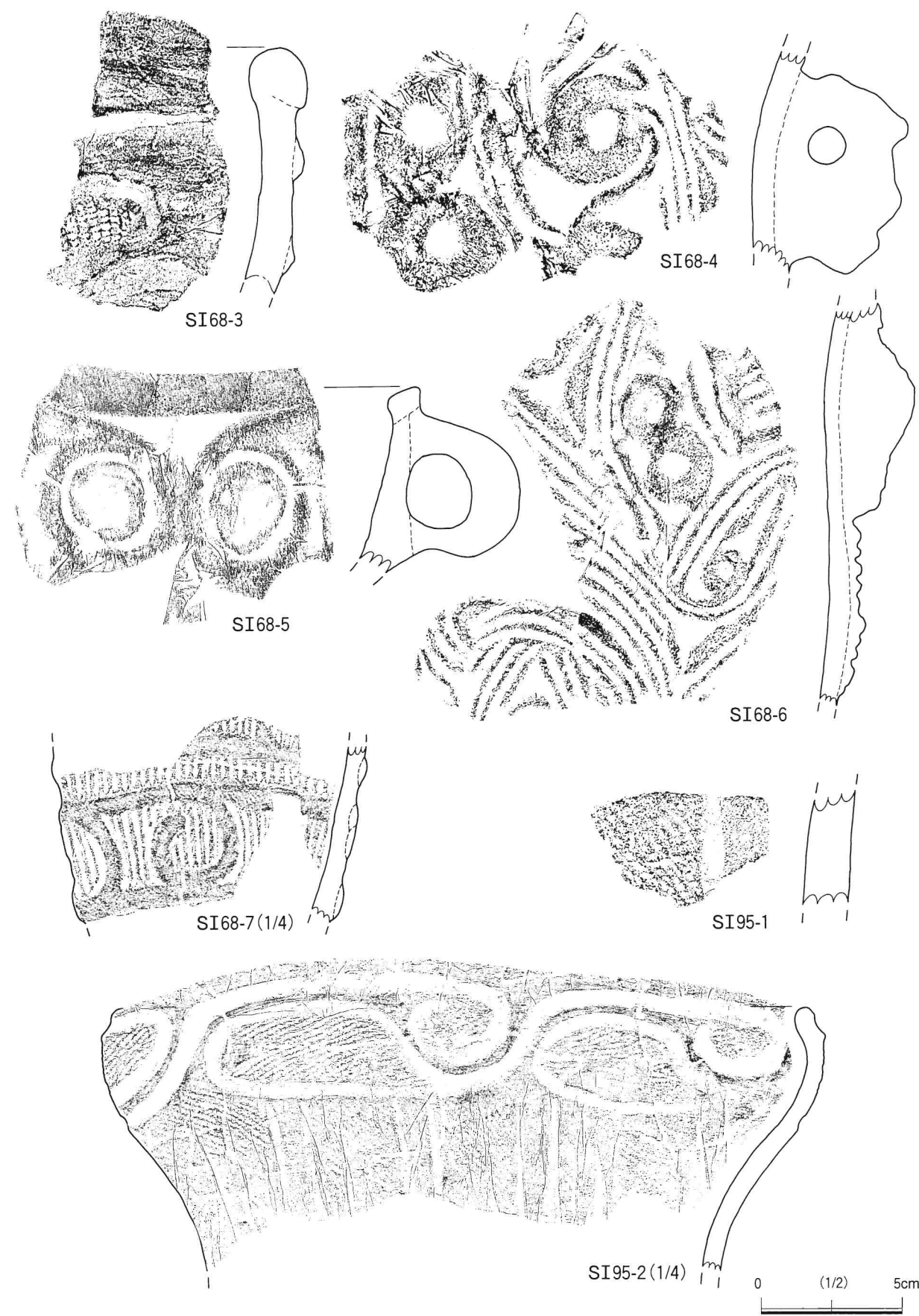
第37図 2区住居出土土器 (18)



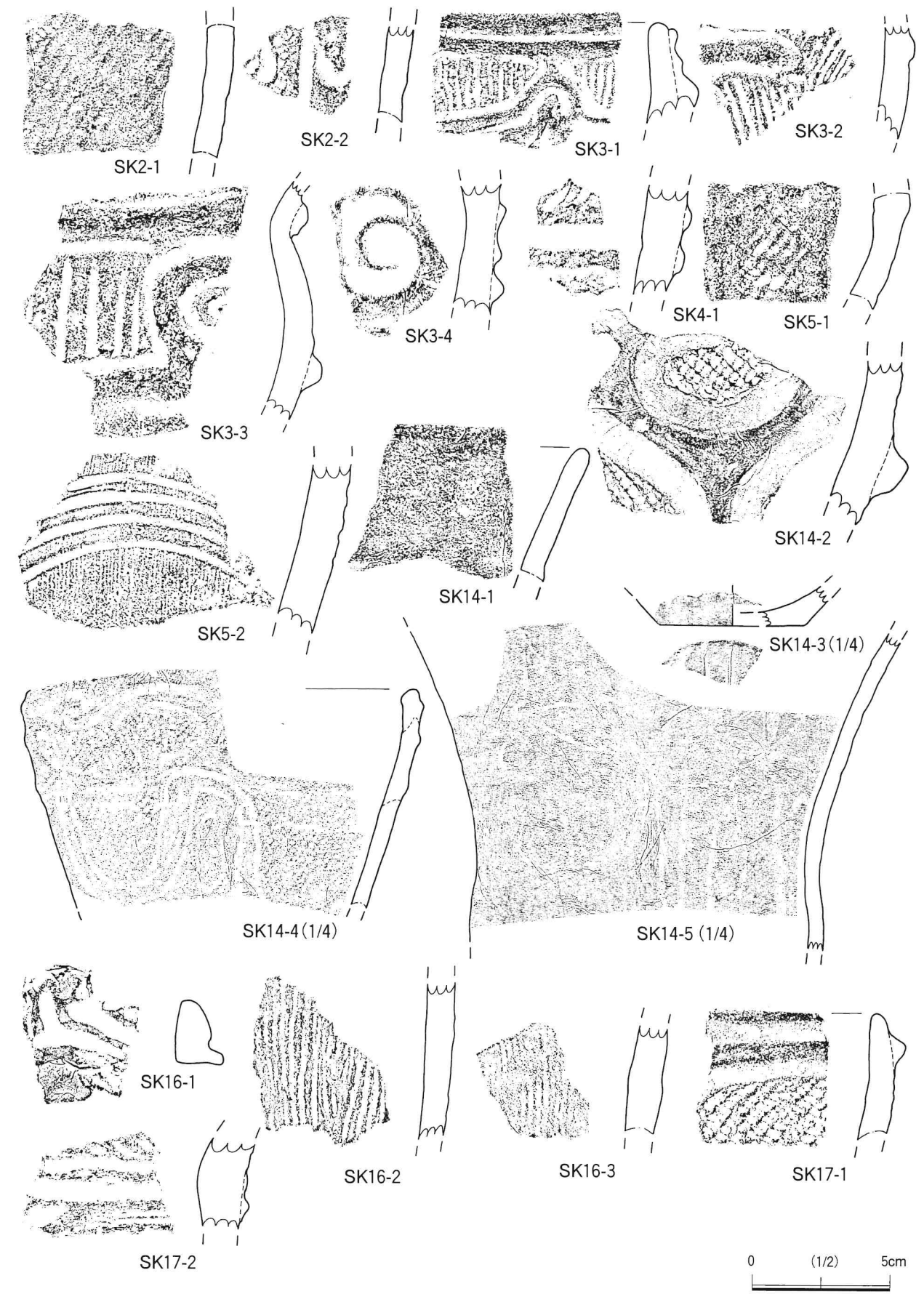
第38図 2区住居出土土器 (19)



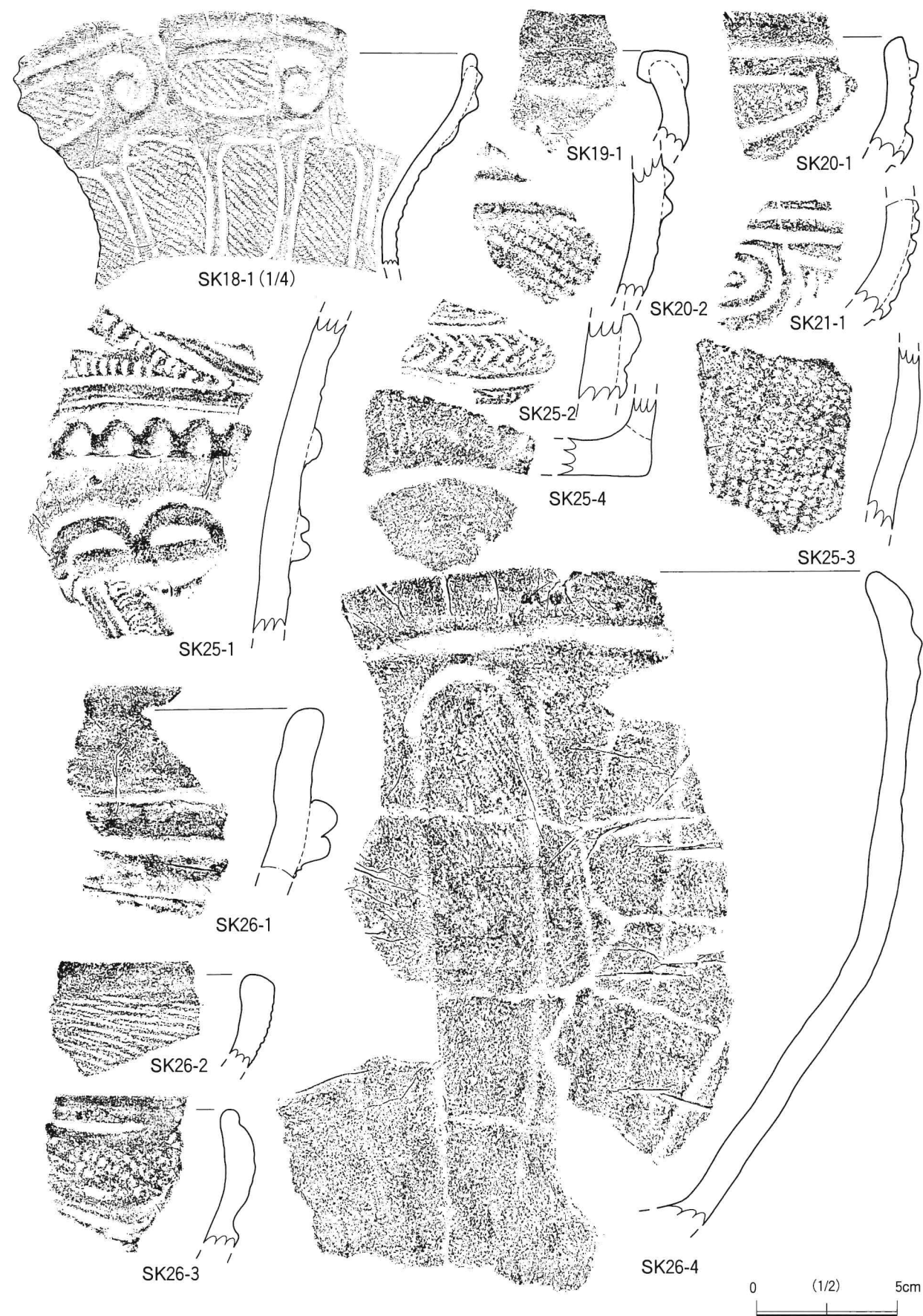
第39図 2区住居出土土器 (20)



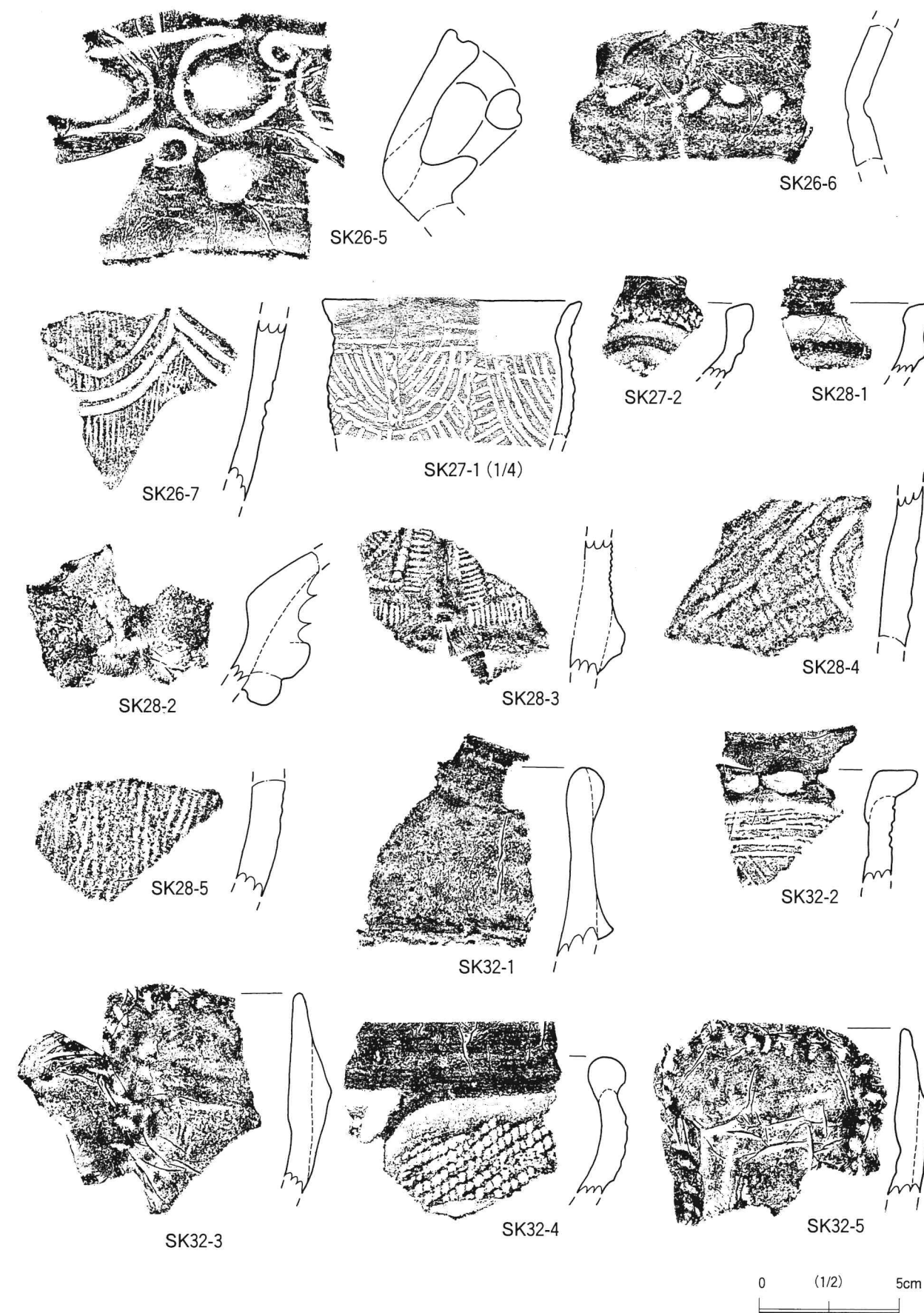
第40図 2区住居出土土器 (21)



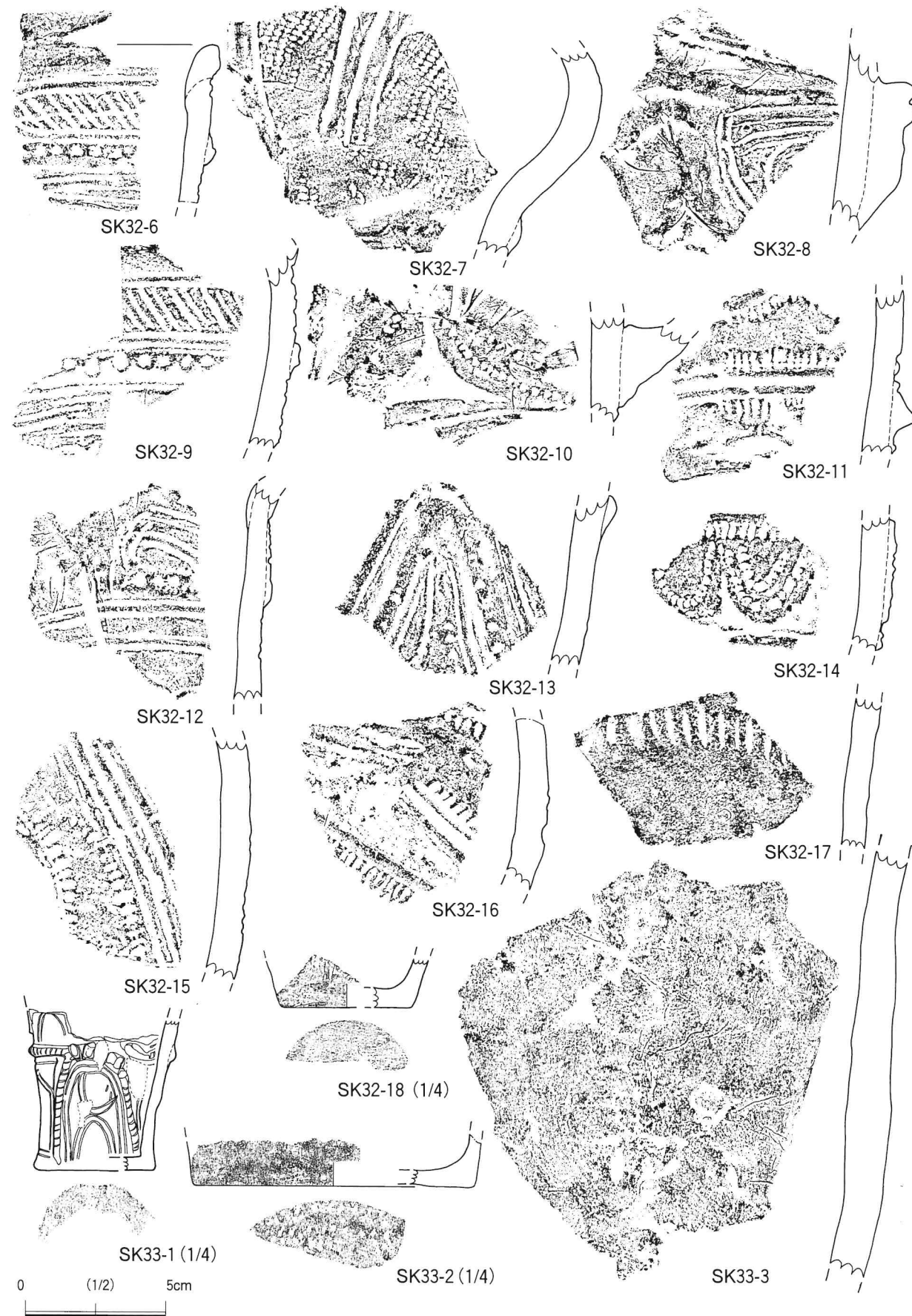
第41図 2区土坑出土土器 (1)



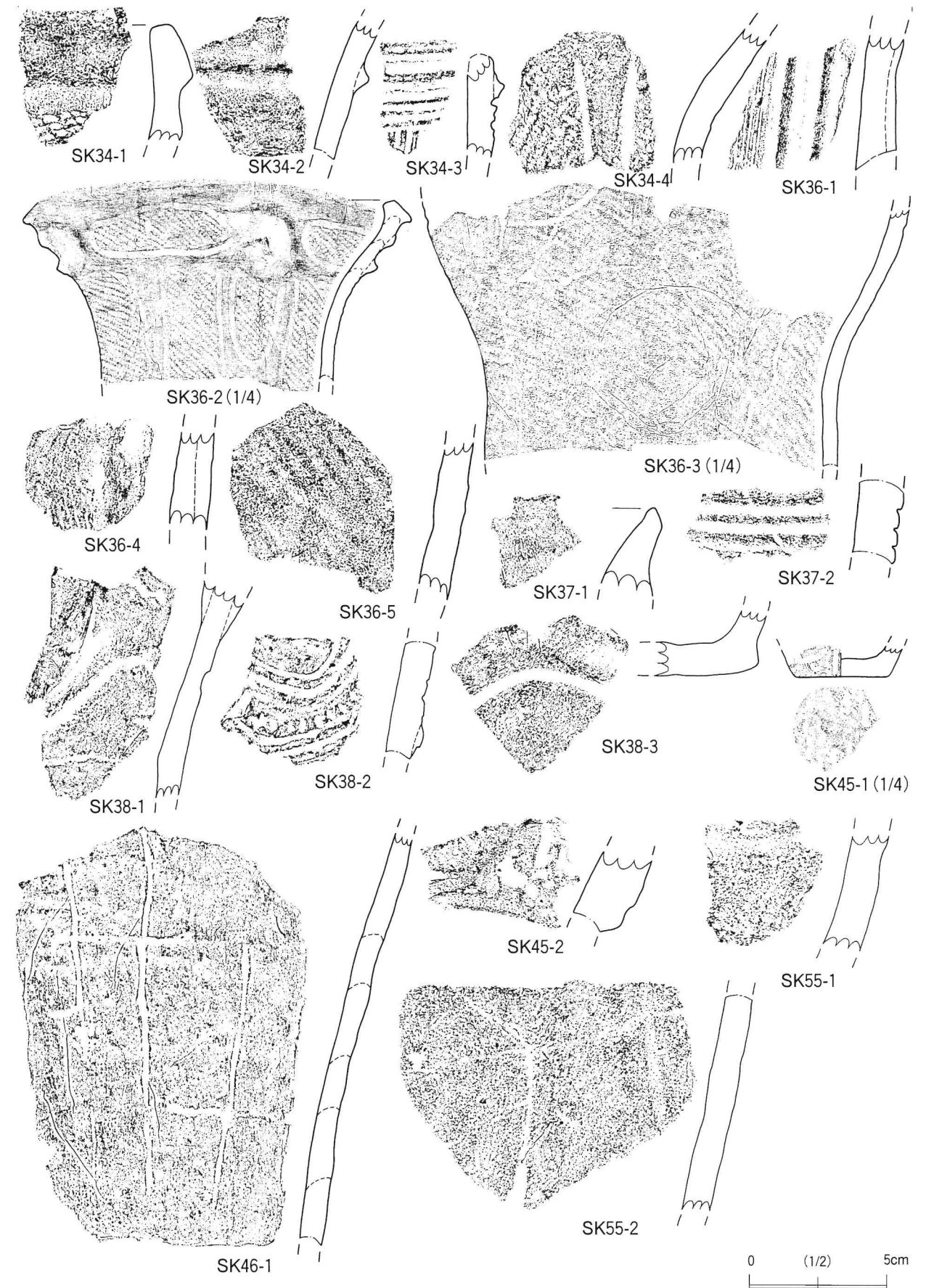
第42図 2区土坑出土土器（2）



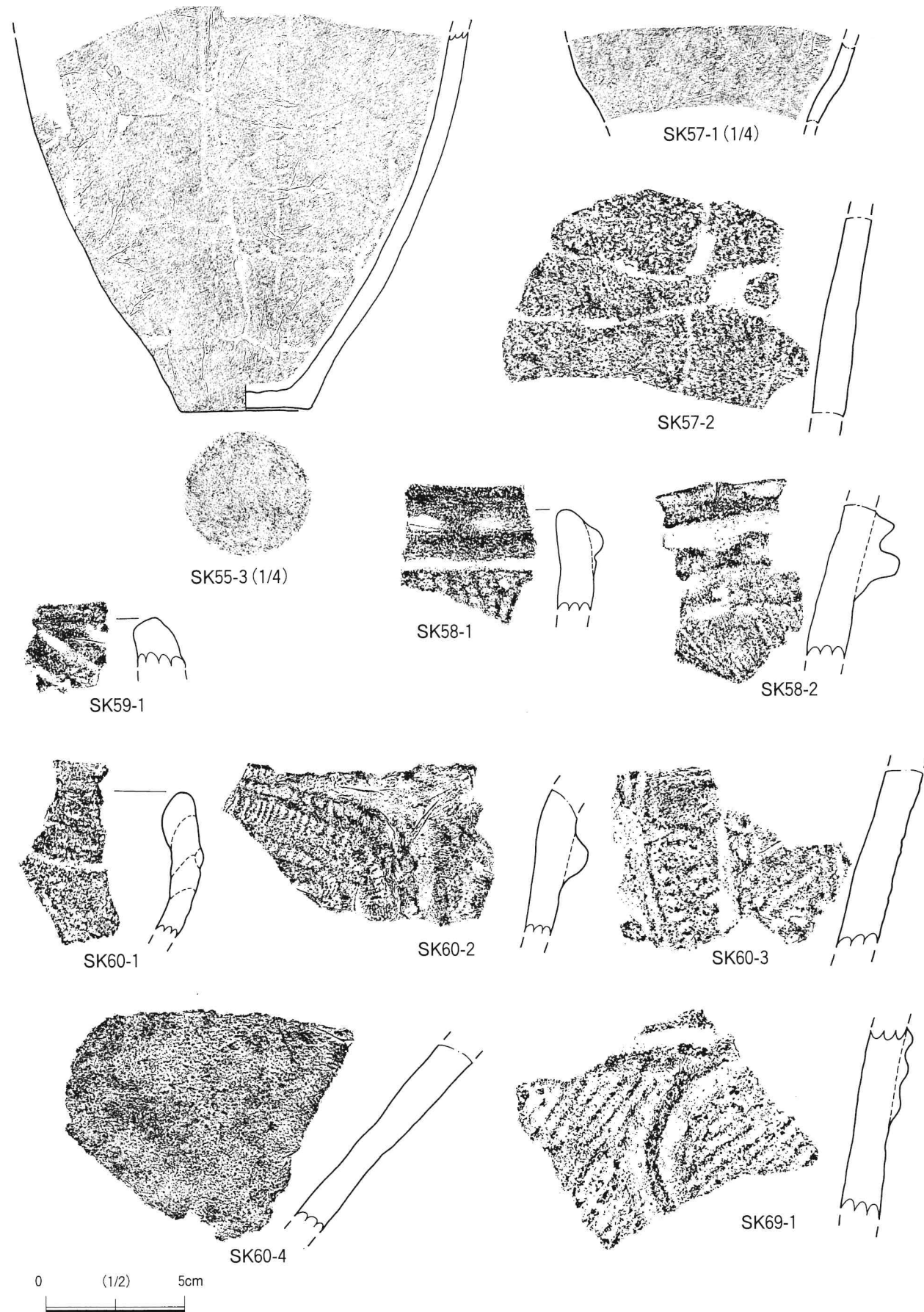
第43図 2区土坑出土土器（3）



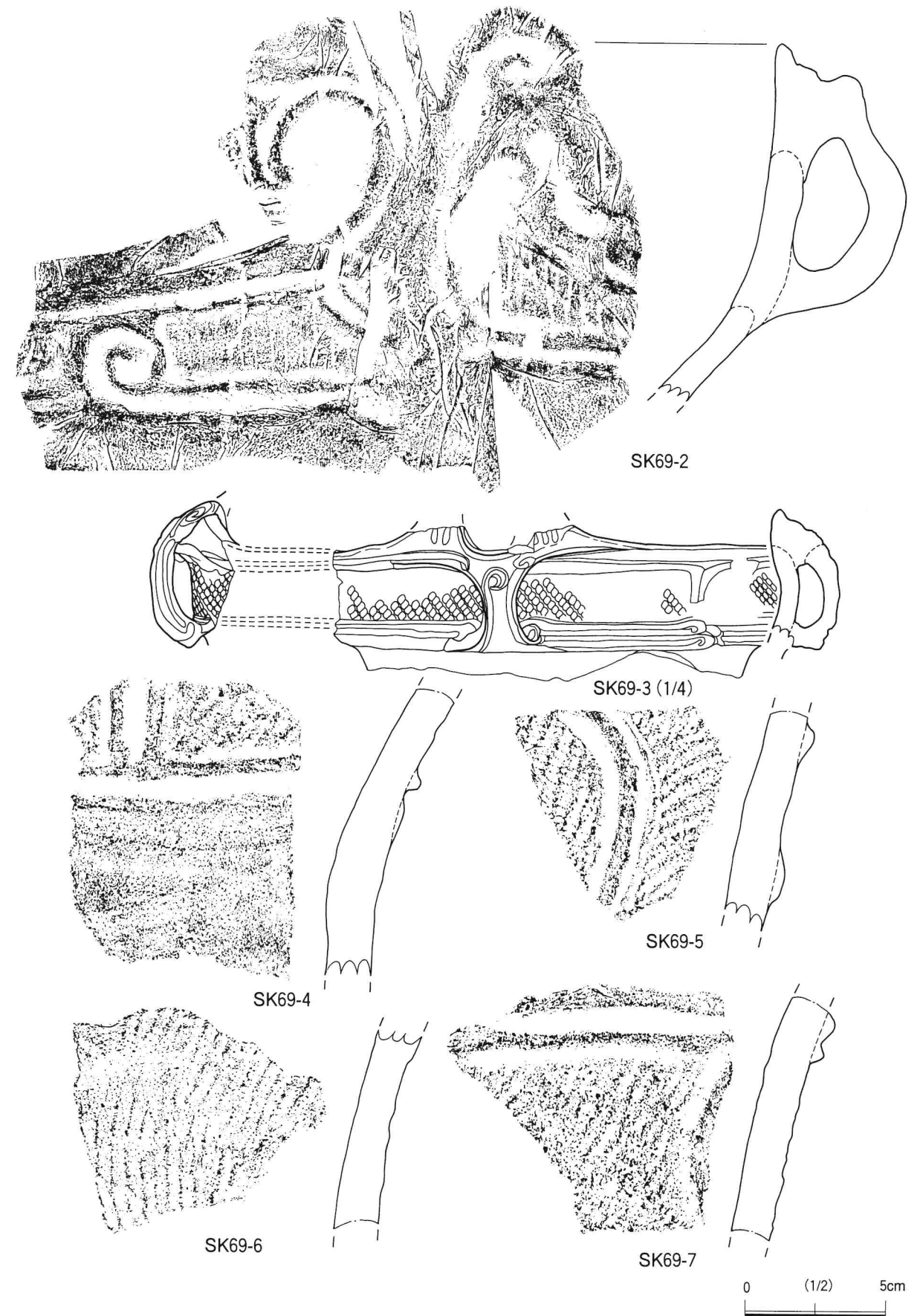
第44図 2区土坑出土土器（4）



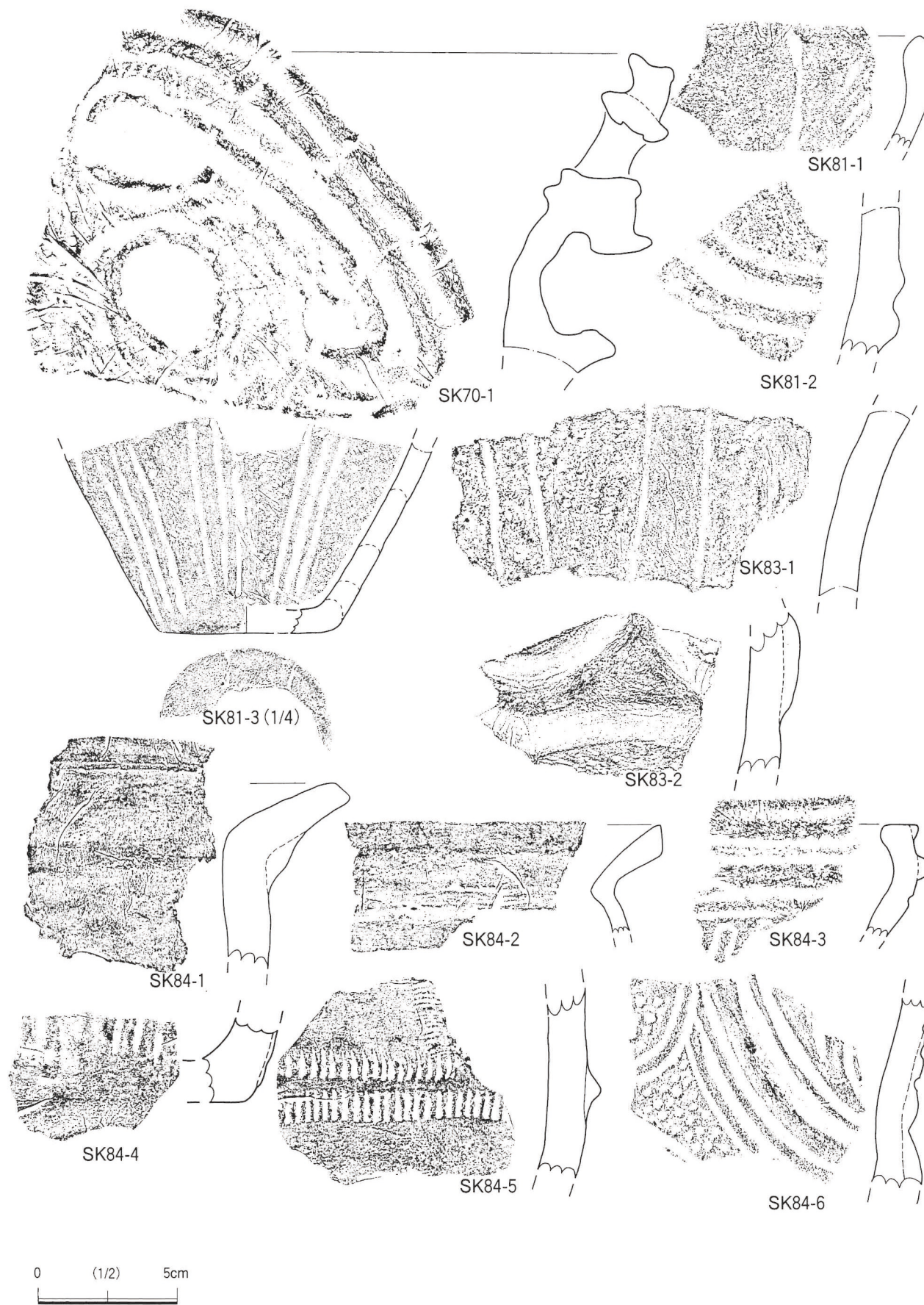
第45図 2区土坑出土土器（5）



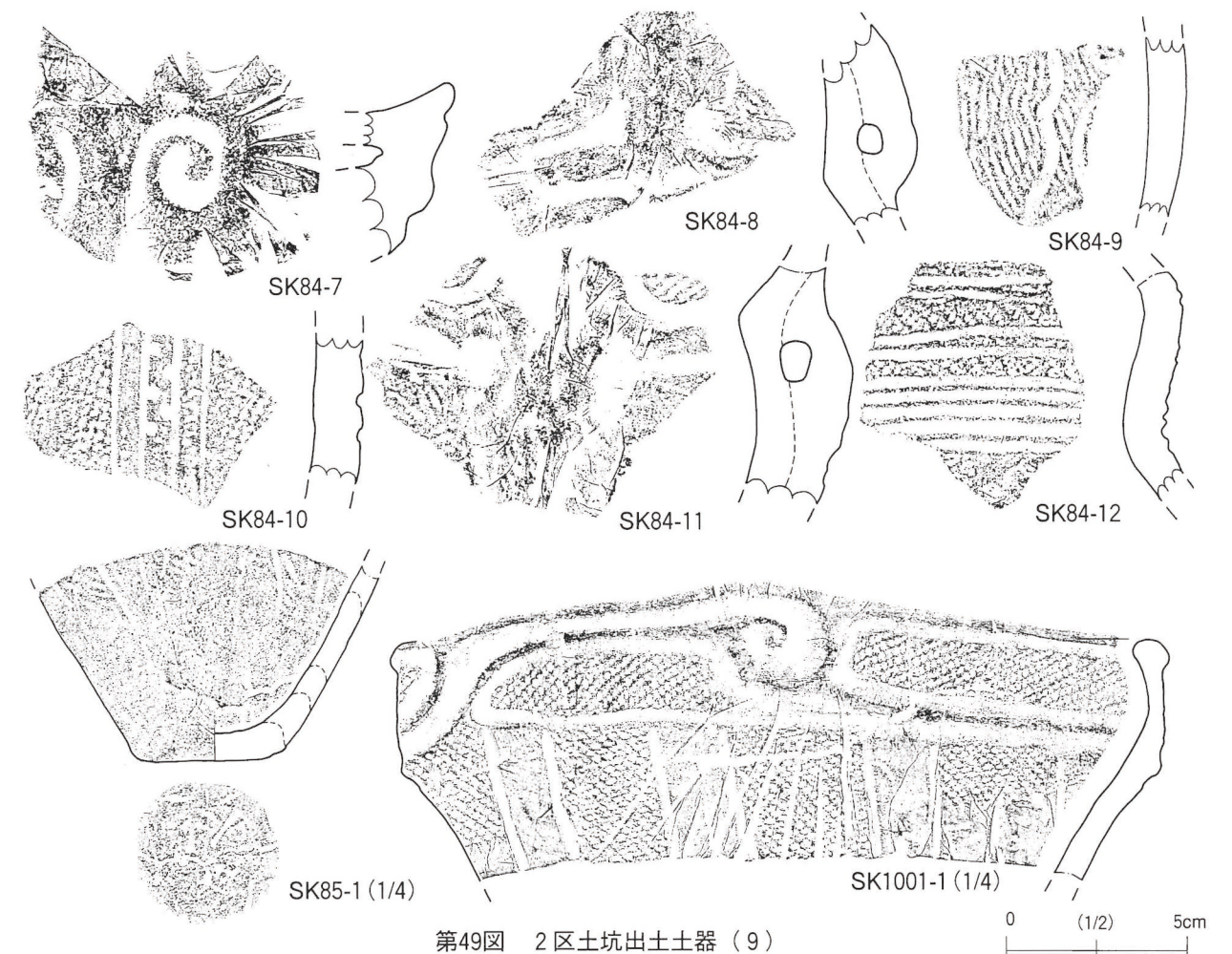
第46図 2区土坑出土土器（6）



第47図 2区土坑出土土器（7）



第48図 2区土坑出土土器（8）



第49図 2区土坑出土土器（9）

以下の文章は、添付CD-ROM中にある2区の土器・土製品についての一覧表を補うものである。

2区出土土器の保存状態はあまり良くなく、表面が荒れているものが多い。各型式の概要は、次の通りである。勝坂式はほとんど無い。阿玉台式は新しい段階のものが少量出土している。加曽利E1併行期の土器は、多様であるが数は少ない。加曽利E2式は口縁部文様帯や胴部などを、縄文ではなく撚糸や沈線で充填しているものが多く、当地の地域性を感じさせる。

胎土には、結晶片岩を含むものが目につくが、特に雲母を多く含む結晶片岩、いわゆる雲母片岩が多い。こうした土器胎土中の結晶片岩の粒は、全て層理に沿って割れた、角張った細長い破片であり、川砂とは考えられない。人為的に破碎加工した結晶片岩である可能性が高いと考えられる。さらに、長石・石英粒も角張ったものが多い一方で、チャート粒はおおむね摩滅した川砂である。こうしたことから、チャートも含まれる土器胎土は、藤岡産などの鎭川以南流域の粘土を使った可能性があるものの、結晶片岩のみが含まれる土器については、後で胎土に混入した可能性が高いものと考えられる。

土製品は2点出土している。SI14の床面から出土した有孔土製品は、一応垂飾と考えておきたい。胎土と伴出土器からみて、阿玉台式に伴うものと考えられる。重さは約30gである。SI42出土の耳飾りは表面が風化して荒れているため、彩色があったかどうかはわからない。外径は中央部で1.4cm、外縁で1.8cm。重さは約3gである。加曽利E2式前後の時期のものであろう。

SI41からは、多量の土器が出土している。おおむね加曽利E1～E2式の時期のものであるが、No6は勝坂式、No24は、阿玉台式の特徴を残す土器である。なお、No25～27は本遺跡の加曽利E式の中では新しい段階のものである。調査時の所見では、住居跡に伴う土坑（埋甕）から出土したとされているが、あるいは住居跡を切って構築された土坑（埋甕）であったのかもしれない。

(3) 石器

2区縄文時代遺構から出土した定型的石器について、以下に報告する。まず、図版順に各種石器について説明していきたい。

第50図-1～14は石鏃である。すべて凹基無茎鏃である。黒曜石製のもの（7・8・12）やチャート製のもの（3・14など）は概して小形であり、安山岩など地元石材を使用したものには、小形のものと大形のものとがある。この傾向は石材の規制によるものであろうが、2のように特に大形のものについては、狩猟対象物が小形の石鏃とは異なっていた可能性もある。

第50図-15～17は石錐である。15は、機能部分の断面形が厚い凸レンズ状であるが、16は薄く扁平であり、あるいは粗製の石鏃の破片かもしれない。17は、石錐の先端部が使用により破損したものと考えたが、あるいは石匙のつまみ部分が破損したものかもしれない。

第50図-18・19はスクレイパーである。いわゆる二次調整剥片と呼ばれるものよりも、定型的な石器である。双方とも両面に調整が施されている。なお、19は石鏃未製品の破片である可能性もある。

第50図-20・21は磨製石斧である。20は、打撃による剥離でたまかな形を整えた後、全体を磨いて整形している。刃部先端は使用により若干欠けており、これが未製品ではなく、完成品であることを示している。21は、いわゆる定角式と呼ばれるもので、良質の石材を用い、丁寧に仕上げられている。刃部には使用痕（線状の摩滅）が観察でき、基部は被熱している。

第51～56図は打製石斧である。合計で119点が出土している。ほとんどが短冊形である。使用により破損しているものが多い。

第57・58図は棒状礫である。第58図-7は、いわゆる短剣形石器であろう。

第59図-1～8は磨石・凹石である。1～7の資料は、くぼみと磨痕の双方が残されているので磨石兼凹石とも呼ぶべきか。8は球形に近い形状であり、他の資料とは明らかに異なる。

第59図-9～11は、敲石である。いずれもやや硬質な石材を用いており、敲打痕ではなく、打撃による剥離が観察できる。石質は磨製石斧と似ており、磨製石斧の未製品（というより素材）が含まれている可能性もある。

第60図は、石皿である。6点が出土しているがすべて破片である。どの資料にも凹孔が観察できるが、特に2の裏面には多孔石のような無数の孔が観察できる。

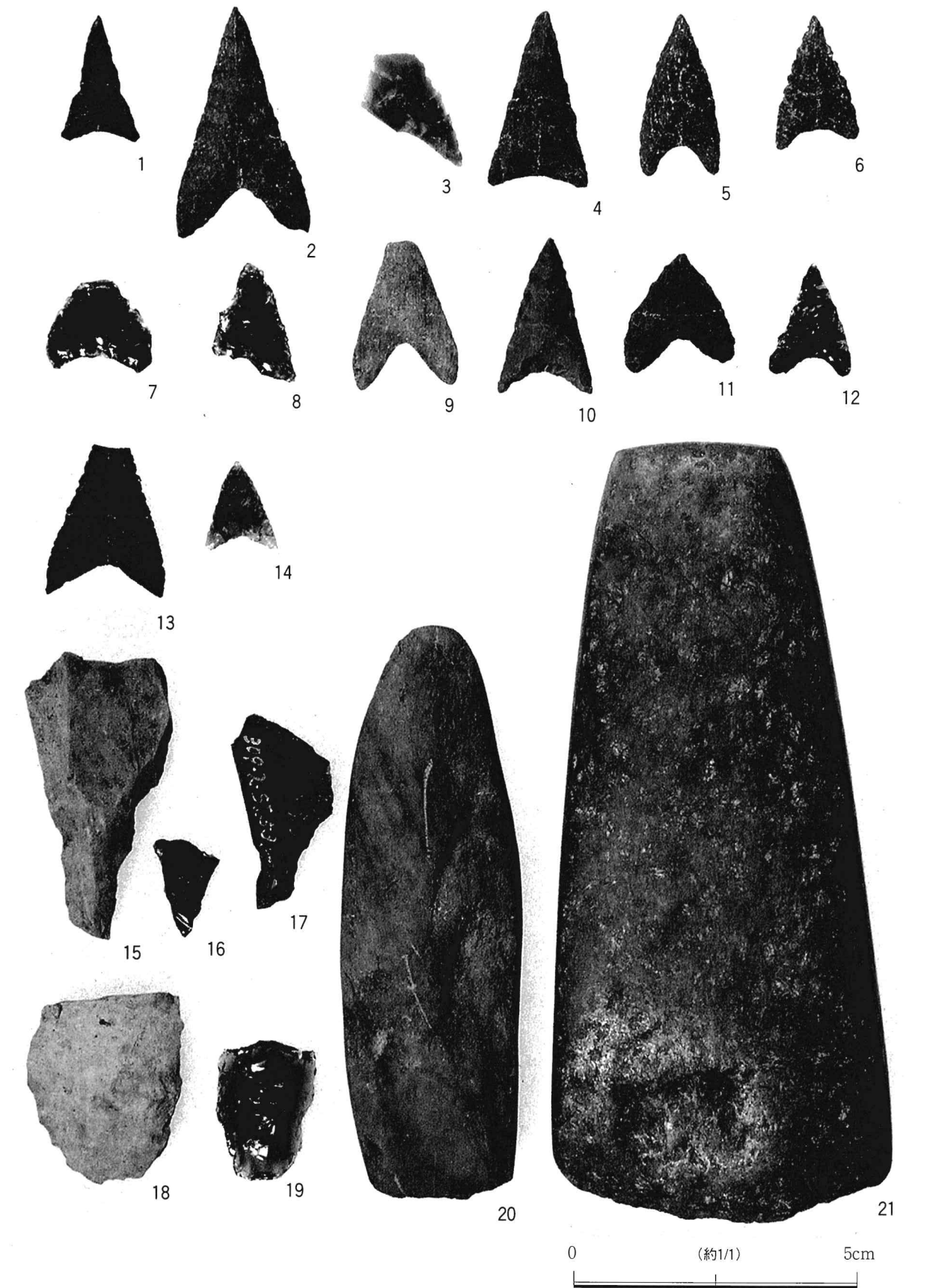
第61図は、多孔石である。2点のみと出土量は少ない。

これら石器の組成について、居住域である2区と土坑群である3区で、どのような違いがあるか、興味を引くところである。概括すると、共通点としては2区・3区とも土掘り具と考えられる打製石斧が最も多く、棒状礫がこれに次いで多い。打製石斧が多いのは、縄文時代中期の遺跡に一般的な傾向である。

2区と3区の相違点は、狩猟具と加工具である。2区では、石鏃が13点と一定数出土しているのに対し、3区ではわずかに2点しか出土していない。また、石皿は、3区で13点出土しているのに対し、2区では6点と少なく、多孔石も、3区で15点出土しているのに対し、2区では2点しか出土していない。

こうした点をどう解釈するかが問題となる。石鏃については、3区土坑群が貯蔵穴であるとすれば、少ないことの説明がつく。また、関東地方の当該時期の遺跡では、一般的に石鏃を副葬する例は少ないため、仮にこれらが墓穴だとしても矛盾はない。全く別の理由としては、2区がオープンな場所で、かつ相対的に時間的余裕がある中で調査されたのに対し、3区土坑の調査が狭い土坑を対象に行われたことから、サンプリングエラーのあったことも考慮される。簡易的な水洗選別作業の実施は、破壊される遺跡の記録保存を保証するとともに、石器組成論研究の前提としても必要不可欠であろう。

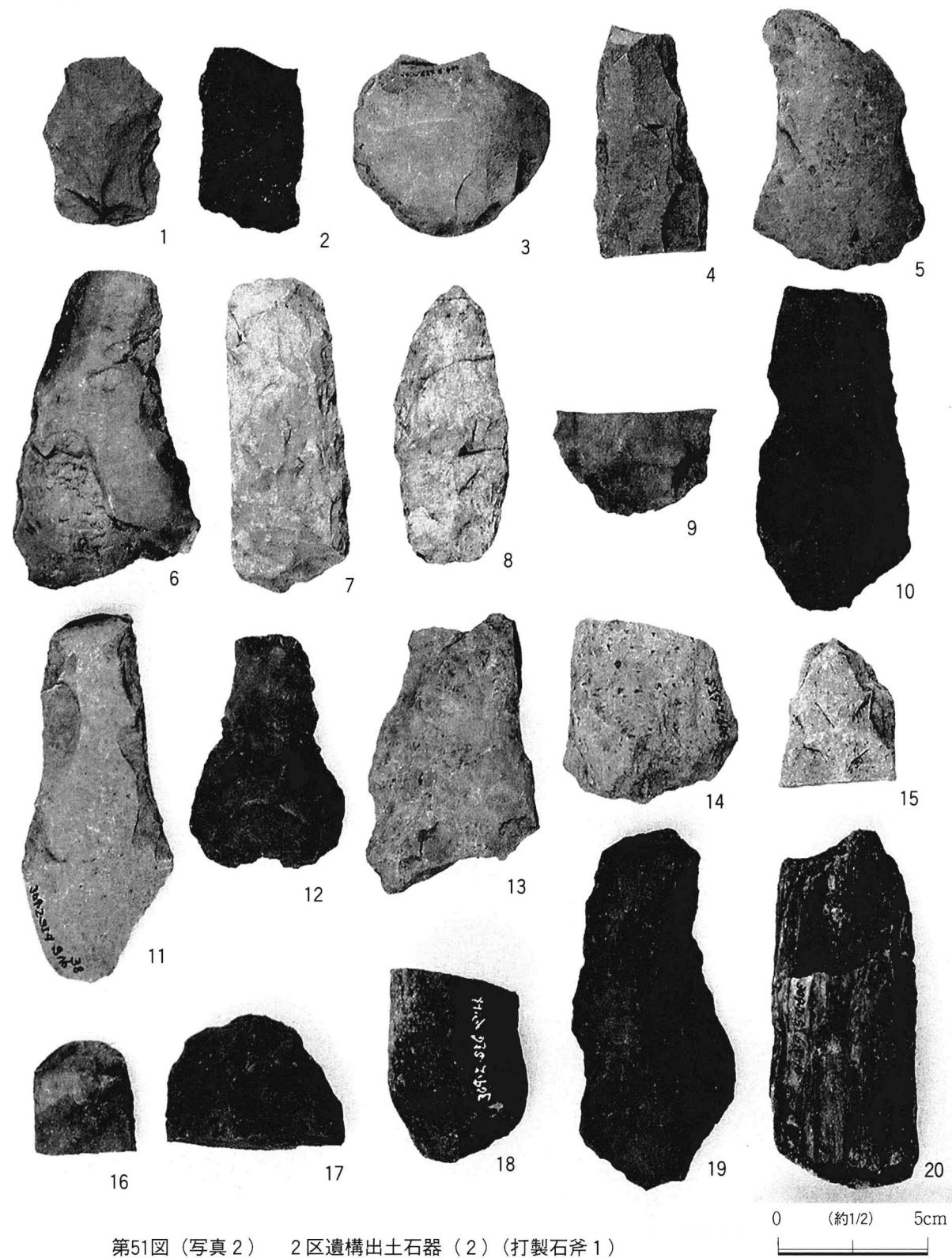
石皿と多孔石については、2区よりも3区から多く出土している。出土状況は、破損したものが、手頃な大きさの自然石などとともに土坑底面近くから発見されたケースが多い。これを一概に廃棄された結果と結論づけることはできないが、少なくとも石皿・多孔石という器種が、本来の機能を失っていたことは間違いなく、石皿・多孔石が使用中の状態で見つかったわけではない。



第50図（写真1） 2区遺構出土石器（1）（石鏃・石錐・スクレイパー・磨製石斧）

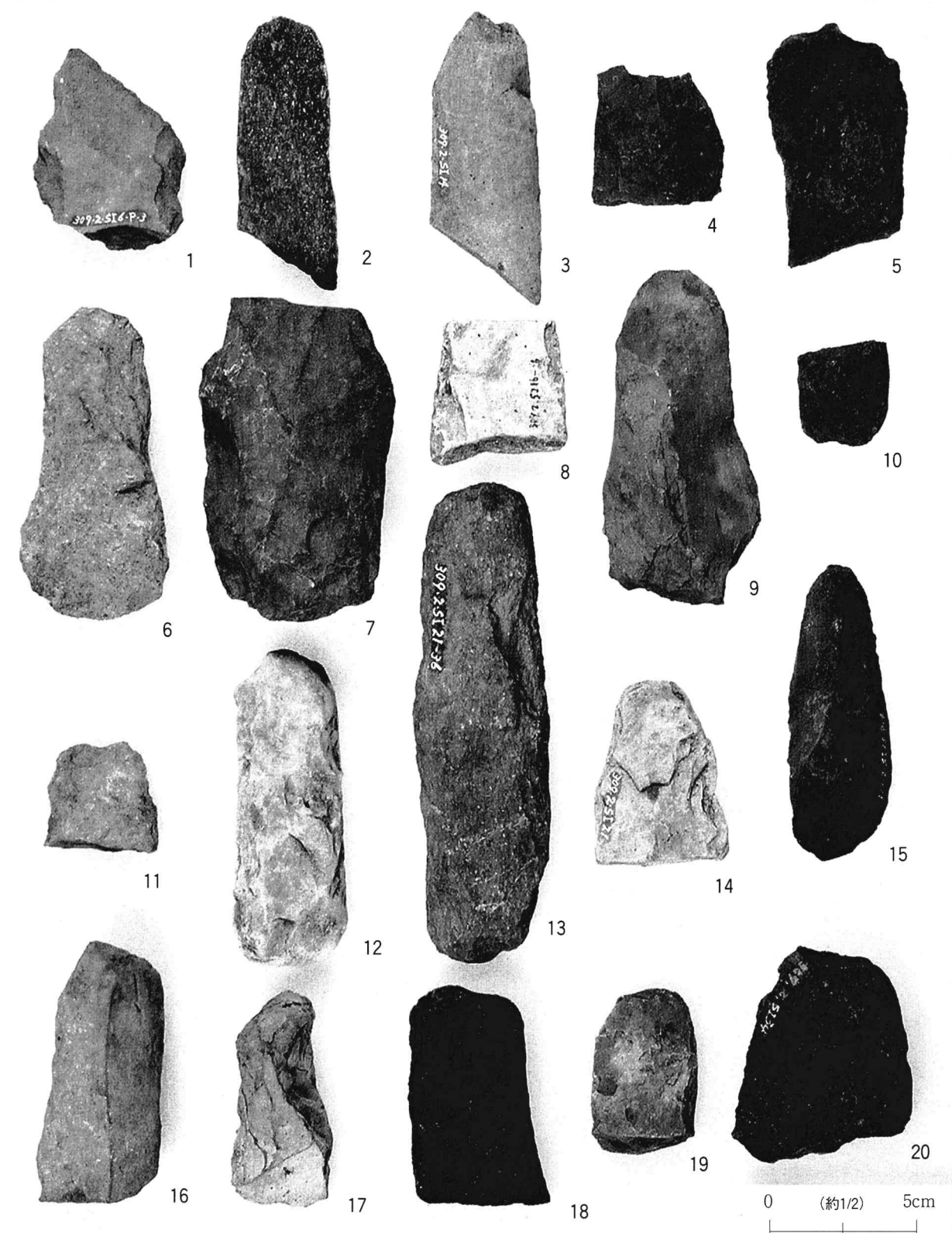
No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
遺構	SI34	SI34	SI35	SI41	SI41	SI41	SI41	SI41	SI41	SI42	SI43
重量	0.5	2.8	0.9	2.2	1.8	0.8	0.8	0.8	1.3	1.2	1.1
石質	黒色安山岩	黒色安山岩	チャート	黒色安山岩	黒色安山岩	黒色安山岩	黒曜石	黒曜石	黒色安山岩	珪質頁岩	黒色安山岩

No	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	
遺構	SI48	SK17	SK46	SI32	SI34	SI53	SI53	SI68	SI41	SI49	
重量	0.5	1.5	0.5	11.6	0.5	2.8	6.8	2.7	66.9	394	
石質	黒曜石	黒色安山岩	チャート	珪質頁岩	黒曜石	チャート	珪質頁岩	黒曜石	変玄武岩	変はんれい岩	



第51図(写真2) 2区遺構出土石器(2)(打製石斧1)

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
遺重	SI2④	SI2④	SI2⑤	SI2⑤	SI2⑤	SI2①	SI3②	SI3③	SI3①	SI4⑤
量	22	34	78	68	100	138	120	63	35	124
質	黒色頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	デイサイト	硬質泥岩	硬質泥岩	硬質泥岩	硬質泥岩	珪質頁岩	珪質頁岩
No	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
遺重	SI4④	SI4⑥	SI4⑦	SI5⑤	SI5⑤	SI6⑤	SI6⑤	SI6⑦	SI6⑤	SI6⑥
量	76	42	68	87	27	16	51	97	79	134
質	デイサイト	珪質頁岩	硬質頁岩	硬質頁岩	デイサイト	硬質頁岩	珪質頁岩	砂岩	珪質頁岩	緑質頁岩



第52図(写真3) 2区遺構出土石器(3)(打製石斧2)

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
遺重	SI6⑥	SI14⑤	SI14⑤	SI14⑥	SI15⑥	SI15⑤	SI16⑧	SI16⑤	SI17⑨	SI17⑥
量	49	44	58	40	102	90	298	41	142	13
質	珪質頁岩	黒色頁岩	細粒輝石安山岩	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	細粒輝石安山岩	硬質泥岩	珪質頁岩
No	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
遺重	SI21⑥	SI21⑥	SI21⑥	SI21⑦	SI25⑤	SI32⑦	SI32⑤	SI32⑦	SI34⑩	SI34⑩
量	15	77	200	72	69	104	48	84	29	77
質	硬質泥岩	細粒輝石安山岩	変玄武岩	細粒輝石安山岩	珪質頁岩	珪質頁岩	黒色安山岩	珪質頁岩	硬質泥岩	珪質頁岩



第53図(写真4) 2区遺構出土石器(4)(打製石斧3)

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
遺重	SI34⑬	SI34⑭	SI34⑭	SI34⑮	SI34⑯	SI34⑰	SI34⑱	SI34⑲	SI34⑳	SI34㉑
量g	66	42	134	102	104	132	74	67	73	39
石質	硬質泥岩	珪質頁岩	珪質頁岩	黑色頁岩	珪質頁岩	硬質泥岩	珪質頁岩	珪質頁岩	細粒輝石安山岩	細粒輝石安山岩

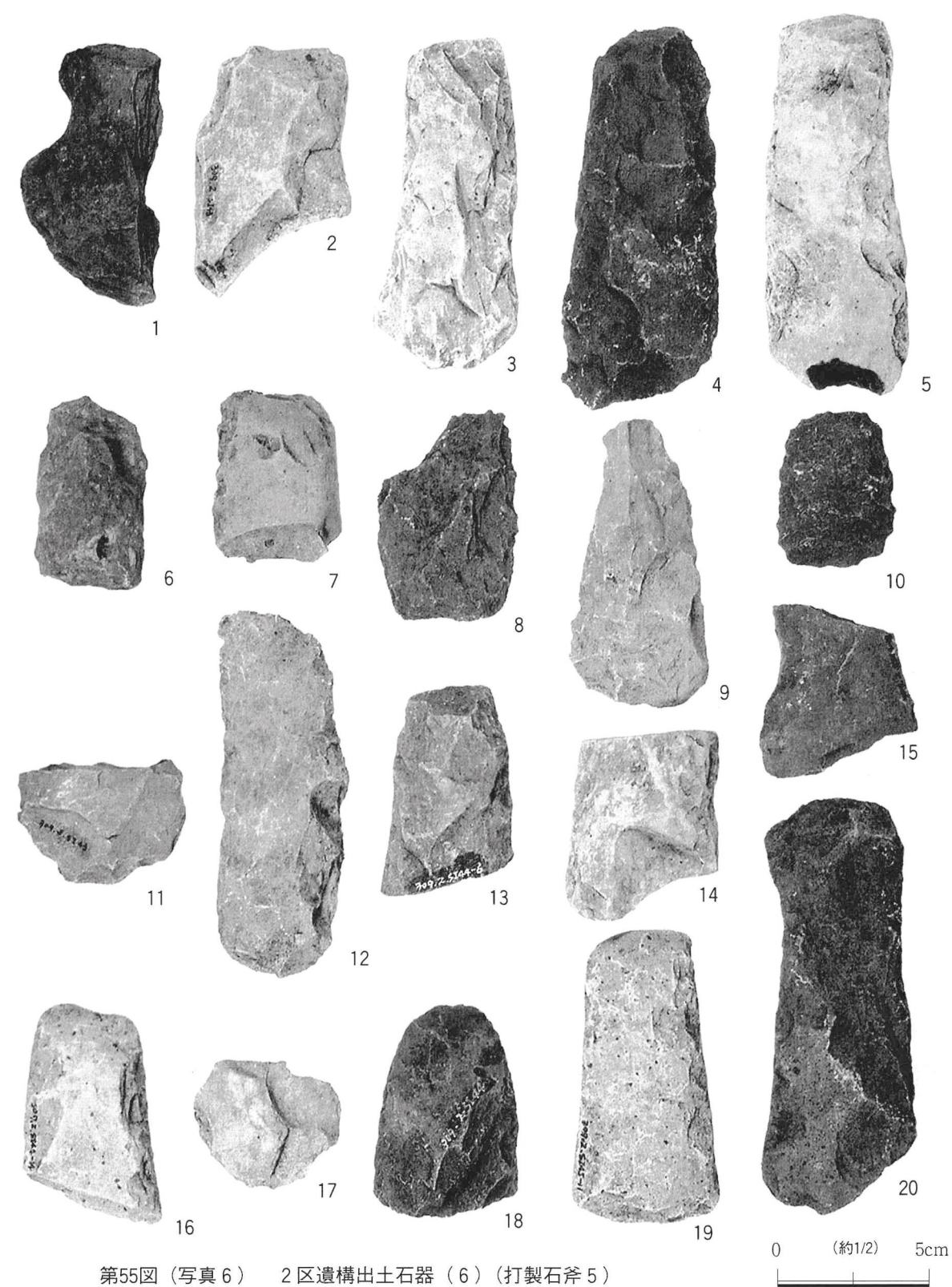
No	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
遺重	SI34㉒	SI35㉓	SI35㉔	SI37㉕	SI37㉖	SI38㉗	SI38㉘	SI38㉙	SI39㉚	SI40㉛
量g	33	162	6	73	126	102	28	16	49	122
石質	細粒輝石安山岩	變玄武岩	珪質頁岩	硬質泥岩	流紋岩	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	粗粒輝石安山岩	細粒輝石安山岩



第54図(写真5) 2区遺構出土石器(5)(打製石斧4)

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
遺重	SI41㉜	SI41㉝	SI41㉞	SI41㉟	SI41㊱	SI41㊲	SI41㊳	SI41㊴	SI41㊵	SI41㊶
量g	42	50	110	53	246	90	160	72	72	148
石質	硬質泥岩	珪質頁岩	砂岩	珪質頁岩	硬質泥岩	硬質泥岩	流紋岩	珪質頁岩	黑色頁岩	珪質頁岩

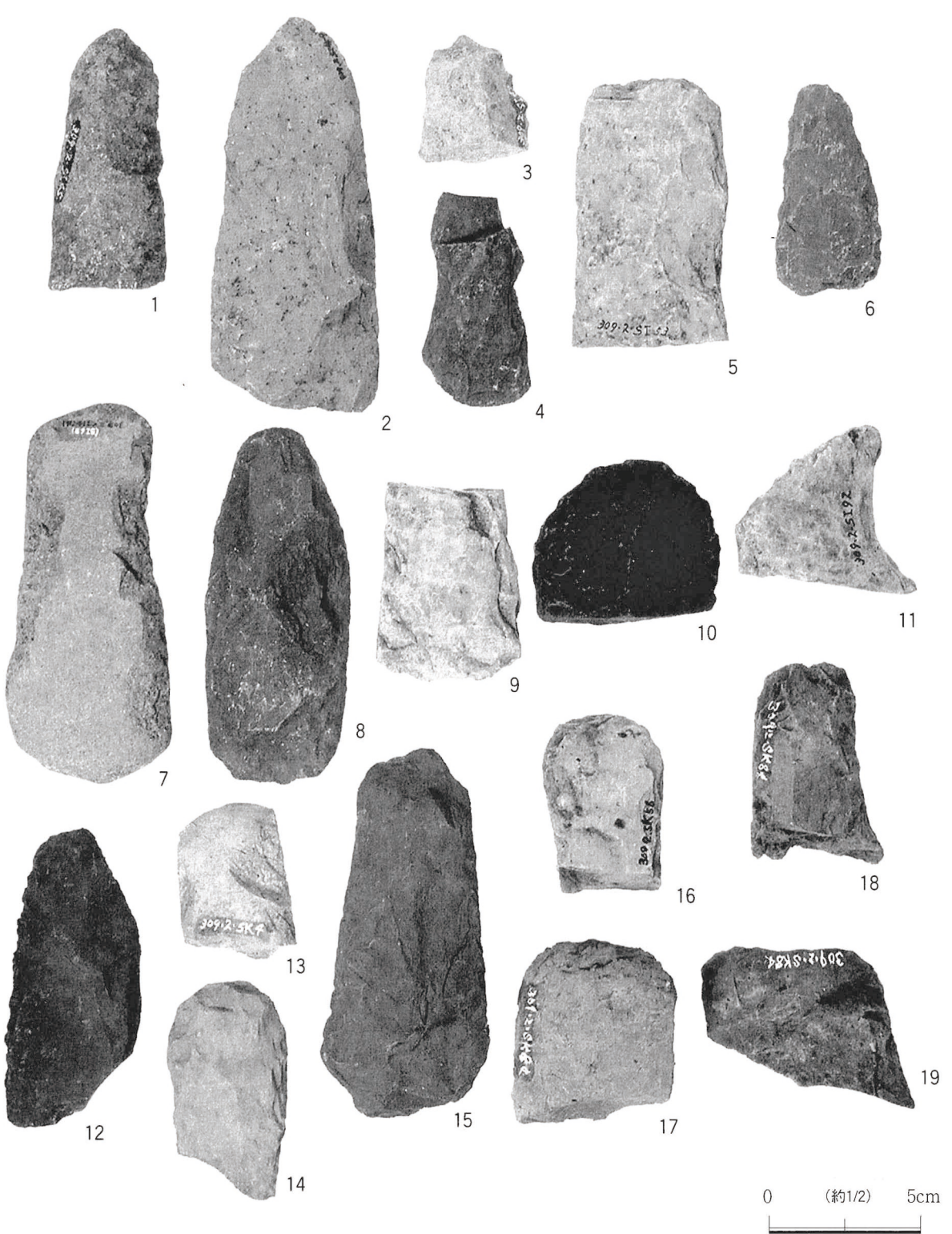
No	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
遺重	SI41㊷	SI41㊸	SI41㊹	SI41㊺	SI41㊻	SI41㊼	SI42㊽	SI42㊾	SI42㊿	SI42㉀
量g	69	62	79	85	90	72	230	94	95	71
石質	珪質頁岩	細粒輝石安山岩	細粒輝石安山岩	細粒輝石安山岩	細粒輝石安山岩	細粒輝石安山岩	硬質泥岩	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩



第55図 (写真6) 2区遺構出土石器(6)(打製石斧5)

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
遺構	SI43⑨	SI43⑦	SI43⑦	SI43⑨	SI43②	SI43⑤	SI43⑤	SI43⑦	SI43⑦	SI43⑤
重量	59	120	126	128	150	53	51	36	77	27
石質	珪質頁岩	細粒輝石安山岩	細粒輝石安山岩	珪質頁岩	細粒輝石安山岩	珪質頁岩	珪質頁岩	珪質頁岩	硬質泥岩	黒色安山岩

No	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
遺構	SI43⑤	SI44③	SI44③	SI44③	SI44③	SI44⑩	SI44③	SI44⑤	SI45⑩	SI45⑩
重量	21	110	80	64	51	58	28	93	86	152
石質	珪質頁岩	硬質泥岩	デイサイト	流紋岩	珪質頁岩	細粒輝石安山岩	硬質泥岩	硬質泥岩	細粒輝石安山岩	細粒輝石安山岩



第56図 (写真7) 2区遺構出土石器(7)(打製石斧6)

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
遺構	SI45⑩	SI48②	SI49⑩	SI53⑩	SI53⑩	SI53⑩	SI68⑩	SI68⑩	SI90⑩	SI90⑩
重量	86	198	35	27	136	18	194	206	64	72
石質	砂岩	細粒輝石安山岩	硬質泥岩	珪質頁岩	デイサイト	珪質頁岩	デイサイト	珪質頁岩	細粒輝石安山岩	珪質頁岩

No	11	12	13	14	15	16	17	18	19
遺構	SI92⑩	SK69⑩	SK4⑩	SK21⑩	SK25②	SK56⑩	SK84⑩	SK84⑩	SK84⑩
重量	80	69	44	57	134	64	144	81	81
石質	細粒輝石安山岩	珪質頁岩	変玄武岩	硬質泥岩	珪質頁岩	デイサイト	黒色安山岩	硬質泥岩	珪質頁岩



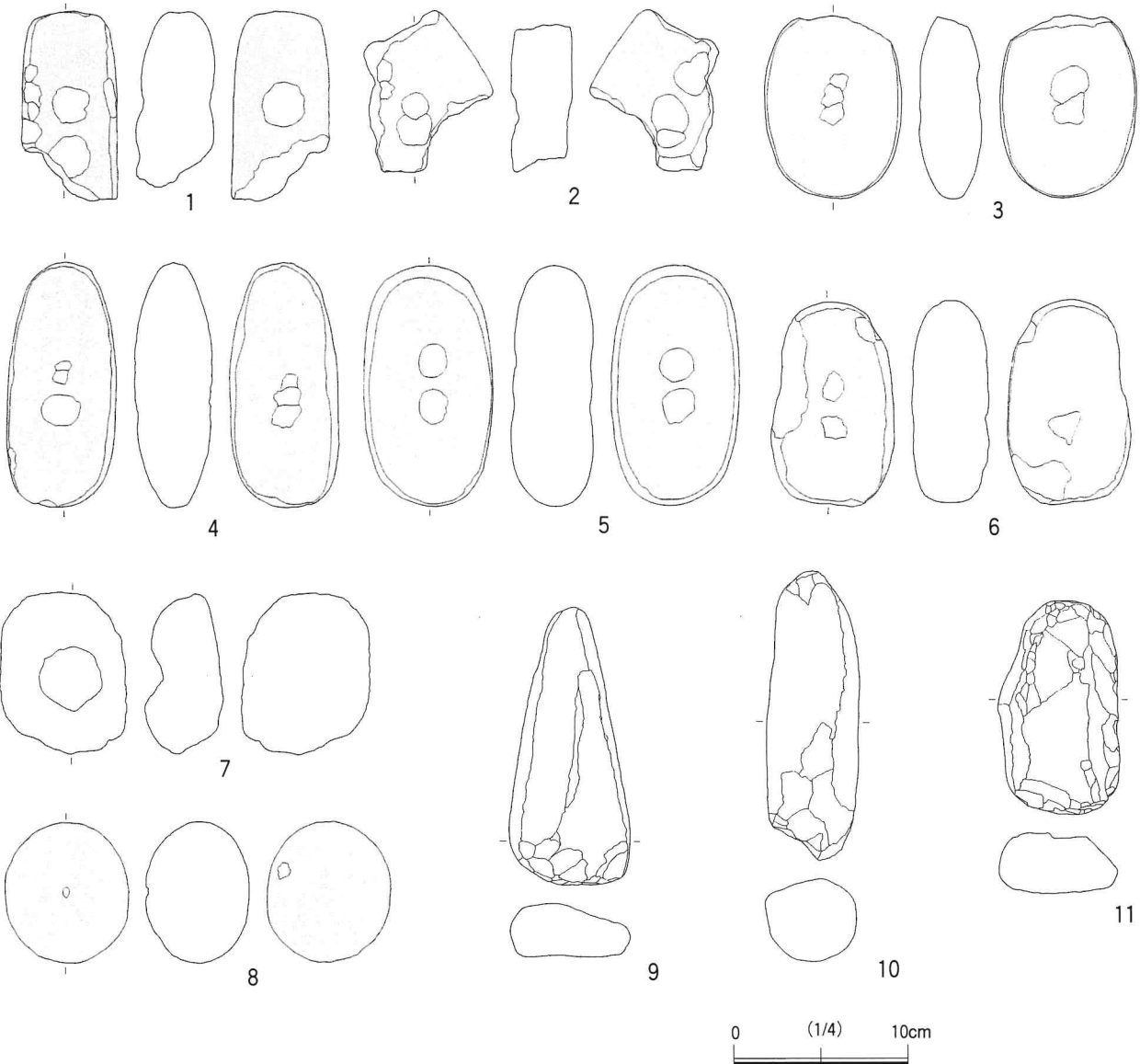
第57図 2区遺構出土石器（8）（棒状礫1）

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺構	SI2⑥	SI3⑬	SI3⑭	SI3⑮	SI3⑯	SI5⑦	SI14⑧	SI17⑫	SI17⑬	SI35①	SI35②	SI35③
重量 g	308	360	152	65	20	274	36	51	106	91	124	2550
石質	緑色片岩	雲母石英片岩	黒色片岩	雲母石英片岩	黒色片岩	雲母石英片岩	雲母石英片岩	雲母石英片岩	緑色片岩	緑色片岩	黒色片岩	黒色片岩



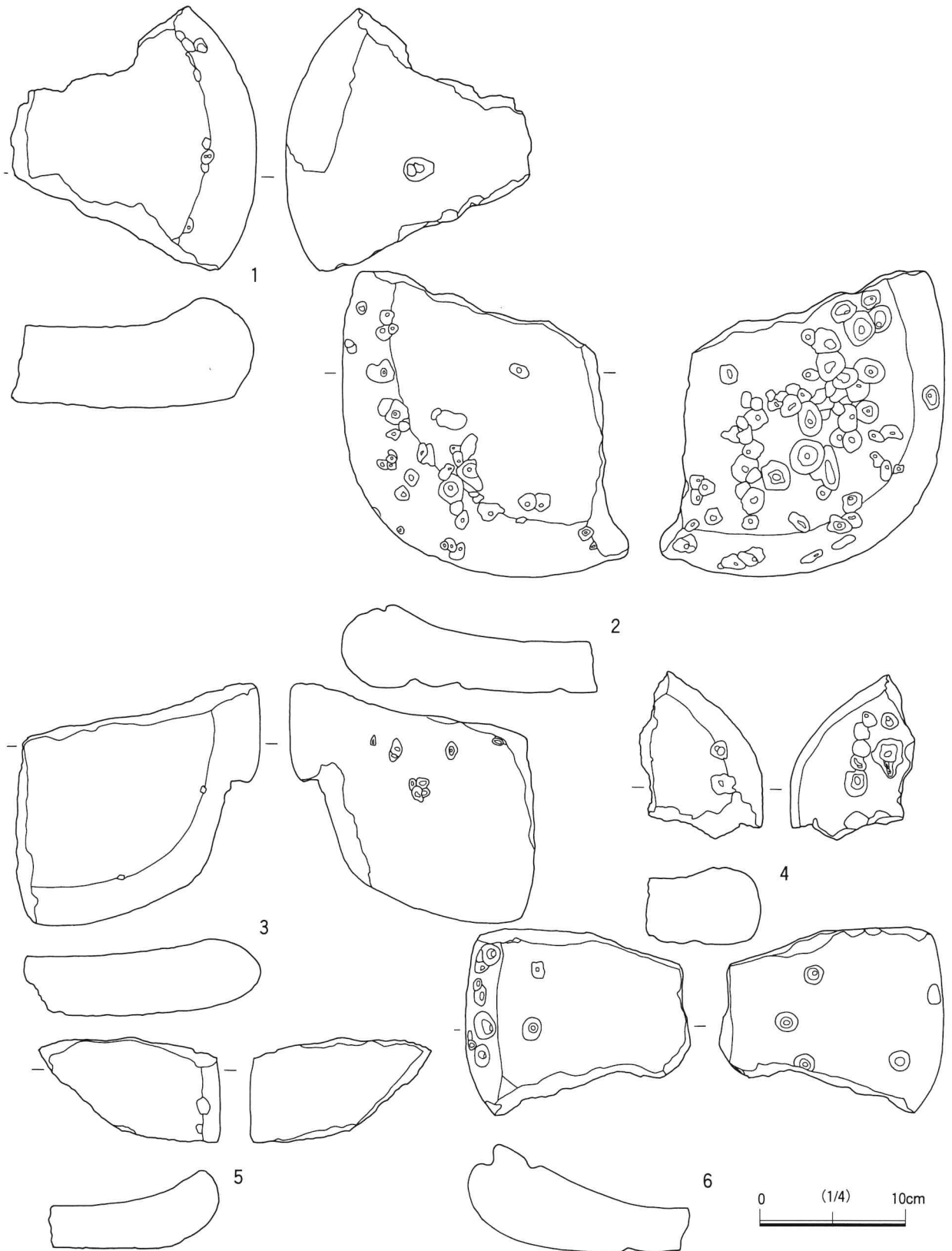
第58図 2区遺構出土石器（9）（棒状礫2）

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
遺構	SI41⑩	SI42②	SI42③	SI43⑬	SI43⑰	SI44⑤	SI48③	SI49④	SI68⑫	SK32③	SK60⑨	SK60⑪
重量 g	194	168	52	71	18	72	41	92	92	234	35	66
石質	珪質準片岩	緑色片岩	黒色片岩	黒色片岩	黒色片岩	雲母石英片岩	黒色片岩	雲母石英片岩	黒色片岩	緑色片岩	黒色片岩	雲母石英片岩



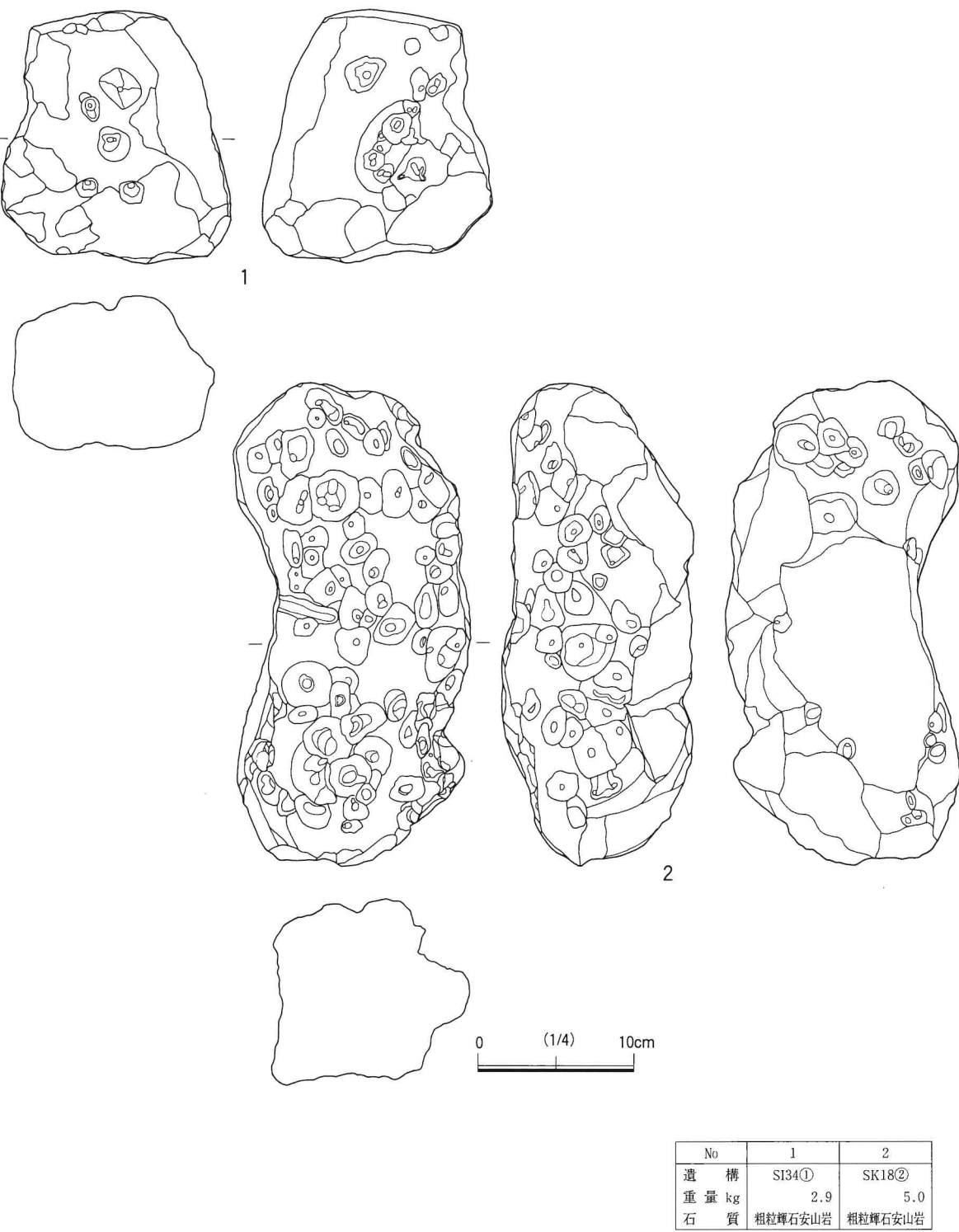
No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
遺 構	SI25⑥	SI25⑦	SI34②	SI41⑤	SI42⑨	SI43④	SI45①	SK26⑧	SI53⑫	SI68⑩	SK26⑪
重 量 g	384	214	396	615	790	565	324	440	620	590	494
石 質	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	デイサイト	変玄武岩	変玄武岩	珪質頁岩

第59図 2区遺構出土石器（10）（磨石・凹石・敲石）



第60図 2区遺構出土石器（11）（石皿）

No	1	2	3	4	5	6
遺 構	SI41③	SI49⑤	SK18④	SK28①	SK70②	SK77⑥
重 量 g	2160	2680	1610	464	436	1290
石 質	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩	粗粒輝石安山岩



第61図 2区遺構出土石器 (12) (多孔石)

第Ⅲ章 3区の遺構・遺物

第1節 3区の遺構

(1) 概要と基本土層

3区は標高約77～78m。緩やかにくぼむ谷状の地形に沿って、土坑が79基検出された。

土坑からは総じて大量の土器・石器が出土したが、出土遺物の多い土坑と少ない土坑がある。また、この土坑出土土器の時期は、おおむね加曽利E1～E2式併行期であり、2区よりも時期が限定される傾向がある。

なお、土坑を覆う砂層からも、彩色土器を含む中期中葉の土器破片や打製石斧などの石器が大量に出土したため、遺構確認のためのジョレンがけは、さながら遺物を採集する潮干狩りのような様相を呈した。

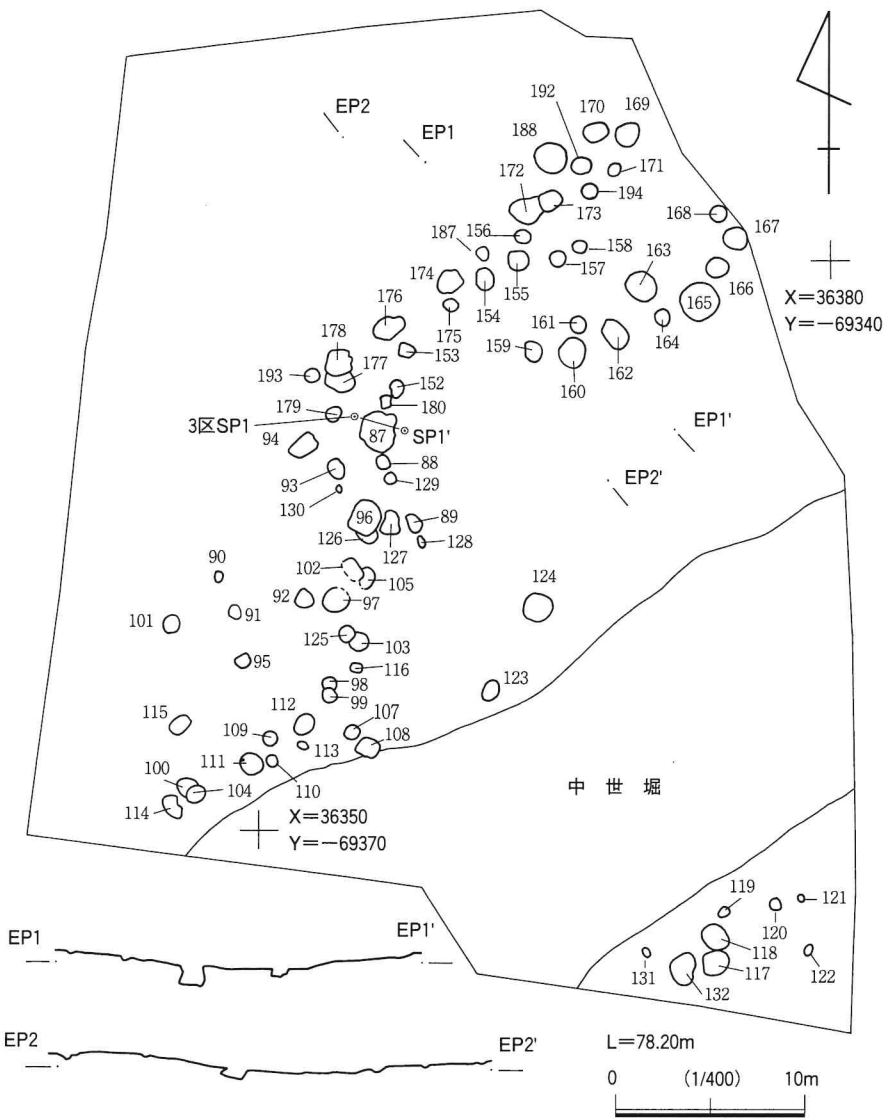
これら砂層出土の遺物は、遺構外出土資料であると判断したため、今回、彩色土器を除き報告していない。

3区の遺構は、この砂層にパックされていたため、確認作業は比較的容易であった。

この遺構確認面は、わずかに水力に削られたほかは、ほぼ当時の構築面であると考えられ、土坑の深さも、ほぼ構築時のままであると考えられる。

3区の、遺構が構築されている地山は、2区と同じ井野川泥流堆積物であるが、谷地形だったため水づきで、酸化しなかったと見え、色調が白っぽく粘土質である。この泥流堆積物が堆積した年代に関しては、SK174底面から出土した炭化物を、放射性炭素年代測定した結果、BP12,350±110という数値がでている。SK174からは縄文時代中期の土器が出土していることから、この炭化物は遺構に伴うものではなく、地山である井野川泥流に由来するものと考えられる。

なお、この3区の右下を北東－南西方向に走るのは、中世城館址に伴う掘である。近年まで谷地形として残っていたとみられ、覆土上層は昭和40年代圃場整備時のものとみられる客土で埋め戻されている。



第62図 3区遺構配置図